

特 8

146

織田 明智  
本能寺合戦

放牛舎 桃林 講演



097633-000-1

特8-146

本能寺合戦 (織田明智)

放牛舎 桃林 / 講演

M30

DBS-1566



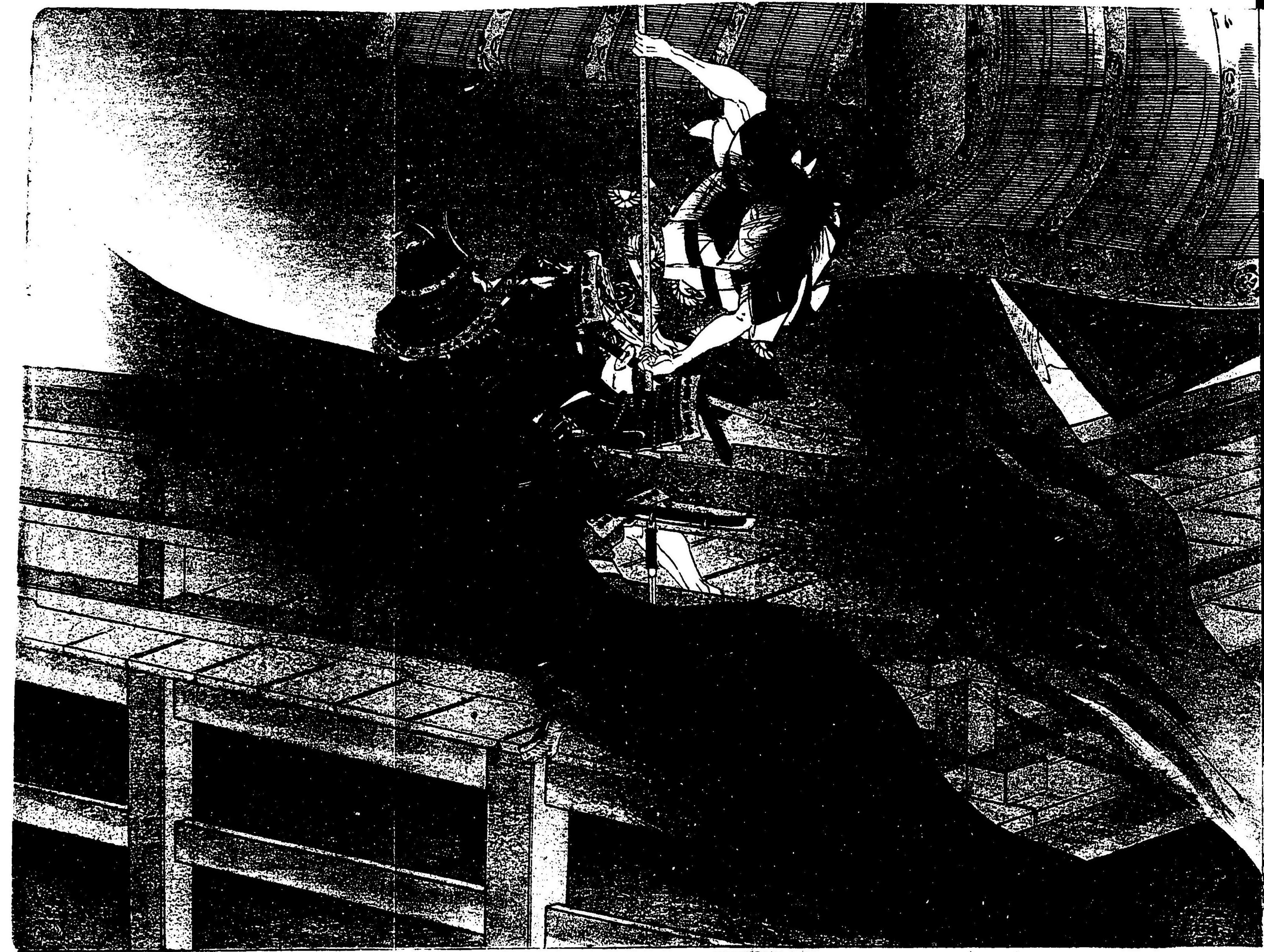
明神田本能寺合戦序

光秀兵を中國に出すと號し武裝あり發するは臨み鞭  
を以て東を指し揚言して曰く我が敵は本能寺に在り  
と光秀をして此言を爲さしむる所以の者は蓋し何づ  
れに存するや光秀の罪か信長の罪か臣にして君を弑  
するは罪の大なる者かれども其依て來る所を推究せ  
ば信長是れが種子を作るは非ざるか君の臣を見る尙  
は父の子を見るが如く能く其癖を知つて使役せずん  
ばあらず太平の時にして然り況んや戰國の時昨の君  
臣は今の怨敵たるの日は當りてや信長性短慮にして  
忠言を容るゝ乏し幸にして秀吉が如き大豪傑を麾下

一集むるを以て一時諸侯一覇たりしも天下を治むる者は天下を治むるの大度かかるとべからず只た強勢を以て是一臨めは往々事を破ふる一至る信長不世出の勇を以て天下を繼承すと雖も永く此が統治を行ふ能はざる所以ハ誠一遺憾一堪へされども蓋し短慮功を爲さずの確言一あらずして何ぞや嗚呼天あり命あり矣書して以て一言を贅す

明治丁酉の春

好戦痴史誌



本 能 寺 合 戦

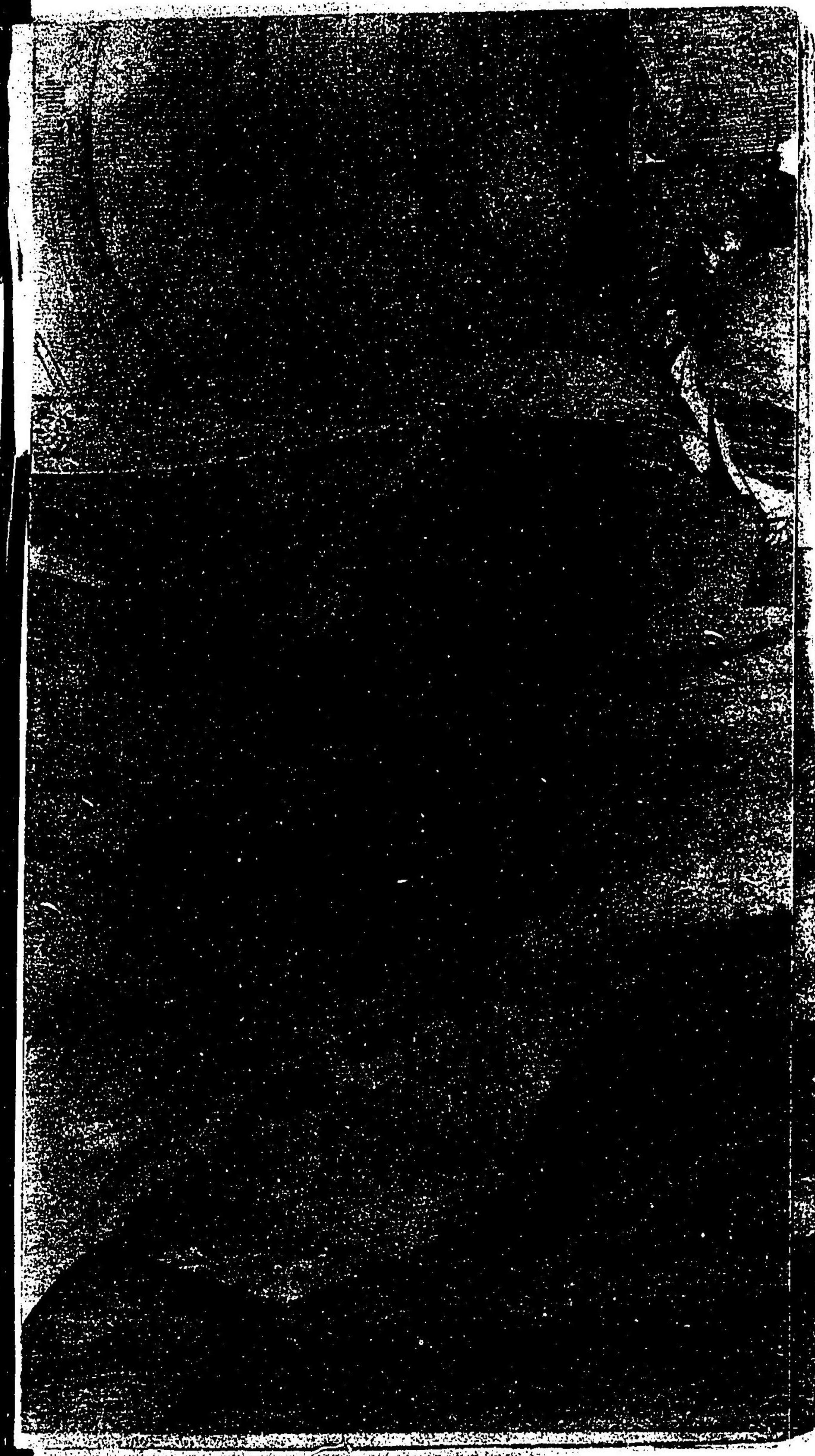
織田本能寺合戦

放牛舎 桃林 講演  
石原 明倫 速記

第 一 回

光秀始めて織田を仕ふ  
信長征して武田を滅す

我が日本の開闢はじまりより此來國々戦争の禍わひありと雖も是れ以て世の人の資力を顯はすべきものにして亂究まッて治とあり治極まッて亂とある此れ天地開けてよりの自然の道理よして造化の上よも必らずあるものでございませすが餘り文よばかり流れてをりませれば武が衰へまするよより是れがため亂を以て又た人の眼りを覺し文武二ツを全たくせしめんがため此れ何れをか是非とすすべきか中古慶長の頭老人物



本 能 寺 合 戰

語と申すもの、中よ老人三人寄りまして御同様よ斯かる  
國といふの生れ此の年齢よあるまで泰平といふ世を見るこ  
とが出来ません今よ泰平といふ世よありましたら何をして今  
日の活を忍いだものであらふ下申したる証しがございす然  
すれば亂れ馴て見れば矢張り泰平よ居て今日世の中を送ると  
同じやうおもひのございす。往昔天皇御親征のありしに既よ  
日本武尊東夷を御征伐遊ばされ坂上將軍田村麿の鈴鹿山に兎  
賊を退治し是れより益々武力を振つて前九年後三年の戦か  
ひ又保元平治引續いて源平の戦かひ或は嘉吉應仁の亂よ至ッ  
て天下の麻のこども亂れ英雄のこども自然と其の弦の張りか  
手よ戦を捨り案山子よ持たしむる弓も自然と其の弦の張りか  
たへ念を入るゝの亂國よ生れし人の心懸けよて斯くおれ人  
として男の兒産るを手柄とし自づから婦女子よ至るまで其の

本 能 寺 合 戰

装はひも甲斐くしく草莽より起つて一國の主の扱おき或は  
天下の主とやらんことを望む者其の數多て數ふべからず世の  
諺よ此の頃二十八天下と申し各々其の質の國を奪んんが  
策よして必らずしも縁邊を結べ夫れを種で敵を討つことよ  
まで至らしめたるは是れ亂國の習ひといひ言ひあがら淺ましき  
ことでございす然れば佛も地獄、佛も畜生、修羅、天道、聲聞、緣  
覺、佛、菩薩、人界、畜生、唱ひまするが其の修羅道の苦しみよ遇て  
生涯治世を知らずして送る者憐れといふも亦た餘りありで  
ざいす。  
茲よ尾張半國より起つて織田信長、父備後守信秀の一人よし  
て御幼名を吉法師丸と申し其の英敏傍らよ人あきがござし  
既よ此のお方の奥方の美濃國齋藤山城入道道三の娘よして或  
る時信長、尾張より美濃の齋藤の居城稻葉山へ参りました時よ

本 能 寺 合 戰

智入の事あるより料理の勿論配膳のものに至るまで皆奉行  
儀正しきものを撰び最と感服又致して用意又及びまする先づ  
第一は清らかなる折敷の上へ饅頭を盛つて信長の前へ小性恭  
慕しく持ち出だしました時信長起きざま右の手を饅頭二つを  
掴み左りの手にて太刀の帯取りの下緒を掴み切目椽へ起ち出  
でたまひ庭上ある我が顔も咲きはこつたる草木の花を見たま  
ひ饅頭を打ち喰ひ二つの饅頭を代るく噛み散し半ば手よ  
残りしを手又取て庭前へ投げ捨てんとして又た四方を顧りみ  
右の袂へ入れたまふ道三是れを見て斯る愚かお奴どの存せざ  
りしが哀れ至極の白痴者常々臣等が我れを謀めるよ美濃尾  
張と並びし國よて此の信長を敵とせば容易又打つこと得がた  
し然るも依つて此者と縁邊を結びあらば其の因みよ依つて自  
づから信義も厚く舞臺の間柄あれば定めて親しからん然すれ

本 能 寺 合 戰

ハ尾張の君の御領國も同様ありと常々申したるが斯る愚かお  
奴から然までよ心を勞するよ及ばざる事でありし下夫れよ  
り道三の大きい油断を致したゆめ却つて義龍の一子龍興の  
時又至り三日三夜戦かつて遂に信長のため又齊藤の滅亡まし  
た是れもつて普通の人の及ぶ所よあらず然るよ又た信長將軍  
足利義昭を助け三好松永を滅ぼし其の後ち明智重兵衛光秀  
らずも信長よ調し彼れが面魂しひ容易さらざるを知つて御抱  
へよ相成りました此の時羽柴秀吉屢々御諫言を申し上げまし  
た秀彼れの一ト通りあらざる者と私存じまするよより却つ  
て君の御意見と異なる事あらば失禮あがら君の御急性よ渡ら  
せられ稍とも遊ばせば御怒りよ乗じさせられ御打擲あせむ往  
往あらせられ眼の中とやし其の骨格よ顯れをります依つて彼れ  
徹の性質の眼中とやし其の骨格よ顯れをります依つて彼れ

本 能 寺 合 戰

かくとも御當家より柴田、瀧川、丹羽、池田、或は平手、坂井、其の外も  
今一人の豪傑もございますと言つて秀吉横を向いて笑ひまし  
た信長 信「其の一人誰人だ 秀「然れば是れは控えをりまし  
る秀吉でござります 信「ア其方か……大言を吐く奴だぞト却  
つて御機嫌能くあらせられ 信「如何も秀吉能く承たまはれ北  
條、梶原の佞悪も頼朝の世も盛んある時其の本心を現はすこ  
と出来んでいさいか……玄徳の臣も魏延といふ者あり悪人あ  
がらも玄徳世も盛んある時其の彼れが悪事を現はすことあら  
ず然すれば臣下の者を取り扱かふの大将の權もあるものだ予  
が思ふ所あつて彼れを召し抱へるゆゑ必ずや意見を加ふる  
ことおかれト仰せられて遂に光秀へ貳千五百貫の地を賜ひ  
召抱へし相成りました其の後に信長公の命もよつて光秀丹波  
國、雁智山の城主赤井、悪右衛門を責め滅ぼし丹波一州を平均い

本 能 寺 合 戰

たし其の功の著るしきを以て五萬石下し置れ丹州桑田郡龜山  
の城主と相成り受領して日向守とすするやうもある依て早速  
使者をもつて勢州名張へ遣はし吾儕こと當時信長公へ仕へ小  
祿おがら五萬石丹波龜山の主と相成り候ふおひだ先年御約束  
の通り御息女を申し受けたく此段失禮おがら使者をもつて申  
し入れ候ふおりの事あり此の名張の城主の拾貳萬石服部出  
羽守安益此の人元來明智重兵衛が齋藤道三の子義龍と中  
悪く遂に明智の城を責め奪れて所領も離れ浪人となり一度小  
西万兵衛と改め日本六十餘州津々浦々又深山幽谷も分入其  
國々の領主の賢愚強弱を探究し世に武者修行と唱へ然るべき  
主を求仕て家を興さんと思立巡り巡つて勢州名張も至り逗留  
を致てをります然るも服部出羽守より彼れが器量あるを聞  
て城中も招待いたし留置まして且に武藝を試らみ夕に軍

本 能 寺 合 戰

學兵法を論じ盡夜其の人の特得を試むるところ武勇と言ひ思  
慮と言ひ普通の及ぶ所をあらす正人中の龍泥中の連、とい  
ふべき人物あり或る時光秀を一室に招いで酒肴をもつて服部  
氏を應じ照サテ今日お手前より折入て頼みなき仔細をさるが  
是れまでお手前の特得万端もつて慎し強く後年天下は高  
名を揚げたまふゆへ人と慮外あから出羽守威服つかまつる是  
依つて自分分の器量を見込み吾等一人の娘がござる今年十  
八歳に相成る是を貴殿と結婚して御舅の契を結びたい承  
下し置るゝよ於てハ出羽守祝若く存することわざる光秀  
造か下つて低頭平身とおよび 光何ぞと存せしと思ひも寄  
らす當時三界無慮の吾等お手前の天下の諸侯然りあがら斯く  
まで仰せ下し置るゝ段相背きまするも失禮あれば是れより  
國修業をいたし若し天運は協ひ一郡の主とも相成ハ早々人を

本 能 寺 合 戰

もつて貴殿の御息女をやし受け深く親子の御交わり致したけ  
れば夫まで御待下さるべく下堅く約束して遂に名眼を出立し  
て夫れより中國に至り毛利右馬頭元就と對面し是は仕へんと  
試みました然るゝ彼の毛利家と種々の論があつて中ん就く粟  
屋兵庫といふ人頗る人相學を秀でし方ゆゑ總戸忍んで光  
秀を見るゝ眼中鋭く頬骨高く懸尖り色青黒くして頼山  
の黒氣を生じ刺つさへ喜怒骨と唱へ時として怒る時ハ必らず  
天庭に發生し又た喜こぶも此の氣現はるゝ者あれば此の人  
一徹短慮にして其の終るところ必らず偶然として亦た宜しか  
らず是れがため屋々此の備を元就へ諫むるゝより遂に空し  
く中國を立ち出で越前に至つてハ朝倉是れは食客すること暫  
らく是れハ假令朝倉家まで召し抱へんとするも雖も重兵衛  
其の行あひを疎んじ肯んぜず夫れより江州の佐々木六角入道



本 能 寺 合 戦

承禎此の方へも来り又た美濃の長井へも参ッて齋藤の行あひ  
を探り其の後ち信長も出會ッて明智ハ仕へたるものでござい  
ます是れがため先年の契約もございませから今ハ早や五萬  
石とありましたるより右服部出羽守方へナして遣ひまし  
た出羽守大い喜こび早速婚姻の用意もおよび吉日を撰び大  
勢の者を附添へ姫君を龜山へ差送られた玉椿の八千代を  
簡め三々九度の盃事終りました兼て日本の古禮あれば緑女の  
面を包む綿帽子はれを打ち冠り夫れより式了ッて御色あはし  
どあり帽子を脱ぎば姫君窈窕たる美人光秀以ての外は緑色  
を髪へ坐を起ッて此度緑女の方よりの附の従士を招き光別  
儀でござらぬが今差送られたる婦人の全たく出羽守殿息女  
よては是れあるまじ。従士の者大い驚ろき士ハ全たく出  
羽守殿の息女と相違ござりません何で偽言も及びませうか。光

本 能 寺 谷 戦

秀頭を振ッて光ハ先年名張もおいて御約束の砌も十八歳  
と承たまへる未だ對面の仕まつらんが最早や十有餘年の星霜  
を経たれば二十八九歳も相成るべく然るを只今對面つかま  
つるハ未だ十七八と見える何ゆゑも我れを欺ふきたまふか。此  
の時ハ服部家の従者赤面もおよび士然らば委細申し上げん  
實ハお手前様とお約束の息女の二十歳を超え思ひ掛けあき重  
き泡疹も罹り眼色打て變り鼻潰れ黒痘痕大菊石髪の毛ハ抜け  
甚はだ見苦しく殊も今年二十九歳も相成ます夫れゆゑ幸ハ  
ひ未の娘がござりまするゆゑ此度の婚姻ハ餘り醜態で失禮で  
ござるから此の代人を献じました如何も無禮の段ハ御免を  
蒙ふりたし。

一寸申し上げますが又た一説ハ光秀妻を連れて國中  
を流浪し旅宿の料も差問へ剩ッさへ光秀の病中も其の妻

本 能 寺 合 戦

黒髪を切つて旅宿の料と薬代と遣つたといふ説もござ  
います  
流石の天下有名の日守を改め 光承たまはり驚ろき入  
つたる出羽守殿のお取計らい此の光秀をもつて容色の美ある  
ふ爾れ心溢るゝものと思し召すかアナ情けなき思し召しあり  
慮外おがら此の光秀の荷しくも當時丹州龜山一城の主と相成  
り假初も諸侯の列に加はり一旦條約つかまつる者病のため  
ふ面体の醜くきとて何ぞ契約を破りやさん早速是れの婦人御  
連れ戻り下され以前の難症の姉殿をもつて送りたまへらバ我  
れ悉く悦こんで受けん夫れども話のされバ此の縁談  
御謝絶す武士の詞金銀のどく人間一代の大祝の一ツの婚  
禮おそれバ其の人死んだれバイヤ知らず何ぞ一旦の詞を違約せ  
んや使者の者名張へ歸つて此の趣きを告れバ出羽守涙を流し

本 能 寺 合 戦

「嗚呼義堅き御方ありとて大い悦こび早速美女を廢して醜  
婦を送りました却つて光秀快よく遂に夫婦中睦ましく其の腹  
より出生の次の娘の細川越中守忠興と嫁し長女の織田七兵衛  
信澄と嫁し三番目の男子として十兵衛光慶其の後に信長公よ  
從がひ追々立身して是れある光慶江州坂本の城主と相成る然  
れバ光秀坂本龜山兩城兼帯して三十七万石と相成りました此  
の坂本と申しまするの滋賀の湖水の西にわたり日本にて景色  
の頗ぶる宜しきと申する所にて往古滋賀の都にて帝都のあり  
し所でございます古歌も  
さゝあみや滋賀の都の荒れよしを昔しががらの山櫻かあ  
是れ薩摩守忠度の歌でございます滋賀の都のありし時或人の  
植ゑたる唐崎の一ツ松世も秀でたる名木にて其の後に枝葉枯  
れ果て此の絶えんとする時光秀是れを慨き我が朝も知れたる

本 能 寺 合 戦

斯かる名木を枯すの本意よあらざるどて根を掘て人參を夥多  
しく埋め其の人參の徳よよつて忽ち元のごとくの枝葉を生  
じ今又榮えること成りました此の時光秀の歌よ  
我れからで誰れかは植ん一ッ松ころして吹け滋賀の浦風  
斯やうして見ますれば歌道も達者あことよて又た惟任といふ  
の筑紫の惟任といふ大家を滅ぼした其の姓を繼で是れより筑  
紫の探題惟任日向守光秀と申しました然るゝ織田信長の向ふ  
所敵あさがごとく先づ大敵と謂つべき甲斐の信玄ありしが  
此の人參州野田の城菅沼新八郎の足輕部太郎兵衛の鐵砲  
よ當り相果ましたるといふの既ゝ菅沼新八郎の野田城の落城  
よ及ふべくと云ふ事よて甲州勢のためゝ稻麻竹葦と取り圍ま  
れ宛がら鐵砲石廓の中よあるがごとし然る所よ村松方休とい  
ふ者が是れに能役者の笛吹でございます菅沼へ出入の者よて

本 能 寺 谷 戦

見舞旁々参りました時よ思はずも敵押し寄せ来り止むことを  
得ず城内へ圍まれ據どころなくお相伴よ死あへければ成りま  
せんッコデ俗にいふヤケどや言ふべきか且つは生涯の思ひ出  
と表の隅の橋へ昇つて樂の譜を吹いてをりました信玄素より  
英雄かれバ笛の音色よ心奪はれ口付の者三人よて世よ天下十  
九刻の内の一刻訪誦法性の兜を頂だき堀端近く來つて此の笛  
の音を餘念もあく聞惚れてをります所を足輕よ打たれまし  
た大切ある名將あるよより甲州の狼狽一通りあらず鎧を召し  
たるまゝ體をば磐石を付け信州の諏訪の湖水へ持て参り沈  
めよ掛けたともせよ又深山へ其の身體を隠したともす  
します是れよ依つて武田孫六信連入道道遠軒此人を以て飯初  
よ信玄の代人よ致し敵を欺むくの策よて信玄の逝去を隠した  
ども申します然るゝ隠すことば現れ易きものかれバ追々現

本 能 寺 合 戦

なれまして既長篠の戦ひより功臣を遠ざけ新屋形伊那四郎  
勝頼性急短慮の人あるより進むを知つて退むを知らず是  
れを履々諒むるといへども用ひざるがため織田徳川の計策  
又陥り甲州名代の良臣馬場山縣土屋内藤清井田村よおつて  
水杯を致し残らず枕を並べて討死を致しました是れ商人で言  
つて見れば資本が絶えて仕舞たやうなものでございませぬ然  
る漸々切迫して天正十八年五月十日伊那四郎勝頼の甲斐國東  
山梨郡笹子峠を越へ駒岡鶴瀬是れを右へ入り初鹿野の向ふ田  
野山の上ある天目山に於て遂に主従四十餘人枕を並べて討死  
を致しました此の時又織田の先陣澁川左近將監一益勝頼の弟  
首を掲げたる川義太夫といふ者川尻備前守立合の上主従  
四十七人の首を長持に入れた甲州府中へ引返し信長の御嫡中將  
信忠の寶檢を備へました宛然勝頼の首生るがごとく兩眼を見

本 能 寺 合 戦

張てをりましたが中將殿寶檢濟みますと件の首は右の眼を  
眠りました然れども左りの眼の向は明いてをりました又たく  
此の首長持に入れて信長公御本營まで差送ります關嘉平治、系  
原助六郎是れを護衛して美濃と信濃の境、月ヶ瀬と平屋の傍根  
劔の本營へ持参いたし伊那四郎勝頼を討取りました旨を申し  
上げるト折節信長、御風呂よ召されてをられましたが浴衣の儘  
よて出でさせられ信其の首は是れへ關嘉平治申し上げるの  
關勝頼の首級甚はだ悪相よして物凄うございませぬ中將様御實  
檢までの兩眼を明いてをりました然るも寶檢すみませぬト  
右の眼は眠りましたが左りの眼の未だ明いてをりませぬ此首の  
寶檢あらせられんが然るべきでございませぬ信長大音揚げ  
信何ほどの事やらあらん是れへ持て浴衣のまゝよて湯太刀の  
鞘よ手を掛け鯉口をくつろげ猛り駈よて 信如何も勝頼確か

本 能 寺 谷 戰

又承たまはれ爾清和天皇の後胤甲斐源氏の嫡流たる其の身  
ありあがら此の体裁の何れ人の最期の大切なるのあり佛も  
命終の一大事を説き置かれたり何ゆえ正念の最期を遂げざ  
らんや其れ死顔の何事ぞ怨みあらば復して見よ其方父信玄の  
娘即ちち爾が妹を我が信忠よ嫁せしめんと約しあがら忽ち  
其の約定を違變し表裏を構へ不義を行ひ名もあき足輕の銃  
丸も當つて相果たり親の因果が子も報ふ爾も斯かる最期を遂  
げ新羅三郎義光より二十一代爾等親子にて家亡びるの氣の毒  
事あり爾も出で、爾も歸る是れ自業自得然れば念を殘すと  
ころの有るまい併し信玄も上洛いたす心得て東海道へ出  
でたれども本意を遂げず依て其方父の志ざしを受繼せ首  
かり上洛さして遣のす程あく此の信長も上洛するであらふと  
言ひあがらスツクと起ち足よて首を椽より下へ蹴落しました

本 能 寺 合 戰

然るも其時まで明いてをツた左りの眼を忽ち閉ぢました人  
人只だ奇異の思ひをあす然るところが勝頼最期の三七二十一  
日目即ち六月二日又右大臣信長本能寺で最期ました是れ不  
思議といふべきでございませ、諸甲州山梨郡相川村駒ヶ岡万  
年山大泉寺に信虎公信玄公勝頼公三代の御木像を安置いたし  
勝頼公の法號の景徳院殿頼山勝公大禪定門また天目山よ首  
き死骸四十七騎山の半腹又埋めました然るところお話し變ッ  
て勝頼の首の徳川家の御陣營へ持て参りますと家康公口嗽手  
水いたし身を清め勝頼の御首を水にて洗ひ櫛をもつて髪を梳  
づり紙を引き裂て髻を結び首桶へ入れ一段高さも置いて家康  
公遙か下つて禮拜し家嗚呼天あるか命あるか甲斐源氏  
の棟梁も斯くまで成らせられ御痛のしき有様あり頼生菩薩  
南無阿彌陀佛ト御拜を遂げられました是れを後甲州の里民

本 能 寺 合 戦

等ハ聞きまして殊の外感しまして天下ハ徳川公の外ハ人ハ  
無いとて嬉し悦びました然レバ家康公御世を知ろしめして  
より甲州の武士大概ハ徳川家へ附屬いたしました大名ハ土  
屋内藤、小笠原或ハ柳澤米倉旗本ハ横田神保室賀山村八代皆  
亦甲斐源氏でございます切て茲ハ面白きお咄しあり秀吉公ハ  
是レを聞こしめして信長公の敵將の首を足蹴ましたるハ言語  
同断の成され方だ又た家康の横着者人氣を取らんがため落涙  
して勝頼の首を慰さむるハ是レ深き思慮のあることよて能く  
も空涙の出たものだ斯くいふ秀吉公ハ勝頼を殺しぬ彼  
レを説いて我が臣下として肩の張る時ハ按摩をさせ草臥たる  
時ハ足を撫させ我が傍らへ置いて朝暮の用をさせ召し仕ふべ  
き事ありとて大口明いてカク〜と笑ったと申すことござ  
います。

本 能 寺 合 戦

第 貳 回

徳川家康安土候す  
光秀要應使を命せらる

切も勝頼長男信勝十六歳右父子の首を京都の粟田口へ烏木  
掛けました然るどころが何者とも知れず此の二ツの首を奪ひ  
ました依て和々手を手を分て闘ぶるといへども相分りません後  
ち又聞けば甲州山梨郡古府中岩窪村の西ハ當る塚原村法泉寺  
の住職が故郷へ持て参ッてこれを埋めました併しあがら公然  
又すべきでございませんから極秘密よいたして置きました夫  
レを家康公ハか又聞し召され奇特のことである尙は厚く用ら  
ふべきありとて此の寺へ五十石の朱印を賜り勝頼父子の菩  
提所朝暮夕の念佛回向をいたします尙は東ハ當ッて躰躰  
岡相川村万年山大泉寺又信虎公信玄公勝頼公お三代の湯木像  
を安置いたし徳川家より修復料として年々金若干を寄附せら

本 能 寺 合 戰

れましたことでございませぬ其の信虎公の法號は大金泉寺殿  
泰雲康公大廣儀また信玄公の法性院殿機山玄公大居士また  
勝頼公のの前中し上たるごとく景徳院殿頼山勝公大禪定門本  
堂も何れもありません下五輪の塔ヶノドンの戸棚の中もあり  
ます又た此の戸棚の中も二段ありませぬ右大臣從二位織田  
信長公の積年の警敵たる武田を亡ぼし凱歌を唱へ人々皆力  
足を踏み泰山を挾ばさんで北海を超ゆるの勢はひを現し龍  
も跨がって虎も是を引かひるの勢はひあり信又た徳川家康  
公此度を二心なき味方をいたし粉骨碎身及べられたるを信長  
公是れを賞したまひ駿河、参河、遠江の後來徳川の領地たるべく  
と仰せ出され又た諸士の剛膽を調べ功あるものよ其の賞を  
與へ罰ある者よ其の戒めをさせ廣野も暫時お野立及ばせ  
られ何れも鎧も血を引き威けめしくあるが中も稲葉伊豫入

本 能 寺 合 戰

道一徹齋、鐘の草摺のちぎれ大袖の半ば落ち眉庇曲み前立て  
れ就中苦戦の有様夫れと辞ま言ねども自然と現れませぬ  
折柄信長莞爾と打ち笑みたまひ信如何もや一徹其方の名よ  
背かざるの働らき一徹短慮にして向ふ敵の打たざれば必らず  
引かざるの性あり美事なものだ。一徹赤面して頭を垂れ辞あし  
（此の人の美濃三人衆と唱へます中の一何れも齋藤家も附  
属の者でございませぬ氏家常陸介安藤伊賀守、稲葉是れを美濃の  
三人衆と唱へます）折しも一徹の傍らも何れも諸家とも高名あ  
る家事二三輩附いてをります然るも一徹も一人も附き添ふ  
者なく毎例傍らを離れざる稲葉家の重臣名和泉此者が見え  
ませんから信長公 値一徹 稻ハ、 信其方の臣よ才拙頭の  
金盞眼の齧齧の生へたる色黒き男今日見にざるの如何いたし  
た且つ彼人の何といふ者あるや 稻彼者の名和泉と申しま

本 能 寺 合 戰

す 信其の和泉の如何したるや 信此の假の御容赦を蒙るより  
ます 信ナセ容赦を蒙るや 信憚り多き事おれハ涉免を蒙  
ふります。信長不審の体にて 信今此の信長が一聲喚けハ浪  
き荒磯も立つ音を止め入る月も届しと止むる威勢あり誰を憚  
かるぞ予の相尋ぬる者ハ憚かる者天下の内ハあし男らしく  
せ 信然らバ已を得ずヤし上々す彼者の私方を立ち退き明智  
方へ参り明智の臣ハ成りをりす 信夫れハ心得がたいでハ  
あいか忠臣二君ハ仕へず何故のことで明智へ掛合ざるぞ一徹  
只だ 信恐れ入りますトのみで辭を止めました此の時信長明  
智を直ち召し出され 信如何ハ光秀其方何ゆゑハ和泉をハ  
臣ハしたるや彼れハ稻葉の重臣一徹とても快よくは思ふまい  
他人の家來を取るやハ武士道ハあるまじきことだ 明智  
れおがらヤし上々す彼者ハ一徹齋と折合宜しからず稻葉家

本 能 寺 合 戰

を浪人して敵國へ走らんハ心得ありす彼等一人ごとき者敵  
ハあると雖も差聞えハあるまじきとハ存すれども我が陣中の  
事情ハ素より心得或ハハ軍法の進退秘密の談合またハ彈藥兵  
糧の増減器械の多少是れを敵ある者ハ告げられすれハ不都  
合と存じ且ハ一人も味方多きを宜しと心得是れが爲ハ私方へ  
養ひ置きます不肖者が彼一人を愛せずとも未熟者がらも  
夫れハ拔群の者もございます彼が欲さハ抱へた次第でハ  
ざらん 信然らバ宜しいト仰せられたが兎角明智が其の攻  
を加へますので信長も議論をいたしたところが迎も及びませ  
ん一体信長といふ方ハ一時火ツとするの性質是れハよツて  
今日ハ面白からざる現狀にて黙止してお仕舞ひさひました是  
れより又ハ甲府名代の惠林寺を焼拂へどの上意でございます  
其の仔細ハ信長公の思し召しハ同寺ハ武田家の菩提所願



本 能 寺 谷 戰

信勝二人の首をナセ貫ひよ參らん我が大旦那のことであるか  
ら此の首級をナシ受け懸篤よ吊らひたいといふのが通常世の  
人のすることだ夫れさへさいの如何又出家の世の中又疎しど  
いふといへども此の儀又就て坊主の職分あり是れ又依ッて  
焼拂へ日向守光秀傍側へ出て光御意傍尤もよみらふ併し  
坊主ども僧しとい言へ斯る大寺一時又焼亡いたしますの  
の残念の至りであります城廓の要害あれば早くも造れます堂  
塔伽藍の先づ不用のもので堂を一ヶ所建て置ても事が済ます  
是れ又依ッて昔し人の金銀を費やし建ましたる堂宇の保存い  
たしたきものでございます信入らざる詞出し慮外であるを  
速やか又焼拂へト四方へ薪を積で是れを焼立てます立關應對  
室本堂庫裡客殿東司或ひの輪藏經藏山門五重塔見るくうち  
又珊瑚柱を立たるが如く火花を散し焼け倒れます逃出す坊主

本 能 寺 谷 戰

を火の中へ追込み此の世からある地獄の有様己が説いて他人  
又聞せる大焦熱の苦しみも己れが現在又見ますも憐れで  
さいます情も恵林寺を焼拂ッて八十一人の坊主忽ち黒魚  
相成り彌々四月十一日甲府を御進發又相成り其の勢八萬餘人  
高山の根方谷間の險道此の間を武者押をいたし沼津の臨へ押  
し出したました退々運びたまひて初めて富士の頂きを御覽せら  
れる富士の日本國の蓬萊山あり孝靈天皇の五年初めて出現いた  
し秦の徐福も始皇帝を欺ふき不老不死の薬を求めんとて我國  
へ來れるも一ツの此の蓬萊山を賞したり此の山へ登ッて仙薬  
を求めんといふて我國へ來りました峯の八葉又岐れ根の四國  
又跨がり道路千筋又分れて裾野の東西又長く百里又連なり四  
時雪を頂だき古今の名山昔しより此の富士へ對して詩歌連珠  
或の發句川柳又至るまで積み上げたらば此の山よりも高から

本 能 寺 合 戦

んと思われます取敢す信長公一首の歌を詠じ玉ふ  
見すバ如何も思ひ知るべき言の葉も及べぬ富士と兼て聞しも

中將信忠卿取敢す

朝日藤道が富士の高根あり雲も一しほ色まざるか  
徳川源公

君が見ん今日の爲みや昔しより積り初てし富士の白雪  
夫れより東海道筋駿遠を長く通りたまひ道々の名所舊跡を  
御見物あらせられ家康公甲州御出陣の御留守居役兼て信長公  
の御通りあることおれバ遠州路へ這入る國境も本多作左衛門  
重次酒井左衛門忠次お出迎ひ相成り道々御案内を申し上げ  
道筋の萬端掃除行届き城下町々水を打ち盛砂提灯番手桶を  
家毎に出し半里ごとよ出茶屋を掛けられ川々よの橋を架け守  
護の役人嚴重あり善を盡し美を盡し御入費も御構ひあく濱松

本 能 寺 合 戦

城内の御靈應辞も得も盡しがたく右大臣家御悦び糾めあら  
す一夜の御止宿もて江州安土へさして御出立でございます然  
るも光秀の滞はりなく安土まで御供を致しましたから即時恐  
悦の登城も及べんとする折から思し召し是れあるよよつて登  
城の儀相成ん閉門罷り在るやうよ下の御沙汰あり明智の臣等  
一同何ゆゑ御不興を蒙ひらせられたる事かト心得がたく思ひ  
各々謹慎して御沙汰を相待をります其の實の愛も辭も出  
しがたい事がございます即ち信長といふお方の彼の基督宗  
門に至つて御信仰でございます此の時分よの是の宗教を我國  
へ傳播ささしめんが爲め葡萄牙西班牙あたりから年々船を寄  
せまして筑紫浦肥前の名護屋浦或ひ陸奥ある海岸へ参つて  
此の教化を運動致します其の中も信長宣教師の上陸を許して  
手許へ呼んで其の實際を探つて見ますト何も怪しむべき事

本 能 寺 合 戰

もあひ彼國での宗教を以て現在の政治上に用ひ或は戰場に用ひ日本の坊主の教へ方よ此の世で善を行ふへ後の世に必らず安養淨土普光世界に生るゝト教へましたものでございませ今日佛法の左よあらず然れば戰地へまでも各宗とも渡航をし國の爲よ盡しまするの最目出度こそ思ひます所を信長の五重の高櫓を造り此の頂上へ耶蘇の眞像を飾り或は「マホツト」宗の回教と唱へます事あは追々蠻人より傳へまして至つて熱心で入つしやいませ道が人の目を憚かりたまへば五重の櫓の頂上へ是れを秘置て人を上への昇んやうと第二重目よ己れの寢臥致し人あらば三重目で遇ひ表向の用の本殿に於て儀式嘉例軍議評定は是よて執行あひます然れば今日に至つて五重の櫓を差して天守と唱へます彼れを日本での俗に「マホツト」如來また天守教と唱へます是れを唱へます夫れは依つて

本 能 寺 合 戰

天主また是れを天守と訓じました是と反對して明智の如何も基督宗門の宜いものなれども是れを行ふはせる時の不羈の民或は自由の權あは唱へ子の親を責め農民の地頭代官を相手よ訴たへを起し法權忽ち破るゝことを愷き是れを屬々光秀が信長へ諫むるといへども更らば信用ございません然れば信長の近れさせたまひたる後ちの高山南房荒木兼守皆あ耶蘇信仰よて家名を削りました南房の葡萄牙本國へ鐵船へ乗せて放逐しました此れ信長死んで後ちよ秀吉の改革でございませ是等の事が始終焉勝してをりますから表向ての誰も知らざれども言ふ言はれず主従の中よ波瀾の立つてをります倍また徳川公の甲州御勝利の御祝賀并びよ駿河國拜領の御禮かたく安土へ入らせられ悉く音物を献じ奉まつらんとて御家臣の上下百人ばかりの小勢よて御出立御使番をもつて信長公

本 能 寺 合 戦

の居城江州安土へ申し越れませす依て信長公も先回の禮徳川  
公も報ふべき難よ懸應使を申し付くべきやト御工風あらせら  
れせしが二三万石ぐらぬや五六万石の大名より到底力及ば  
されば難々困りたまひ小臣者よて行届かず中國の探題羽柴  
筑前守秀吉の毛利三家と戦闘よて居らず北國の鎮撫として柴  
田修理之進勝家北國へ至り上杉景勝との戦ひあり關八州の管  
領たる瀧川一益の小田原の北條と挑み合ひ其の外丹羽池田高  
山中川鹽川峰屋等の紀州藩の森よて一向宗の頭如上人と戦か  
ひ最中あり是れよ依て先達て甲州陣中恵林寺燒亡の節意見か  
たゞ尊意よ協はず君邊を遠ざけられてあつたる日向りよ申  
し付けん今木千歳をもつて明智が邸へ早々登城つかまつれ  
どの御沙汰光秀の一室よ籠り只だ世の中を形きあく思ひをり  
まする所ろへ思ひも寄らずお召あるよより髮月代を調のへ衣

本 能 寺 合 戦

服を改ためて登城よ及びました御奏者のも山本登之丞山  
「只今日向登城つかまつりましたトヤし上ました信長公御景色  
麗のしく信如何よ日向先日甲州陣よて予よ對して無禮のあ  
りと雖も其方の一言も理あり依て目通りを差許す能々諒言  
をしたるの其方の忠義の爲すところあり此度差許すよよつて  
然やう心得よ。光秀思ひ掛けあき仰せあるよよりハラ〜と落  
涙し頭を盛へ摺付けをりました 信サテ日向承たまのれ此度  
徳川家當地へ參向よつき先日響應の返禮として徳川を慰さめ  
んと存す此の響應の儀の其方へヤし付けける鹿略あきやう町  
よつかまつれ又た徳川逗留中の旅宿の大寶院たるべし光秀頭  
を懸げ 光不肖の某斯る御役を命ぜられませる段有り難き仕  
合よ存し奉つりませすト御請よおよび龜山坂本三十七萬石の大  
身おられバヤすませでもあく萬端相調のひ立歸つて右の趣きを臣

本 能 寺 合 戰

等一同へ話し追々珍器を撰み大寶院まで長持まで幾棒と多く  
差送りました先づ城下入口より大寶院門前まで盛砂番手桶高  
張紫の幕を打ち廻し徳川少將殿お旅宿といふ高札を出しまし  
た壘の表替を致し障子襖を張り替へ庭作を入れて庭の下草も  
のを植替へ燈籠の曲みを直し邪魔ある枝の是を切し木振を直  
し泉水築山に至るまで高事掃除を行届かせ御家人方の城下大  
町人へ誰の其處彼の其處といふ事又割付ました見張番所休息  
所を設け三里先きまで御出向いととして明智の家臣船木八之丞  
尾石興惣是れを御先拂いと致し又た御城下入口より明智の老  
臣比田帶刀控えたり人数を配つて高端心を注け相待たり斯く  
て徳川公よの天正十年五月十一日居城遠州周知郡濱松を御出  
發あらせられ大凡江州安土まで四十里餘あり然る日々五  
月雨の軒端よかゝる頃さへ止む時なく五位位羽も雨重たげ

本 能 寺 谷 戰

又飛び回り我顔げある川蟬の最と騒々しく喇づり是が爲よ川  
々の渡が止り至つて御道中よ手間暇が入りました明智の考が  
へでの大抵五六日頃よお着があらふと思つてをりましたとこ  
ろ是がためよ仕度も高事手違ひと相成り待る、身より待みと  
いふ譬へ依つて今や、と相待つ折から漸やく徳川公御着の  
案内あるよより何人あらんと姓名を問へば是れ徳川家の松平  
藤十郎あり惟任日向守光秀大紋烏帽子よて立腰で御出迎ひ  
よ及び程おく徳川家の御馬乗よて本多酒井柳原を始めとして  
一、百餘人下供よで装はひ飾つて参りました明智の臣石尾興惣  
船木八之丞先を拂ひ片よれ、と制し比田帶刀の同勢周りを  
取巻て大寶院へ入れ奉まつりました書院敷椽よ兩手を付たる  
日向守光是れお思ひ寄らざる少將家の御入來先頭の種類御  
厚情を蒙ふり有難ひ仕合でござる家康公御腰を屈め

本 能 寺 谷 戰

の身を以て斯のごとく遇せらるゝの痛み入つたる儀でござる  
織田殿の御取扱かひ御懸篤の至り。ト悉く感じて是れより登城  
があります下供まで夫れ〱櫻應いたし山海の珍味國々の産  
物入用又關の品々何れも臺ふ載せ光秀の案内にて先づ安土の  
改たれ献上の品々何れも臺ふ載せ光秀の案内にて先づ安土の  
城へ道入りました信長公も御衣服を改めて御出向ひ及  
せらる御立關御出向ひ織田源吾長益御案内を申して右大臣  
家の御座の間まで通ります徳川三河守殿献上の品々ありとて  
披露及及びました加々見宗右衛門木村主殿徳川公へ差添て罷  
り出で御大刀一腰正宗御馬代黄金十枚巻物五十此の時信長公  
信連路の所參向近頃恐れ入る且つ品々の土産過分の至り  
でござる家康公一禮わつて家先づ以て甲州路御凱陣後益々

本 能 寺 合 戰

御勇健も波らせられ恐れも存す殊も駿河國を賜ひるの段有り  
難き仕合も存し奉まつる。信長公笑を含みたまひつゝ、信互ひ  
又數年の強敵を亡ぼし祝着の至り併し是れ全たく徳川殿の御  
力と存する。ト言つて是れより盃を賜ひりました此方の右大臣  
從二位征夷大將軍足利義昭より職を受け襲ぎ信長其の御勤は  
ひ一段美事も見えます切又家康公の本多平八郎忠勝酒井左  
衛門忠次御相伴にて此度の結構ある櫻應儀へ元秀の志ざし  
深きがゆゑあり何か是れへ禮をしたいのだが何をしたらが宜  
らふか大身の事あれば金銀の類の乏しからず如何せん。ト  
仰せある酒井左衛門座を進め酒恐れながら光秀の日頃勇  
士を好み家來自慢と承たまはる儀で御前へ明智の臣下を召し  
出されお手づから御大刀一振づゝを御遣ひしあらせられ御賞  
あられ此上もあき光秀の悦こびと存じます。家康公御膝を礎と

本 能 寺 合 戰

打ちたまひ 案如何さま尤ももの事あり夫れが然るべき事であ  
る。トあつて取り敢ず明智光秀を招かせられ 案其許の兼て  
承たまひるゝ宜き家來を大勢持れたりト聞およぶ強將の下  
弱卒あし名醫の庭に薬劑あらざるさし負ずも勝も臣等の働ら  
きよめる宜き者を扶持せられて競やましう存する何卒家康此  
の方々へ面會を遂げて置きたいものでござる。光秀赤面して  
先不肖の某家人どもまで御賞を蒙り恐れ入り候らふ只今此  
の地は居合せの者ども御前の御顔拜させ御器量の万分が一似  
からせたらう存じます。案ア夫れハ御懇懇あるお辞恐れ  
入ります何卒對面をつかまつりたひ。是れよつて先づ御目通  
りへ出でたるハ重臣九人は是れ明智左馬介光俊、齋藤内藤助利三  
四方、天田馬守政高、村上刑部清國、並川掃部介安治、溝尾庄兵衛、比  
田帶刀伊勢與三郎、松田太郎左衛門の諸士が夫れへ出たのを

本 能 寺 合 戰

案ヤ御邊が左馬之介か兼て聞およぶ案、ヤ其方が内藏介か英  
名は夙に承知いたした、ヤお手前が但馬守か古今無双の勇士、ヤ  
お身が刑部か猛勇の間に空し、からず、ヤ其方が並川、ヤ其方が溝  
尾、ヤ比田、伊勢、松田、何れも天晴れある面々光秀殿股肱の勇將甲  
乙あければ勝劣あし揃ひも揃つた宜い家來、得たりや得たり宜  
い家來、仕へられたり此の名君主從揃つた天下の名家嗚呼、  
浦山しいことだ。徳川公か、  
日出たる此の九人の何れも明智二十八將の中の面々徳川公各  
自へ涉太刀一振づゝを下し置れる光秀は只だ有り難さ胸に追  
ッて涙を翻し、抑も徳川家は清和源氏岡崎次郎三郎清康の孫三  
河守廣忠の男あり御幼名竹千代丸夫れより元信又元康源藏人  
と唱へたる昔しから世々事々も疎からず文學どもよ世々秀で  
武勇の今更言ふよ及ばず實も又た有るまじき名君あり其の

本 能 寺 合 戦

方として我々しきの臣等を斯の如く思ひたまふかト明智の肝  
と銘じ臣等の只だ恐れ入って頭を垂れました然るも信長公是  
れを聞いて甚はだ疎みたまふ其の所謂の元來信長公の我朝七  
名將の一人と呼れ名君おれども婦人の性質あり何とかく他人  
を嫉み猜むの念の絶す我が器量より上あるもの何とかな難  
を付け我れより下の者は是れを侮どり秀吉光秀の兩將の負す  
劣らずの御家來兩人とも又問題もしたは是れ兩雄並び立す  
の盤へ筑前守は中國出陣の時明智の身の上を氣遣ひ彼れ喜  
背の相あり又た信長公の知慮急性に在せば事變おければ宜  
がト思ッてをりました倍て徳川公の翌日又たト御登城備  
長公へ御暇乞をいたして御出立といふ事もありました是れ  
大坂住吉堺兵庫南都の春日伊賀伊勢太神宮へ御参詣の思し召  
しあり長谷川竹九御案内に附いて御出立先づ京地に入らせら

本 能 寺 合 戦

れました此の時信長公の 信某も近々中國へ後詰として出陣  
いたせば上洛の心得あり且つ御所御造營も出來するゆゑ今五  
六日當所へ御滞留あり御一緒に參内を致さふでござらんか。  
夫れを徳川家の 徳イエ夫れの何うか某は御先へ御免を蒙ふ  
るト仰しやッて出立たのが本能寺の焼打ち此れ御高連とや言  
ふべきでございます借て天正十年五月廿一日徳川公御出立  
て日向守先づト安心を致すところへ津川三左衛門を以て御  
かゝ御召し早々登城いたすべくとあるより切の首尾よく御  
應の役目相濟だることおれば御益もても賜はる事あらんト大  
紋烏帽子供方大勢を引連れ安土城へ登城もおよびます。

第 三 回

信長怒ッて光秀を詰る  
關九明智が面上を打つ

爰に森蘭丸の信長公の顔ぶる御寵愛を受けて月花と御眺めを



本 能 寺 合 戦

豪むりましたが元來信長といふ大將の男の醜美は關のらす其の才氣を以て秀でたるを愛したまふ併し此のころの男子が男子を愛す乱國の禍尤も關九とすするもの其の男も美麗にして志ざしも亦た天晴れ優れたるものでございませぬ森三左衛門可成の次男兄を勝三長一後ちよ此の人は武藏守とありまし

本 能 寺 合 戦

金の蝶が象眼で幾個となく這入つてをりませぬ開處の昔も年若き者かれは此の御劔の蝶の幾個あるやト人々争りあひをりました然るは關九一人の黙して空脚てをりましたソコア 人々關九の何故知らぬ顔をしてをられるやト尋ねますと關九團然れは私の愛て御劔番も當る時お鑢の蝶の幾つあるといふ事の記憶致してをります是れは益あきやうと思し召しませ

本 能 寺 合 戦

繩を持って參つて彼れを縛して參れ 信長さましてございま  
す。トヤしさがら其の所を起つて程さく手頃の繩を持ち來り甲  
斐しく身構へ 蘭私が縛しますから御前逐出して下さ  
い。信長微笑して物言はず總て致すところが斯のどくでござ  
います。男色の盛んあるの武士道の花ありとやして此の時勢の  
習慣て必らずしも陣中よ於ての男色といふものが流行まし  
た。既又舊幕の頃よ及んでの京都の宮川町江戸の霞町湯島天神  
芝神明前八丁堀代地すべて四ヶ所ありました其の風俗の女  
の形よ装はひ正月松の内さよ戸外へ出て追羽根を致  
します。する体さど誰あらず男と見ます。その多くな出家沙門の此れへ  
嬋娟窈窕として鮮やかでございませす。其の後ち舊幕府のころより  
通ひまして若干の金を抛うちます。其の後のち舊幕府のころより  
願ふる器量人出で、此の風俗よ昔あるものありとて遂に廢止

本 能 寺 合 戦

しました。然れば維新以來是れもつて風俗を乱す猥褻の極あり  
とあつて既又窈窕と唱へ禁じられた。或る夜の事ありしが  
信長敵地の圖面を取り出し普ねく書類を取り出して眼を注ぎ  
をりました。が不圖淫氣の詭りしよやお様へ立ち出で思はず引  
番の蘭丸の室へ入らしつて淫覽あされました。蘭丸夜のもの  
打ち冠り最と静やか又寐ておりました。彼れに能く寝入ること  
あり。トて燈光よ透して淫覽あさいました。所が素より美男併し  
此の寝顔といふ者。の宜い人と悪い人がございませす。女子でも寝  
顔の悪いと云ふものがございませす。然れば女よの生れ出でたく  
さいものでございませす。寐てさへも寐顔をヒョツと男よ見られ  
た折から又の口を明き涎を滴し甚はだしきよ至れば齒ざしり  
あどを致し其の寐姿を崩したるの見苦しさものでございませ  
然れば古い俗話よ

本 能 寺 合 戰

寝るよさへ寝姿といふ苦勞あり  
然るよ今蘭丸の其の寝顔と言ひ懐しみ深く口を結び体も充分  
よの延さず横向よさつて臥してをりました其の容貌見惚る  
るばかり其の中よ何か口をモガくやつてをりませす九右衛門  
さんくく必らず間違えて下さる新のどくやすするのを信  
長聞し召され扱は蘭丸の九右衛門と通じ合罷りあると見  
たり憎くき奴よと思し召してお足をもつてお墨を堂く踏  
みさらし信如何よ蘭丸覺ねをるか蘭丸此のお詞と共よ起上  
り見れば我が枕邊へ公の侍出ゆを驚ろいて衣紋を繕ろひ兩手  
を突き低頭平身いたした時信其方の今九右衛門さんくく  
と二度まですした……九右衛門方へ書面を遣れ其の文言の  
今宵は非番あるよよつて時を移さす我が室へ侍出を願ふト認  
めろ蘭丸此を得ずして仰せのまよ樂を取り認めまして一

本 能 寺 合 戰

終見へ目出度のしぐかしぐをのしぐと書きました此れは男子  
の事あれば恐惶謹言とか以上とか又は敬具とか願首とか不白  
とか不備とか或ひの不敬とか留は書くものでございませ又た  
穴賢と書くのは穴賢他人よ語りたまふさといふ是れが留で  
さいませす既よ真宗のお文よ未よ至つて穴賢と留めてありま  
す是れは各自他人よ言ふべきで無い穴賢己れの忘れるさとい  
ふ逆如上人の教へでございませ然るよ男子たるものが目出度  
かしくと書くのを如何らしく思し召しも有りませうが此れは  
女よ摸擬して男よ寵愛を受るものあれば優しく書きましたも  
のでございませす然るよ此の九右衛門といふものは織田家よ於  
て菅谷九右衛門といふ有名の者でございませすから篤と是れを  
見て目出度かしくと書くべきを確かよのしぐどの字が書い  
てあるかの字どの字と取り違へませすやうも蘭丸は鹿忽者

本 能 寺 合 戦

でございませぬ是れよ何か仔細のある事あらんと九右衛門腕を拱ぬき熱々と考がへました然るところ漸やく思ひ當り  
ましたの古歌よ  
鎌津國の野宿の里も来て見れば松待の根毎(寐言)も現れよけり  
磁と小隙を打ち扱の夢でも見て心氣疲れたまよ彼者が寐言  
をゆしたのを我公も聞れ據どころかく認められたものと見える夫  
れでなければ最とも秘密を要する使を殊更公けの浮用を達  
す茶坊主をもつて斯る文を夜中どすし送るべき理由もあいな  
く存じましたるよより取り敢ず首谷九右衛門押取刀して御殿  
へ来り蘭丸の室へツカと跳り込みました此方は信長公如  
何あらんと別室も密みたまひ耳を濟して容子を伺がつてをら  
れまするト九右衛門の聲として 豈如何や蘭丸爾の不埒さ  
奴あり如何かれバ我も戲ふれの書と贈る夜中どすし我が居室

本 能 寺 答 戦

へ忍び来れおどし認め振り其の狼文見るも汚らひし己れと  
我れと夜中も出會ふ用事もあし我公の浮寵愛を蒙ふりをらす  
んバ一刀の下も切り捨る奴かれさも主君の思し召し目出度奴  
されバ此度の許し遣ひす以後斯やうも戲ふれを致せば其まよ  
よの差し忍んト猛り聲を揚げて罵りました蘭丸笑ひまして  
蘭開の少しも存せざる事ありシテ使の者は何者あるや 菅  
「お茶道方のお坊主あり 蘭夫れこそ御前の御戲ふれあらん必  
らす腹を立ちたまふナト九右衛門を体よくして歸しました是  
れ又依つて信長公の疑念も解けましたが兎角信長といふお方  
は疑惑の深いお方でございます總て疑念の深くあると云ふも  
のの世の中の開け行くよ従がつて人々其の智力の進むゆえ疑  
念の深くあるものでございす是れが斯うだらふから斯うだ  
其の又た其の上を考がへるものでございすから現てや此の

本 能 寺 合 戰

頃の時勢は親は子を疑がひ子の亦た親を審かり夫婦兄弟互ひ  
又心を許さざるは是れ修羅の街の習ひでございます然るも天  
正十年閏九二十二歳信長の御寵愛より天下の諸侯はお取立を  
蒙ふるもつさまして何れありとも領地を望めや下仰せがあり  
ました蘭丸面目身もあまり蘭然らば江州宇佐山を頂戴いた  
したうございます是れ如何にとあれば父の墳墓の地でござい  
ます然るところ此所は明智日向守の領地されば日向へ是れを  
掛合遣のすべきありと役人を以て沙汰がありました然るも  
日向守是れを拒んで此の地の私も知行を得たる最初の地で  
さいますから此のまゝ下し置くやう願ひ上す是れも依  
て蘭丸への美濃國水晶山岩村に於て五萬石を下し置れました  
是明智への蘭丸一ツの意恨でございます又た續いて蘭丸が妻  
を迎へんと思ひしは信長公の媒妁にて催任日向守光秀の娘

本 能 寺 合 戰

親兼も秀で賢婦人のことされば彼女を貰へよとの信長公の仰  
せ蘭丸も是を幸ひとして御舅とあらば品も奇り岩村と宇佐  
山と交換も出来やうと思ひました是れが爲め蘭丸も以前の  
念を拂ひ早速御受を仕まつりました光秀が一人の娘の織田七  
兵衛信澄の方へ嫁しました二番目が井戸忠右衛門治秀の方へ  
嫁しました今一人の女子の名を霜子と申します婿は右の  
きを日向守へ仰せられると光秀是れを辞しました夫れどの言  
のねど心の中より尻の光りを以て登用致した益武士彼等と  
さものと縁邊をするの武士の瑕瑾斯く思ひましたるも依て細  
川越中守忠興の方へ嫁さしめました是れ二ツの意恨でござい  
ます婿も前回へ戻つて申上す時天正十年五月二十二日  
明智日向守の水色も白く桔梗の大紋堅烏帽子を頂だき中啓を  
取つて安土城へ出仕もおよびました抑も此の安土の城といふ

本 能 寺 谷 戰

江州蒲生郡金龍山と唱へ明智羽柴争論の上金龍細張り間谷  
と稱へ世々有名の話しでございませ斯の如くして出来ました  
ることよて漸々七年目で落成を致しました信長公是れ御居  
城ましく五重の天守を建て石垣の高き十二間頂上まで地  
面から三十六間方二十五間四面三重目より唐木造りの中  
造りあり二重目を御住居といたし前もやし上ました通り頂  
上より基盤宗門の耶蘇の像を安置致してありませ然る日  
守の大廣間へ召し出され敷居を隔つて平伏してをります  
縁の御臺上段の間の二間三の間綺羅びやかみして諸侯其の  
格をもつて是れ列居し暗がりの間より信長公御簾を巻上げ  
警衛し黒の一段高き塗櫃の上より信長公御簾を巻上げ出  
り恐れながら日向罷り出でました下奏者役の者は是れを傳へ  
した信長公キツと御覽あり 信如何より日向爾此度徳川

本 能 寺 合 戰

つき方外過分の至り心得がたし尤も隨分念入鹿略是れ  
やうよどの申し付ると雖も物より相應の格式あり徳川の我  
と縁者よもせよ幕下の將あり然らば瀝應も亦た差別あるべ  
ものあり器物食物も過分の拵らへ上さき次第如何相心得るや  
然やうある備の有るまじくと存す答へ及べ光秀頭を聊さか  
撞げ 折存し寄らざる御叱りを蒙むるか兼てより鹿略さき  
やうよどの御命を賜り光秀身分不相應又我を顧り見ず君命  
の重きよ從がひ鹿略さからんがため珍器珍物を以て取扱か  
ひました然るを方外の上意の甚はだ迷惑又存じます 傳  
止れ七五三の膳部大臣以上徳川の少將あり徳川をアノ扱か  
ひ及ば我れを以て養應の時何とするやイヤ夫れども家  
康の海道一の良將されバ今より徳川へ陥らひ後日の力よせん  
といふ表裏野心の者と見ねたり。光秀盡かしく存じ 武ヲ上

本 能 寺 合 戦

意ども存じ奉まつらす臣君へ對して何の異心をござりませうか  
浪人重兵衛を斯くまで身進め及びましたのは是れ君の御恩東  
の間も忘れ申さず辭を申さば仔細に申し分を致すと思し召  
しもあれども元來鹿略あいやうよどの御沙汰に任せ取り扱  
ひました迄のことでございます不肖ながら徳川家お世を頼  
ま仕まつる拙者も是れなく異ある上意を蒙るものかお聊  
さか笑ひを合みしを素より短氣猛烈ある信長 信一………  
「………無禮な奴主へ辭を返す不敵者誰れかある彼れが小相頭  
を打てよ。」云ふ仰せ是れ光秀は頭部の禿てゐた人でございま  
す 信一「コレ打て——是れ打て——再應の上意ナレども其の高と言  
ひ其の身分柄の人あれば杯か誰れ一人とあつて出るものがあ  
い時よ信長公眞紅の紐の付いたる鐵扇を投げ出したまひ 信  
一「蘭丸是れよて彼れを打てよ。」の仰せ日頃の意恨得たりや應と

本 能 寺 合 戦

森蘭丸、淺黄色よ白く鶴の丸の大紋風折烏帽子を頂きツカ  
と進み寄り 森日向殿上意でござる上意でござる。ト力も任し  
て打ちますするうち眉間破れて血のツツと流れ出でまし  
た「ハッ」と光秀其のまゝ頭を垂れて平伏いたす其のうち蘭丸も  
此所を退きました容子だから聊さか頭を上げて見れば信長公  
の伊近習始め君の側ら侍べる者一同右大臣家の御跡に附添  
ひ皆お奥へ還入つて仕舞ひました跡に只だ廣々たる大廣間、涙  
々たる伊坐敷宛がら嵐しした廣野に仄めく月の出たるが如く  
取殘されたる日向守懐中より疊ふ紙を取り出し天庭の血汐を  
拭ひ其の紙の血を見て光秀然あきだま短氣の人おれバ忽ち  
喜怒骨動き眼よ涙着坐のまゝ後じさりをして三間ばかり伊  
衝立の蔭より大紋の袖を重ね無念の相貌面よ現れ退る折し  
も傍らよ睨あつて鐵關茂らんと欲する時秋風是れを破る王

本 能 寺 合 戰

者明ら、かあらんとすれば、隠者此を聞まず、辭短かく意の長く意  
中、又諫言あつて、又た奥床し、誰人やらんと是れを見れば、我が娘  
の男、丹後國田邊の城主五万石細川兵部大輔藤高、後ちよ是れを  
入道して、玄旨幽齋と申す

一説、又ハ天正十年正月二日の初夢、又馬の腹を鼠が喰ひ破  
つたる夢を、信長公、夢見せられた、流石天下の強將、又在  
すといへども、初夢、又斯る不吉な夢でございませすから、何と  
かく御心持ち悪く思し召し、夫れと、かく御近習、又御尋ねが  
ありましたスルト、近ナア、又夫んが夢、あどハ願と取る  
又足りません、是れ御前様、ハナシ上げまする、恐れ入り奉  
つるが、尾張半國よりお成立、又相成り、今天下を御一發遊ハ  
します、是れ鼠のやうな小ひものが、馬のやうな大きなもの  
と、雖ども、忽ち打ち破るといふやうな、謎らひかど存じま

本 能 寺 合 戰

す。夫れで、信長お笑ひあつて三日の儀式を爲さいました、が  
退ぞいて考がへます、ト明智ハ子の年、信長公ハ午の年、だ  
といふ説もありませす、

然る、又此方、日向守我が邸館へ立ち歸り、まして玄關へ乗物を  
付け、其のまゝ、お奥へ入らせられ、思ひありげの御容子、近習の侍  
其の御容子の異あるを見て、大きに痛心し、殊、又ハ額、又傷あるを  
以て、近如何あそべされたや、ト伺ひます、ト、光、ヤ、是れ  
ハナ己が、過まつて、長袴の裾を踏み、遠へて前へ、反り、御敷居で、打  
つたる傷あり、決して心配する、又及ハぬ、少々、内談の儀、是れある  
又よつて、内藏介を呼び、呉れよ、トコ、丹州猪口山の城主齋藤内  
藏、助利一を召され、ました、悉く人を遠ざけ、光如何、又ハ内藏助  
今日の次第云々、斯様、ハ、あり、ト、徹頭徹尾、踏、かく御物語り、があ  
り、ました、内藏助、素より、寛仁大度の人、され、ハ、齋、夫れハ、我君の



本 能 寺 合 戰

御手を以て御負けられさされたも御同様主と親の無理あるも  
のど心得おければ成りません蘭丸めが打つたと思し召します  
れバ御憤をほりもございませう素より強性御短慮の我公先々  
御無念の儀の思し召し捨てさせられて然るべきでございます  
光併し予が胸中も推量して呉れよ日向守始めて聲を飲で泣  
きました斯りける折柄もお表口より恐れながら火急の御沙汰  
如何仕つりませうか下大音も呼りました併し其間さ遙かよ  
遠ければ形の見渡すといへども只今の密事の彼の御執次の者  
よの聞えません餘ほどの間合が隔つてをります光秀承たまの  
り光何とござるか是れへ持て執御側近く罷り出で、宜う  
ございまするか光苦しうあいはれへ。ソコア小腰を屈めて彼  
の者の其の御沙汰書と覺しき書面を以てスカ〜と摺り寄り  
日向守又相渡せば日向守此の回文を開いて見るよ

本 能 寺 合 戰

相達しやす事

来る六月五日六日兩日のうち右大臣家中國表へ御進發の  
らせられ候ふ間各々一先づ歸國致し軍勢催促及び備中  
口へ人数を向け萬事筑前守の指揮號令を受けべきもの  
りとの上意も候仍て執達如件

天正十年五月

老 職

- 堀 久太郎殿
- 同 盛 物殿
- 中川 瀨兵衛殿
- 高山 右近殿
- 明智 日向守殿
- 桑山 修理亮殿
- 蜂屋 出羽守殿
- 鹽川 伯耆守殿
- 木村 小隼人殿

本 能 寺 合 戰

斯くの如くござりまするのを見て光秀大い怒り光諸將  
しく筑前守の下知又従がへどの何事だ其の九州探題を命ぜら  
れ秀吉も中國の探題あり我れも彼れも同格あり然るを平大名  
同様又斯る尊命こそ殘念あり傍ら又あつたる内藏助 齋、イ  
ヤ、何事も君の嚴命決して尊慮又掛けさせられべきは非ず  
殊に戰場の御沙汰書は多く至急を以て第一とすれば尊卑  
重さく扱かふこそ戰場の習ひでござる指揮を受けよとあつて  
も御前の御前羽柴殿の羽柴殿……執次の者御受の答へ書を上  
る。此の所へ又た、御上使到來青山與三といふ者罷り越しま  
した日向守玄關まで出向ひよおよび上使を上坐へ直し遙か下  
ッて平身すれば、青、上意の趣き餘の儀はあらず丹州龜山江州  
坂本二ヶ城とも御取上の儀然やう相心得られよ替地の儀は遠  
て御沙汰之れあるべくどの事あり。ト言ひさして玄關へ候た

本 龍 寺 合 戰

しく駆け出で馬を引き寄せ是れは跡がり送り出でたる日向守  
又向ひ 青、上意今少し是れある。  
公の上意を切り賣する奴もあひものでございます青山  
與三といふものに至つて臆病者でございます是れよッ  
て斯くの如く  
青、サテ上意の……日向守不審又存じて頭を上れば、青、備中  
表へ出陣の上へ粉骨碎身して敵地を切り取り候らふ出雲岩見  
二ヶ國を相違さく下し置る、是れ亦た上意あり。一同呆氣又取  
られてアツと驚ろく折から其のま、馬へ鞭を加へて逃げ出し  
て仕舞ひました。先、折の丹州龜山江州坂本三十七萬石召し上  
られ未だ海の物とも山の物とも定まらざる地を下し置かる、  
どの言語同断主君の傍ら又あつたる四方天又兵衛今年十九歳  
四、己れ心得がたい事ありとて刀おッ取り駆け出すのを日向

本 能 寺 合 戰

守 且 又 兵 衛 待 待 云 一 言 止 む 事 得 ず 又 兵 衛 止 ま り  
ま した 此 の 時 日 向 守 又 一 内 藏 助 を 閑 所 へ 召 さ れ 且 出  
雲 岩 見 の 毛 利 の 敵 國 あり 現 在 我 が 龜 山 坂 本 を 召 し 上 ら れ 我 が  
武 功 を 以 て 敵 地 を 切 り 取 れ とい 是 れ 御 難 題 の 手 を 以 て 我 を 殺 さ  
役 も 調 の ぬ ざ れ 今 よ り 浪 人 さ せ て 敵 の 手 を 以 て 我 を 殺 さ  
す る か 但 し の 露 頭 の 難 題 遭 せん が 爲 ち 然 然 と ころ へ  
溝 尾 庄 兵 衛 進 士 作 左 衛 門 兩 恐 れ ながら 御 密 談 相 濟 ま す べ  
御 目 通 願 ひ た う と ぞ 日 向 守 光 一 密 談 又 ち 内 話 あり  
苦 し う ち 是 れ へ 兩 人 席 を 進 ん で 兩 此 の 上 か ら 何 仕 ま  
つ り ま せ う か 光 然 れ ば 御 説 を 致 す る よ り 外 へ 一 同 の 者  
退 れ 内 藏 助 是 れ を 聞 い て 最 前 か ら 黙 し て ぞ り ま した が 齋 御  
前 何 と ぞ も 天 命 じ や と 思 召 し 召 し て 御 師 ら め を 願 ひ た う と ぞ  
ま す 光 如 何 又 内 藏 助 只 今 青 山 の 上 意 の 使 蘭 丸 を も っ て 御 打

本 能 寺 合 戰

擲 軍 令 狀 の 無 禮 是 れ と言 ひ 彼 れ と言 ひ 内 藏 助 何 と 思 ふ や 内 藏  
助 彌 々 恐 れ 入 り 齋 一 元 來 大 臣 家 の 御 性 質 己 れ 又 諸 君  
ふ も の を 舉 げ 己 れ 又 背 ける も の を 遠 ざ け 聊 さ か 御 仁 心 かく 我  
れ よ り 器 量 優 り し も の を 嫉 み 己 れ よ り 器 量 の 劣 り し も の を 見  
下 した ま ふ 彼 の 君 の 御 稟 性 亦 た 内 藏 助 も 一 工 風 心  
ざ れ ば 兎 も 角 も 君 公 たら ず と 臣 臣 たる 禮 を 盡 し 御 説 の 外  
い ぞ さい ませ ん 此 の 時 光 秀 一 世 惡 名 を 残 す とも 一 旗 揚 げ ん  
日 向 内 藏 助 面 色 を 變 へ 兩 眼 涙 を 浮 べ 齋 御 前 未 だ 重 兵 衛  
と 思 ふ 内 藏 助 面 色 を 變 へ 兩 眼 涙 を 浮 べ 齋 御 前 未 だ 重 兵 衛  
と 仰 せ ら れ たる 昔 し よ り 今 九 州 の 探 題 職 を 命 ぜ ら れ たる 上 へ  
丹 州 龜 山 江 州 坂 本 兩 城 を 獻 ず る とも 九 州 此 を 御 前 の 御 領 地 と  
思 し 召 し 先 づ 其 の 御 賢 慮 の 捨 せ ら れ る や う 願 ひ た う ぞ  
さ る 天 又 も 地 又 も 災 厄 あり あり 日 月 照 す とい へ とも

本 能 寺 合 戰

是は餘あり地も亦た震動の憂へあり一旦御不興を蒙むらせられたりと雖も我れ又於て惡心あければ頓て天道眞を照したまのざる事やあらん往昔主を討たる唐の安祿山、末代和漢の隔つと雖も人は是れを爪弾きすることございませす主を討つて無道の汚名を殘し申すおとや言語同斷是等のこと常々御講義をおされ人又效ゆる御前よあらずや良や九州探題の名義ばかりといへども出雲石見の我々戦先をもつて切り取り申すべし先づ、斯ることの思ひ止まらせらるゝこそ然るべきでございませす、  
幾度か思ひ定めて變るらん頼むまじき我が心あり  
實は齋藤内藏助の古今獨歩の忠臣、山崎の戦かひ敗れ主従とも其の首級は島木又掛けらるゝといへども此の内藏助精忠あるがゆゑ長男を與惣右衛門と言ひ次男を角右衛門と言ひ三男を

本 能 寺 合 戰

伊豆守利光と言ひ四番目を、女子よてお福と申す此のお方の後ち又美濃國の住人稻葉佐渡守正成、此の人の妻もありまして仔細あつて又た夫婦分れとあり三代徳川將軍家光公御幼名竹千代丸殿へ御乳を上げ乳人とおつて勤め千辛万苦の忠勤より後ち又の東福門院の御縁をもつて朝廷へ参内を遂げ春日といふ御名を賜はり剩つさへ緋の袴御免も相成り此の御方の執成よよつて長男與惣右衛門の齋藤の節深川猿江六千石齋藤内藏頭是れあり次男角右衛門の仔細あつて平民とある然れども角右衛門子供等の各々大名旗本へ嫁し或ひは養子とあり其の家を興しました三男利光の明智家亡びて後ち加藤清正の臣とあり其の高一萬石よまて具身し加藤家亡びてより春日の局の手引を以て是れ亦た小石川竹島町五千石齋藤伊豆守是れあり春日の局の今本郷積穀寺天澤山驛祥院よ祀りす此の寺よ春日

本 能 寺 谷 戰

の局の木像且つ伊豆守利光の墓もございませす是れ内藏助の亡  
びるといへども天其の誠忠を哀れみ其の家名を毀斬し残した  
るの因果應報善事の徳でございませす

第 四 回

光秀意を決して丹波又歸る  
信長上洛して本能寺又宿す

明智光秀如何も物煩らしく止らんとしても止めがたき  
己が心を以て心を制すると雖も其の心の止りがたきは是れ  
亦た己が心の一ツより起るので寝られんまゝと光誰とある  
左馬之助を是れへ性畏こまりましてござる。此旨早速申し  
傳へまする依て明智左馬之助光俊召し又應じて服を改ため御  
傍近く來りて兩手を突き左御前より未だ臥させたまはざる  
か光然ればあり其許へやすべき事あつて夜中あがら是れへ  
呼だり實に我が身の危急存亡旦夕又迫れり最前の御上使我が

本 能 寺 谷 戰

領地を召し上られ未だ手も止らざる陽炎電光水の月定めが  
たき敵地を取つて我れも賜いらんといふは是れ明智の家滅亡  
の時來つたり依て敵の手を借りたまひて我を捨殺しの御計略  
平常の御氣性其の淵底鏡にかけて見るより鮮やかあり斯く非  
道の御舉動の般の紂王王莽董卓等しく右大臣家の御所業萬  
民既又倒れ我れ是れを見るも忍びず天又替つて無道を誅  
し一度天下を改革せんと思ふあり併しあがら古今獨歩の明君  
と云ひ容易からざる大望を申し聞ける其許が心底包まずし  
て呉りやるやう是れを承たまひ驚いて左馬之助膝摺り寄せ  
主君の手を取て目も靡立て確たと睨み左何事をか仰せらる  
君の御心へ如何ある天魔が魅入れらふか古來より下として  
上を掠め臣として君を弑する此の上もあい大逆臣第一惡名を  
幾億万世の末又傳ふる何とて然やうある儼を仰せられるか素

本 能 寺 谷 戦

より右大臣家より賜る御高祿速やか又御返納遊ばされ我々  
粉骨碎身をいたし出雲石見を切り取り献納いたす何の仔細  
や候らふべき仮令信長公又斯やうの儀ありとて御當家とおい  
て然やうのことと是れあるべきか何處までも臣たるの道を行  
ひたまひと遂に信長公の御疑がひも晴れて却つて御當家の  
幸はひと相あるべし是れ万代不朽の大道あり斯くまで又説き  
諫むるも光秀此の時まで悄然として頭を垂れてをうたるが漸  
やく口を開いて光秀が申すところ一通り尤どもあれと君  
臣を見ること土芥の如くせば臣また君を見ること譬敵の如し  
是れ又依つて此の古語又まかせ最早や決心の上の止がたき事  
あり是れを聞いて左馬之助 左忍れあがら其の思し召し甚は  
だ相違つかまつりませす君君たらすとも臣の臣たる道を盡し悪  
き親を持つも悪き子を持つも皆亦因縁あり又た君父何れも重

本 能 寺 合 戦

きものかれは是れよの勝つべき道理あし先づこの儀容易  
あらざる事あれば千載の後までも汚名を殘したまふを快よし  
と思し召すや尙ほ君の思し召しを伺がはん此の時光秀礮と手  
を打つて光天晴れ爾が申すところ一々我が胸中又針を刺す  
が如く此の上からの速やか又我が首打つて此の事を訴たへ出  
られよ國又争臣五人ある時の主無道といへども其の國を失  
はずと誠と又其許がすするところ一々感服したり併し實の最  
前此の儀の内蔵助も申し聞けた今其許がすするところ彼れ  
が申せしものと聊かも違はず宛がら符節を合するが如し聞く  
より左馬之助面色變つて又た光秀の側近く進み左エ何  
と御意遊ばすや最前内蔵之助が申せしと……扱ひ此のこ  
内蔵助へ御相談在せられ御決心をしたまふ上我等も御相談  
仰せ聞られまするの等聞あらざることを此のまお捨て置きた

本 能 寺 合 戰

まふ時の忽ち大望願つかまつる嗚呼是非もあき次第あり  
速やかかと思し召し断ちたまへ私に於て口外に仕まつらざれど  
も如何して是れを亦た内蔵助より洩れんも計りがたく此れ天  
知る地知る斯ること右へ話し左りへ述べ一人も数多く仰せ  
聞られぬすれば必らず露顯するものあり此の上からの諫めて  
も伊決心とあらば手前も於て假令へ無道の悪人と言は言へ  
君も従がひ奉まつりますこととせざる兵の最とも瞬速を尊と  
しどす内蔵助への我等より必らず説き明すべきあり尤ども信  
長公の非を擧げて教ふれば其の惡逆無道言語又絶えたり第一  
平手中務太輔が諫めしごとく孝行の道厚からず殊々無禮な在  
するも依て人怒る者多し第二の鬼神を敬まひ社稷の神を祀  
りたまひざりしよ依て遂に天神地祇の守りを受けたまひす又  
た國家を治むるよの民を本とし稟傑の士を撫で義士を擧げ奉

本 能 寺 合 戰

係を大本とし忠臣烈婦を感したまひてこそ遠近とあく左右前  
後より自づから治まり敵國の兵と言へば皆お打ち滅ぼさす  
いへども其の仁政又懐き自づから味方とあるべきあり又た聊  
さかの事より起り紀州高野山へ泉州堺の代官松井友閑法印よ  
り備促の武士三十餘人遣ひし戸障子を蹴破り成ひの踏み破り  
器物雜具投げ抛り打ち損じ剩つさへ古老碩學とも言ひす當る  
を幸ひひ打擲しおよびし段是れ天の憎まざらんか我等一人へ  
仰せ聞られたのみからば何處までも身命を抛うち強謀を仕ま  
つるが齋藤の素と譜代の臣もあらす伊當家と同家同様あり  
如何又賢人聖人といへども人の心の圖り難き言語の及ぶと  
ころもあらす幸はひ右大臣家を執し奉まつる此の時あり  
田家の元老武勇自慢の柴田勝家の今しも北陸道十三頭の大  
もろどもも越後路よあつて大敵上杉と戦かひ最中是ぞ幸はひ

本 能 寺 合 戰

かれハ密か又勝へ書狀を贈り此の方よりも人数を出し前後  
より決んで討ち立ておは如何又武勇の勝家ありとて亡ぼさん  
こと必定あり又た關東管領澁川一益ハ幸はひ關東より小田  
原北條と戦ひ最中あり是れ亦た密か又書狀を贈り北條と合  
併して柴田のどく狭み討つよ何の恐るゝ所あらんや當時日  
の出の羽柴筑前守ハ中國より至つて毛利三家の大敵と戦ひ最  
中幸はひ毛利の大軍を恐れ加勢を乞ふ折柄あれば是れ亦た  
毛利三家と謀り合せ中國より猿面冠者を亡ぼすこと學中よりあ  
るものを取るより易し丹羽池田高山中川澁川蜂屋ありといへ  
ども高の知れたる小大名は等何ぞ恐るゝ足らん海道一の  
名將たる徳川殿ハ幸はひ僅かの小人數にて京都よりあるこそ天  
の與へ出口く又伏兵を備へ討ち取る手術ハ最と易し且つ右  
大臣家も遠からず上洛定めて御供ハ小勢あり君ハ一先づ龜

本 能 寺 合 戰

山へ伊歸城遊バし伊人数調練催促あつて中國表へ伊出馬と見  
せかけ愛宕街道唐櫃越不意に發つて京都へ賣め寄せ供奉の人  
人を皆お撃ち散し右大臣家を討ち取り奉まつり暫時天下へ  
布告し大業を開き第一仁を垂れ第二法を專はらし征夷  
大將軍の威名を現はしたまふハ手と唾を吐いて粟を搦むがこ  
とし和漢とも古しへより無道の君と代つて是れを弑し天下を  
治むる其の例擧て枚へがたし何の憚かるところや有らん無  
を廢し仁政を施こし天下の激亂を靜むる上一天万乗の君悉  
しけおくも宸襟を安んじ奉まつり下の万民塗炭の憂苦を救ひ  
世を泰山の安さよ治むるハ是れ武門の望むところ兵家の嗜み  
み何の憚かるところや有らん夫れども御不運にて事の成ら  
ざる其の時の主從殘らず最期の一戦存分切り拂ひ潔きよく戦  
場又頭を擧し死出三途の伊供いたし候らはん是れ勇士の本望



本 能 寺 合 戰

ありイザ心を決したまへトハ言ふもの、大望の必らず洩れ  
易く内蔵助と某と二人の外、他言は無用片時も早く内蔵助を  
召したまひ仰せ聞けらるべきあり我等も此の傍席にあつて承  
たまへらん光秀起ち上り思はず、光悦はしと事あり然らば是  
れへ内蔵助を呼ぶべきあり。トて又た、内蔵助より前のこと  
く仰せ聞ける傍はらよりの左馬之助はれを説きまするより  
今、餘儀多く内蔵助も是れ又同意を致しました扱て翌日二十  
三日信長公の中國表へ御出立大小名御旗本御暇のため安土城  
へ惣召し出し仰せ出され十三頭の大名家御次とおいて御料理  
を下し置かれ此の時森蘭丸昨日の意恨を晴らし御前にお  
いて日向守を打擲いたし今日の容子如何あらんと忍び出で  
の蔭より差し覗くを斯くどの知らぬ日向守己れが恨みどの言  
ひあがら道あらぬ事あれば一旦覺悟のしたれども如何のせん

本 能 寺 合 戰

ト兎つ追つ諸大名御暇を下さるをり心動け何となく其の体  
異体として御料理御頂戴の席まで手も持てる筈を取り落し何  
となく物も動する形あり蘭丸の其のまゝ奥へ退入り信長公の  
御袖を控え、森恐れあがら今日日向の有様何となく物案事の  
容子平常の大丈夫どの見えかねます全たく其の心中も一物あ  
りて彼れが其の異体是れ疑がひの一ッあり万一の儀も候の  
由々しき儀と心得候らふ間、只今のうち召捕て糺明つかまつる  
でござらふ。信長公片類も笑を含みたまひ、信其の心配の無用  
無用一ト先づ中國へ出發させ敵の手を借りて滅ぼさんこと上  
策あり捨置け、ト仰せゆえ蘭丸も詮方なく遂に其のまゝ、よ  
相成りました哀れ蘭丸の申すことくせば右大臣家の御尊体も  
御無事であるべきでございます愛を以て考んがへれば蘭丸の  
容易あらざる男でございませう扱て其の日一同御暇を頂

本 能 寺 合 戦

だき退城におよび或るが中よも日向守事既ス斯くてあらざれ  
ハ一先づ京都より夫れより舊領龜山へ行かんせしが愛宕  
山の麓に至り馬を留め諸大將へ申し出すハ光サテ此度出陣  
の首途と言ひ誠々大切の場あり武運長久のため年来信する愛  
宕山殊々今日廿四日御命日あり是れより愛宕山へ登山よ  
よび西の坊威徳院行遊又祈念を頼み幸はひ高名の歌人花本宗  
匠を呼び集り百韻の連歌興行よ及ぶあり其方どもハ本街道よ  
り龜山よ引取り軍馬點檢よおよび往來筋を吟味いたし狭きと  
ころの切り開き橋おき所の橋を架け武者押の妨害あさやうよ  
致すべさありト一々下知相濟んで諸大將ハ一先づ丹州龜山へ  
引揚げました此方ハ僅か五十人ばかりの供有名の武士よハ東  
野六郎兵衛比田帶刀二人召し具して愛宕山威徳院へ登山よ及  
び兼て沙汰いたしてあれハ威徳院懸懸よ出向ひ西の坊へ案内

本 能 寺 合 戦

し種々獲應淺からず召し集りたる花本宗匠中よも里村紹巴兼  
如心前遊庵宿源昌院行澄何れも悉く目通り相濟で是れより  
連歌興行よありました文盛ハ東野六郎兵衛着坐いたし風流  
の道ハ貴もあし賤もあし皆あ一つ所へ圍坐して筆を取り硯と  
引き寄せ是れよも式あつて又た法あり其の第一ハ光秀之れと  
立句といたします  
時ハ今天が下しる五月か  
此の時西の坊行遊跡を附けましたのハ  
水上まざる庭の夏山  
此の時里村筆を取つて明智の句底を心元あく思ひ天が下しる  
といふハ何うも言ひ廻しが不思議だ夫れども本心ハイサ知ら  
ず若し心中ハ叛逆の企だてハもあらハ意見をしても止めんも  
のと兩様兼て第三を附けたり

本龍寺合戦

花<sup>はな</sup>落<sup>おち</sup>つる流<sup>なが</sup>れの末<sup>すえ</sup>を堰<sup>せき</sup>とめて  
是<sup>こゝ</sup>れ紹<sup>しやう</sup>巴<sup>は</sup>あり

春<sup>はる</sup>も尙<sup>なほ</sup>はか<sup>か</sup>ねの櫻<sup>さくら</sup>さや<sup>や</sup>びぬらん  
あぞと追<sup>お</sup>々<sup>々</sup>附<sup>つ</sup>けて参<sup>ま</sup>りまして

色<sup>いろ</sup>も香<sup>か</sup>も醉<sup>よめ</sup>をすゝむる花<sup>はな</sup>の下<sup>した</sup>  
ソコア上<sup>あ</sup>句<sup>く</sup>が光<sup>あき</sup>秀<sup>しゆ</sup>よて

始めと終<sup>はつ</sup>り「時<sup>とき</sup>」といふ字<sup>あざな</sup>を便<sup>べん</sup>用<sup>よう</sup>ひまするの心得<sup>こころえ</sup>がたいもので  
ございませす土<sup>つち</sup>岐<sup>ぎ</sup>の明<sup>あき</sup>智<sup>ち</sup>の本<sup>ほん</sup>姓<sup>せい</sup>あり時<sup>とき</sup>の土<sup>つち</sup>岐<sup>ぎ</sup>とい違<sup>ちが</sup>へども  
音<sup>ね</sup>の同<sup>どう</sup>じことぞ「天<sup>あま</sup>」が下<sup>した</sup>しる「いへ」天下<sup>あまた</sup>を知<sup>し</sup>しめす思<sup>おも</sup>し召<sup>め</sup>し  
と見える最<sup>も</sup>早<sup>はや</sup>や一<sup>いつ</sup>天<sup>あま</sup>下<sup>した</sup>の我<sup>われ</sup>が有<sup>あ</sup>と言<sup>い</sup>はぬばかりの事<sup>こと</sup>でござい  
ます殊<sup>こと</sup>に五月<sup>ごがつ</sup>かきといふ今<sup>いま</sup>時<sup>とき</sup>の五月<sup>ごがつ</sup>尙<sup>なほ</sup>は以<sup>も</sup>て審<sup>しん</sup>かしき事<sup>こと</sup>で

國<sup>くに</sup>々の尙<sup>なほ</sup>は長<sup>なが</sup>閑<sup>かん</sup>ある時<sup>とき</sup>

友<sup>とも</sup> 源<sup>げん</sup>  
昌<sup>あきら</sup> 吃<sup>く</sup>

本龍寺合戦

さいます總<sup>すべ</sup>て此<sup>こゝ</sup>の歌<sup>うた</sup>俳<sup>はい</sup>の類<sup>るい</sup>ひの其<sup>その</sup>の心<sup>こゝろ</sup>を吐<sup>は</sup>くものでございませ  
す夫<sup>つま</sup>れゆえ人<sup>ひと</sup>情<sup>じやう</sup>の類<sup>るい</sup>ひ人の句<sup>く</sup>は句<sup>く</sup>体<sup>たい</sup>が不<sup>ふ</sup>人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>でございませ  
厚<sup>あつ</sup>き人の如<sup>ごと</sup>くも夫<sup>つま</sup>れ人<sup>ひと</sup>情<sup>じやう</sup>が籠<sup>かご</sup>つてをりませす宜<sup>よろ</sup>姿<sup>すがた</sup>の句<sup>く</sup>よ

一度<sup>いちど</sup>見<sup>み</sup>れば二<sup>ふた</sup>度<sup>ど</sup>どの見<sup>み</sup>るよ及<sup>およ</sup>ばんと思<sup>おも</sup>ひませす然<sup>しか</sup>れども朝<sup>あさ</sup>あ  
夕<sup>ゆふ</sup>あも趣<sup>おもむ</sup>ふきといふものゝ變<sup>かは</sup>るものでございませす夫<sup>つま</sup>れも依<sup>よ</sup>つ  
て朋<sup>とも</sup>友<sup>とも</sup>かへてと言<sup>い</sup>へば先<sup>まづ</sup>の朋<sup>とも</sup>友<sup>とも</sup>を捨<sup>す</sup>てゝ又<sup>また</sup>新<sup>あらた</sup>た朋<sup>とも</sup>友<sup>とも</sup>を連<sup>つ</sup>  
れて行<sup>い</sup>つて見<sup>み</sup>たることゝ見<sup>み</sup>えませす是<sup>こゝ</sup>如何<sup>いか</sup>も餘<sup>あま</sup>情<sup>じやう</sup>が深<sup>ふか</sup>うござ  
います斯<sup>ごと</sup>く如<sup>ごと</sup>くしてこそ風<sup>かぜ</sup>流<sup>なが</sup>でございませす

大<sup>おほ</sup>雪<sup>ゆき</sup>や朝<sup>あさ</sup>寝<sup>ね</sup>の門<sup>かど</sup>へ掃<sup>はき</sup>き寄<sup>よ</sup>せる

斯<sup>ごと</sup>くやあ句<sup>く</sup>の浮<sup>う</sup>海<sup>かい</sup>極<sup>ごく</sup>まつたものでございませす己<sup>おの</sup>れが早<sup>はや</sup>く起<sup>た</sup>き  
て隣<sup>となり</sup>家の朝<sup>あさ</sup>寝<sup>ね</sup>をしてゐる門<sup>かど</sup>へ幸<sup>さい</sup>はひと掃<sup>はき</sup>き寄<sup>よ</sup>せるやうあ不<sup>ふ</sup>實<sup>じつ</sup>  
あもので如何<sup>いか</sup>あ宗<sup>そう</sup>匠<sup>じやう</sup>でも此<sup>こゝ</sup>の句<sup>く</sup>の取<sup>と</sup>りませす是<sup>こゝ</sup>れ只<sup>ただ</sup>だ

本 能 寺 合 戦

桃林の想像でございませす。皆て日向守百韻の連歌事終り其の詠  
草を愛宕大権現の神前又備へ一山坊中打ち寄つて怨敵退散  
武運長久陣中大勝利の御祈禱了つて花の本の宗匠夫れへ  
引引出物等を下し置かる何れも御暇を仰せ出され日向守の  
一先づ丹波龜山へ引取り交した然るところ里村の御暇を頂だ  
さ歸る道々考がへ見る又日向守の歌の休何う考がへ見ても天  
下關伏の歌だ兼て右大臣家の御不興を蒙ひられしと承たまは  
りしが若や叛逆の企ていもありのせんか如何よしして是れを  
諫めんと存じ然れば第三の句も花おつる流れの末を堰どめて  
ト是れを止めてありませす是れ句の働らきといふもの辭短かく  
意の長しといは是れでございませす儘か又十七文字で事足りて  
りませす然れば歌の我が國の衰あり然りといへども里村の後日  
此の詠草を如何して御吟味とあり此の方へ御調べあること疑

本 能 寺 合 戦

がひあし其の時又あつて我が職掌として心付かざるといふ  
せまヒトツ言へども確と證據もあきことゆゑ如何とも詮方あ  
しと暫らく思案又呉れたりしが己れ又問ひ己れ又答へ立ち戻  
り來つて彼の詠草を取り出だし小刀の先き又て天が下し  
いふところを削り落し貼紙をして元のごとく其の上へ天が下  
しると同じことを書き付けました先のを消まして貼紙をして  
同じことを書くの無益あやうあれども是れ又の意味のあるこ  
とでございませす夫れ又て元のまゝ納め置いて立ち歸りませ  
茲をもつて考がへみる又里村紹巴の中へ恐るべき人物あり  
矢張り斯る時勢又の風流者といへども濫り又心の許しません  
果して問もあく本能寺の大乱が起り筑前守の中國より引返し  
六月十三日山崎久我暇の一戦又逆臣明智を亡ぼし三井寺へ陣  
を取り光秀の餘類悉く御穿鑿愛宕山西の坊其の時の事まで知

本 能 寺 谷 戰

りたまひ彼の詠草をお取寄せ相成り吟味とありました第一番の日守の時、今天が下しる五月哉、下讀みかけて筑前守以ての外、驚ろき、秀ッレ、紹巴、めを呼べ、ト直ち、又、差紙をもつて召し出さる扱こそ、ト里村、の罷り出でました此の時、秀吉もつて召し出さる扱こそ、ト里村、の罷り出でました此の時、秀吉公御直の傍尋ね、い、た、し、殊、又、其、方、の、歌、も、詠、草、又、載、せ、て、あ、る、を、餘、人、其、方、も、同、席、を、い、た、し、殊、又、其、方、の、歌、も、詠、草、又、載、せ、て、あ、る、を、餘、人、の、兎、も、角、有、名、の、其、方、光、秀、の、立、句、を、知、ら、ぬ、と、言、ふ、か、又、た、知、ら、ん、と、言、へ、ば、知、ら、ぬ、道、理、の、無、い、時、の、今、天、が、下、し、る、五、月、か、か、眼、前、天、下、調、伏、の、歌、を、詠、し、を、ナ、セ、其、の、ま、よ、拾、て、置、い、た、察、す、る、と、こ、ろ、其、方、も、日、向、守、と、同、腹、と、相、見、わ、る、返、答、い、た、せ、以、て、の、外、の、傍、怒、り、又、て、斯、く、傍、尋、ね、が、あ、り、ま、し、た、兼、て、巧、み、置、い、た、る、里、村、紹、巴、斯、く、あ、ら、ん、ど、の、承、知、の、こ、と、あ、れ、ば、少、し、も、恐、れ、ず、里、只、今、仰、せ、聞、ら、れ、ま、し、た、明、智、殿、の、傍、歌、私、承、た、ま、は、り、ま、し、た、と、の、相、違、つ、か、ま、つ

本 能 寺 谷 戰

りたまひ彼の詠草をお取寄せ相成り吟味とありました第一番の日守の時、今天が下しる五月哉、下讀みかけて筑前守以ての外、驚ろき、秀ッレ、紹巴、めを呼べ、ト直ち、又、差紙をもつて召し出さる扱こそ、ト里村、の罷り出でました此の時、秀吉公御直の傍尋ね、い、た、し、殊、又、其、方、の、歌、も、詠、草、又、載、せ、て、あ、る、を、餘、人、其、方、も、同、席、を、い、た、し、殊、又、其、方、の、歌、も、詠、草、又、載、せ、て、あ、る、を、餘、人、の、兎、も、角、有、名、の、其、方、光、秀、の、立、句、を、知、ら、ぬ、と、言、ふ、か、又、た、知、ら、ん、と、言、へ、ば、知、ら、ぬ、道、理、の、無、い、時、の、今、天、が、下、し、る、五、月、か、か、眼、前、天、下、調、伏、の、歌、を、詠、し、を、ナ、セ、其、の、ま、よ、拾、て、置、い、た、察、す、る、と、こ、ろ、其、方、も、日、向、守、と、同、腹、と、相、見、わ、る、返、答、い、た、せ、以、て、の、外、の、傍、怒、り、又、て、斯、く、傍、尋、ね、が、あ、り、ま、し、た、兼、て、巧、み、置、い、た、る、里、村、紹、巴、斯、く、あ、ら、ん、ど、の、承、知、の、こ、と、あ、れ、ば、少、し、も、恐、れ、ず、里、只、今、仰、せ、聞、ら、れ、ま、し、た、明、智、殿、の、傍、歌、私、承、た、ま、は、り、ま、し、た、と、の、相、違、つ、か、ま、つ

本 能 寺 谷 戰

紹巴めが忍んで削り落し貼紙をして元の通り認ため己れが罪  
を免れんと拵らへたナ中へ喰へぬ坊主め。ト以てのはか憤は  
りたまひしが未だ明智の殘黨悉く御詮議の最中ゆえ是れ等枝  
葉の事までの中へ吟味も届かぬ追て殘黨の吟味も濟み其の  
上の事又致さふ憎い奴だが先づ夫れまで捨置て遣なふト  
思し召しけれバ秀吉公俄か又眼色を和らげたまひ 秀紹巴今  
日の吟味一通り申し分け相立た上へ苦しうおい罷り立て。大  
膽ある里村心中へ當時日の出の羽柴筑前守天下の名將と承  
たまはりしが一向學問の無い人に見ゆる何と言ても尾張國中  
村から匹夫下賤の成りあがり我が計略の心づかすスツマリと  
注文又筈ツたりト思ひす莞爾笑ひながら御前を立つ其の有様  
を筑前守御覽じて扱も大膽ある里村紹巴今日の大切の用向あ  
れバ格別の仁心をもつて助けしよ我れを欺ひき得たりと心得

本 能 寺 合 戰

て笑ッて立ッたる憎い坊主今又思ひ知らせんと心中へ秘して  
其まゝか下げさかりました何うして秀吉公中へ恐ろしき御  
方ウカと笑ひもされん果して天正十四年天下一統の大業を開  
き其の身人倫の司として職關白より官の太政大臣とありた  
まひ位正二位又陸叙り日頃憎いト思し召したる里村紹巴  
聚樂の邸へ召し出される何事やらんと紹巴出で平伏を致し  
ました御難を捲あげ殿下御直の御辞 秀吉しうおい近う  
…紹巴山崎の一件以來久々であつた相變らず大膽を働らくか。  
恐れ入ッて 紹巴の彼の時の事が又た出るかと彌々恐れ入り  
平伏たり其の時殿下お笑ひ遊ばして 秀今日其方を招きし  
頼みたり事あり仍て招きたり早速参り呉れ満足く知る通り  
予の今人倫の司とあり殊も關白の高職を預かり今までと違ひ  
空内其の外公卿百官悉く交り深し御歌の御會も召させら

本 能 寺 合 戦

れた礮り元より此の秀吉の匹夫下賤の成りあがりものあり数  
島の道おどりの一向知らん今日より其方を我が師と頼むを以て  
腹藏あく教へ呉れよ、紹巴いよ、恐れ入ッて是れより秀吉公  
又御歌を御教導し上げました後年より名歌も詠せられたる  
此の紹巴の教へ奉まつる所あり惜光秀の丹波近江兩國より  
軍勢を催促はし追々龜山へ到着いたしますすれは中國出陣と觸  
れ大將分のほか密事を知るものは是れなく腹臣のもの兩三人安  
土へ開者忍ばせて信長公の御出馬を今やと相待たり抑  
も天正十年壬午の五月此の月の小の月にて二十九日晦日あり  
安土本丸の御番より津田源十郎加藤兵衛頭野々村又右衛門尉  
遠山新九郎世木彌左衛門尉市橋源八、榊田忠兵衛尉、二の丸の御  
番より蒲生右兵衛太夫森次郎左衛門尉、雲林院出羽守、鳴海助右  
衛門尉、祖父江五郎右衛門尉、佐久間與六郎、箕浦次郎右衛門尉、福

本 能 寺 合 戦

田三河守千福遠江守前波彌五郎、山岡對馬守等仰せ付られ其外  
の士卒より今度の直に中國へ御進發あるべきの間陣用意い  
たし一左右次第打ち立つべき旨仰せ出され同じく廿九日信長  
公僅か又近習百五六十騎ばかりよて上落したまふ總て永祿の  
頃まで漸次馬印といふものございませぬ元龜の頃より始まり  
ました漸次は是れが長じまして思ひく、我れ劣らじと其の  
形を變まして戦場の目印又致しました只今の世はあれは目標  
の是れを要といたします信長公の旗の一巾の黄絹は永樂の錢  
を記し招きよの南無妙法蓮華經の題目を記きつけたる九本  
あり信忠卿の御形は金の切裂あり、信長公の御形は此の時蒲生右兵衛太  
夫賢秀餘り御人數が御小勢よて渡らせられすゆえ、蒲此度  
の御上落萬金も替へさせがたき御身をもつて輕く御出  
立の御無用よ遊ばする、やう。信長公笑はせたまひ、信賢秀の

本 能 寺 合 戰

律義を男かか中国より外に敵といふものなし今毛利輝元は  
かりあり別して五畿内のうち予が有あり何ぞ是れより軍勢  
を召し連れ及ばんや。此の謀めを用ひたす御出陣の御  
馬と相成る信長此の日の御軍装の赤地錦の御直垂れ緋絨の御  
鎧朱塗の裏まへへ金といたし表は瓜のうち唐花ついたる  
陣笠を腦上へ押戴だき古金襴の御差貫左文字の御劔虎の皮の  
尻鞆を掛けたまひ帯取しかど引き結び連銭芦毛の逸物より皆  
朱の鞍置き鏡も共朱塗あり是れ亦た焼金にて御紋ぢらし約  
の皮の馬籠も燃立つばかりの朱の厚綿出雲巻も紫の二重手  
綱を握らせたまひ朱の笛巻の鞆を御腰に差したまひ黒塗の  
金一角御定紋附いたる馬柄杓の御馬前の口附是れを携さへ左  
右の御供思ひの軍装にて何れも道中陣笠を頂だき伊達  
道具の白熊二本緋羅紗の長刀中結び紫あり朱塗の敷箱二十本

本 能 寺 合 戰

御持筒鐵砲二十挺切火繩にて御行列二行も列あり下はト  
聲高く下殿の松並木も平伏して是れを拜まんとて集ひ來るの  
初春の朝又和歌の浦波の寄するが如く風徐むろよして草の  
夕の露を残り四方を拂つて出立たまふ大津の邊よかりたま  
へハ何しあふ其の景色筆も及びがたく  
さいあみや滋賀の浦風いかばかり心の中の涼しかるらん  
ト右衛門督公任の詠たりし歌も思ひ出られけり安土より大津  
までの行程四里ばかりあり既に大津の入口まで成らせらるゝ  
折しもわれ不思議あるかあ一陣の怪風御馬前よりドク〜と  
吹きおこり然しも勇める兵士等も面を向くべきやうもあく  
土埃混屯として立つ足も定まらず袖を翻し笠を押へ暫らく歩  
行も止むばかり時不思議あるかあ信長公の召させられたる  
連銭芦毛の逸物が聲を震はし然も慌たしげと嘶け打て



本 能 寺 谷 戦

も障れども少しも進まず足弱車の抄取ねバ只さへ烈しき右大  
臣家火と御心を焦燥たまひ尙も進まんとしたまふ又冠たるお  
笠の紐切れて何處ともなくクル〜と空へ舞ひ上りました流  
石は颯風とや言はんか御供の人々呆れ返ってアレヨ〜と上  
を下へと動揺す然れども大風詮方なく途もお笠の何處とも知  
れずありました據所なく御替笠を献じ奉まつる激々風静まり  
眼前さへ見えざりける松の立木も目前より現れ土煙り左右へ  
分つて始めて大津の町あることを知り札の辻より八町へ御  
掛りあさるれば其の所へ何處ともなく最前の陣笠空中より投  
げ付けたるが如くツドンとばかり御馬前も落ちたり今しも馬  
の蹄を上げ運ばんとする機会前もめしたるお笠の地も落ちた  
れば是れへ踏んだる其の爲もツ〜と言ふや否や微塵とあ  
つて碎けたり人々奇異も思ひ是れこそ最前空中へ巻き上げた

本 能 寺 谷 戦

る所の御笠あり忠義ある人の心を痛め心なき輩も眉を皺め暫  
時猶豫の体ありしが信長カラ〜と笑ひせ玉ひ 信首途宜し  
首途宜し是れより中國へ出馬せば毛利の軍勢皆殺し致すの  
斯のごとく落花微塵馬蹄もかけて踏み潰さん其の前表顯然た  
り者ども悦こべ進めやト神あらぬ身は是非もあく却つて我が  
身の前表と夢も了りたまはずして逢坂山、關の清水、走井の餅、  
大谷片町、追分、山科、蹴上げの茶屋、日の岡、栗田口、三條の大橋、小  
橋を渡り西の洞院本能寺の傍旅宿へ傍着でございます尤ども  
當今の本能寺の所との違ひます元來地内手狭あるがゆゑ女  
中ども九十二人の傍旅宿と相あつたるゆゑ山内僧侶の悉く立  
ち退き明け渡ししてお貸し上りました中將殿の二百人ばかり  
よて二條妙覺寺傍旅宿右大臣家の當寺に在します是れより傍  
酒宴と相成り夏の夜の最と短かく未だ宵あがら明けやすく宣

本 能 寺 合 戰

の刻の時計思はず夜も甚く更たりしと信長酒酌の有様よ  
て信コレ聞九一さし舞を舞 関心得ましてござる。ト言ひさ  
ま妻紅赤ひの扇をサツと開き照柿の帷衣又水色の袴、九此の  
時 關ア、ウ怨めしや如何又義經思ひぞ出る樽の浦の其の船  
軍さ今の早や聞浮ふかへる生死のト八島の謠を誦ひ仕舞を一  
さし舞をばりますア面白し くト信長悉く手拍子を拍たせ  
られ其がまゝ前後を忘れたまひ「スバシ」の蚊帳へ入りたまへハ  
漸々お退と相成り近習小性お次へ引き退つて其のまゝ一  
睡の夢を結ぶ眞又目前の事あるとの知らぬ身の果敢なき事よ  
てありまする。

第五回

宇野忠重毒及又瘧る  
光秀軍勢龜山を發す

備て明智日向守光秀の天正十年五月廿八日愛宕山を立って丹

本 能 寺 合 戰

波國龜山へ歸城いたしました此の龜山と申するは以前福井因  
幡守の居城でございます然るを先年光秀丹波征伐の砌り是れ  
を責め落し夫れから此城へ手入を充分いたし始め是れを丸  
山と唱ひ又た岡山と申す後ち又た其の二ツを取つて一名と申  
し九岡山と申しました然るを龜山と改ためたるは萬代も繁昌  
をせんがため是れを壽きまして右様又號けました此の城内の  
次第又爪先上りよして堀高く又の喰違ひ等城内より群やかよ  
見ねます光秀の居室といふもの僅か六疊敷として四方へ様  
側を付け其の居室近頃まで人を入れることを禁じ櫓へ登つて  
見れば四方とも二里ばかりの間眼下見渡します所であ  
ります斯くて光秀の龜山へ着しますと其まゝ我が片腕と頼  
んだる宇野備後守忠重此の人を俄か又招きました其の理由如  
何んどあれハ此の宇野忠重の丹波國宇川の地頭でございます

本 能 寺 谷 戰

保津、山本、笹村の三ヶ所を領し二千石の主でございます。光秀若年の時より忠重と兄弟の縁をいたし至つて親密に交はり何となくとも明し明さるゝやうある交情でございます。然るに宇野備後守當春、武田責めの折から明智光秀に屬して武勇を現はし其の節右の腕へ矢を射込まれ其の傷未だ治しがたく追々暑氣に向ひまする事あるに依つて治療の行き届かざる所から傷口へ膿を持ち其の痛み甚はだしく言語應對對話の成り難いこと然れども素より斷金の交際あれば光秀が使者もろとも龜山へ参りました光秀此の時宇野忠重を出で向へ光秀能く大暑の折から出向さるありました殊も傷も今も多全快はれなく嘔や御困難事である餘り五月雨から引續いて此の兩三日の暑氣其はだしければ定めて御心も屈して在さんと存じ鹿酒を一献參らせやうとお招き申した次第でございます。是れへ参越しあれ。

本 能 寺 合 戰

ト先立ッて己れが彼の陣室へ案内しました光秀頼り美酒嘉肴をもッて備はれども備後守始終左りの手をもッて右の手を押へ宇野甚はだ失禮でござるが此の通りの傷ゆゑ又布をもッて肩へ釣てをる位でござるから實に御免を蒙むりたいと思ひました。が何やら慌たしき御使に尋常あらずと取るものも取り敢えず罷り出でました右の次第あれば御馳走の忝じけなく候へども頂戴の何うも相成兼ます。光秀近く摺寄つて四邊も人もあければ光其の傷の如何でござるか見せたまへ。備後守笑ッて「備イヤモウ面目あいことござる往昔漢土蜀の關羽の腕は毒矢を射られ肉の中も其の毒未だ残り痛み甚はだしく是れを療治致するに肉を断つて骨を削り洗はざれば全快あしがたいト申したをりから甚を打ちあがら欣然自若として眼色も變ぜず是れが治療を受けたと承たまはる外國の關羽何

本 能 寺 谷 戰

ぞ皇國の英雄是れも等しかるべきや痛いと云ふての恥辱あり  
手前不肖ながら國の爲めは關羽も優るとも劣る心ござら  
ん併しあがら酒の醫師が禁じまするゆゑ醫師へ對して恨しみ  
をります是れしきの事恥入る儀でござる 光如何さま貴殿の  
有名普ねく世も知られたれば誰か是を卑怯と言ふものゝ有ら  
ふか心静か養生致されよ……サア今日お招きすたの茲も某  
思ひ立つことあつて現今此世もおいて片腕と頼むところの貴  
殿一人あり左りの腕ばかりもても餘の人の左右の手より優れ  
ることの光秀も心得る昔し漢の高祖を助けたる張良といふ  
者あり其許此の張子房とあつて楚の項羽を滅ぼす計策を頼み  
ゆさんがためも招待いたした斯く申しまするト素より頭智鏡  
敏の備後守早や明智が反逆を推察いたし 備後將漢の高祖の  
例を引いて大義を企だてたまふもの由緒あり扱は織田殿を亡

本 能 寺 合 戰

ばし天下を掌握めさんの思し召しおらん貴將其昔し浪人の節  
零落して深編笠も襦袢を纏ひ藁草履を穿き破れたる扇も浪を  
打たせ縁樹蔭沈んで魚木も昇る景色あり下語られ歩行き世人  
の囊中も衰おはれたるの我れ人知る所あり夫れを僅か十八九  
年の今日近江丹波を領して其の高衆も超ゆる其の君恩を忘却  
して此度の陰謀偏へも天魔の魅入しおらん君々たらすとも臣  
の臣たるの道を守り仕うまつてこそ人の人かれ存心を改た  
めたまへ併し此の宇野備後守を人がましく思し召し此の密謀  
を洩明し下さる段添じけなく存じます然らば某一計を授け參  
らせん貴將一先づ君命も任せ中國浮出馬と披露あし途中より  
病氣と號し攝州有馬郡有馬の温泉の第一佳景あり殊も幽谷  
の地あり殊更ら湯の其の効著じるしく是れも引込み療治と唱  
へ天下の舉動を伺ひたまへ某も其のうちも追々傷も平癒も及

本 能 寺 合 戦

べ何とか奇策を回らし又た右大臣家の御心とらげん手段を  
あさん夫れども某が心底を露がひ密事を洩した上の禍を以て  
又起るべしと思ひぬるれ只今我が頭を刎られよ某貴將又属す  
るの始めより命の兼て参らせ置たり惜むべき所又あらずイザ  
打ちたまへト首を差し出したるの古今稀ある實直沈勇思慮深  
き天晴れの賢士でございます光秀是れを聞いて感入り  
「密事を人洩らすも其の人よこそよれ何ぞ我れ是れを疑がふ  
べけんや其許の精神磐石のごとくある我れ能く知るところあ  
り只今の問答の皆酒狂の雑話あり只だ夢物語と聞流し  
たまへ跡の笑ひとあつて茶を喫し菓子を食べをりしが宇野忠  
重のト庭前を打ち守り宇貴將アレを洩覽じろ早百合の花  
扇々として咲きをれり此の百合の花の花首下へ垂れ咲き出で  
るの是れ陰花あり甚はだ不吉の花あり陰謀を企だてるの必ら

本 能 寺 合 戦

す頭を垂れ其の悪事自づから外面より見ゆるものあり早々此  
の花の抜き捨てたまへ畢竟此の戯ふれごと何事も夢く我  
れも夢あり貴將も夢あり嗚呼世の中夢の世の中引よせて結  
べば草の庵まで返せば元の原あれや三界無庵猶如火宅曉つて  
見れば無一物腕の痛みは娑婆の習ひ是れも了れば天地の借り  
もの親の賜物主君の爲も預かりもの大切もせねば用立す  
是れ修羅道の習ひあれバイヤサ暇つかまつらんと其のまゝ立  
ち出るを光秀玄關まで送り出で光然らバ大切又療治ををし  
たまへト辞を殘して一室に入り大息吐いて考がへしが鬼やせ  
ん新くやト心も空足も地も登だつの思ひをかし悄然としてを  
りまする處へ明智孫十郎光景是の前より彼の閑處の床下へ  
忍び主人と宇野の對談を徹頭徹尾聞き終つて心安からず早々  
其の處を這ひ出して是へ参ッたのでござります光秀驚ろいて

本 能 寺 合 戰

光何じや孫十郎 孫ハ別儀も候らはす實の宇野忠重どの  
浮對談を相伺がふところ彼れ密謀又一味せざるハ一大事の儀  
然るを其まゝ歸したまふハ油断の至り以ての外のこと存  
じいらふ某追ひ掛け只だ一討まつかまつらん。光イヤ逸ま  
る赤光景宇野忠重の我れ昔しよりの親友あり然も此の國を攻  
取る時よも彼れが恩を受けたり中々天晴れの賢士あり大事  
を口外すべき人あらず我れ能く其の心底を知るところあり  
殊よハ矢傷又苦しみをを不實も打ち取らん情けあし此  
の儀ばかり思ひ止まるべし。孫十郎頭を振つて 孫ア、イヤ  
イヤ信長を害せんぞ企だてたまふ心よて宇野が恩あを取る  
又足らず千丈の堤も蟻の一穴より崩るゝといふ俚諺あり一旦  
口外してハ早や露顯の基あり宇野の廉直の男よて甚はだ痛は  
しけれど大功の細理を思ひみすぞ承たまはる心弱くして成就

本 能 寺 合 戰

せんや韓信は樵夫を切り佐々木盛綱の藤戸よ於て漁夫を斷つ  
此のまゝよすべきよあらず只だ一打ちト立ち上れば光秀今の  
理よ服して 光然らハ爾が心よ任すべし。止めて止まらぬ孫十  
郎一徹短慮の丹波男鬼をも恐れぬ心の岩石そのまゝ本城より  
一散又駆け出だす腰よの覺えの一刀を打込み家來二人へ 孫  
「爾等へ言ふことあり今我君へ對し宇野備後守案外の無禮ある  
より捨置がたく我君より命のあらざれども是れ忍びがたき臣  
の本分あり追掛け至つて討つあれハ爾等の彼れの供ある二人  
の者を切て捨てよト申し付け辭短かくして其のまゝ田の縁畔  
道の嫌ひなく飛鳥のごとく追ひ掛けたり既よ日没れ果て  
五月雨の簀を通すがごとく降りし今ハ聊さか雨止みければ  
宇野備後守若黨一人草履取一人を召し連れ龜山城を立ち出て  
心静かよ歸る折しも腕の痛み堪へがたく道抄をらす灣り道

本 能 寺 合 戦

が暮れたれば草履取の 草暫時是れもお待ち下し置るやう  
ト言ひさす駈け出して提灯を取り又参るソコテ跡の従者一人  
付き添ふのみよて暫らく小蔭の石又腰打ち掛け向ひの來るを  
相待つのは是れ山本村あり此方の孫十郎手負猪の稻穂を横ぎる  
がどどく横筋かひ又駈け來り宇野と見るより踏足といゆ其の  
備後の前を通る折から宇野忠重の心得ざる者と思ひ異なる姿  
又眼をつけて 宇夫れへ行くの誰そ 孫明智孫十郎あり 宇  
其許何方へ行かゝるや 孫然れば急用よて郷土地頭の面々へ  
相觸べき事これあり此の先まで罷り越すあり 宇然らば某も  
御同道申さん幸はひ家も近ければ某が方へ御入あつて提灯を  
もつて参らるべし英雄の備後守あれども神あらぬ身の露知ら  
ず我が身も見えぬ眞の暗時分宜しと孫十郎宇野が左手へ廻  
るよと見ねしが大喝一聲 孫大將の御下知ありト抜き放し左

本 能 寺 合 戦

の肩先より腕へかけて切て落す備後守した。か者あれは些と  
も騒がすドツカと坐し 宇ヤレ待て言ふことあり扱こそ思ひ  
立ツたる反逆迎も是を止まらず彌々思ひ立つと見ねたり斯る  
大事を洩したるが故と此の計らひを爲したまふか嗚呼光秀短  
慮あり愚かあり我れより外又眞を盡し力とありし者の非ざる  
べし然る某を頼み少きものと思ひ我が心をも知らずして我  
が意見を用ひず途よの家をも亡びあんアナ氣の毒千萬あり爾  
草々我が頭を断ち持ち返つて光秀又安堵させよト少しも悪び  
れたる氣色あし孫十郎光景涙を流し答へる許もあらばこそ今  
更ら無惨あれども詮方あしと心を取り直し飛びかゝつて頭を  
打ち落す此の間よ宇野の郎等孫十郎の家來又討たれました  
サテ明智孫十郎の其のまゝ備後守の首を提げ一散又馳せ戻り  
光秀が前よ差出し 孫斯の如くよ此れあるありト突きつけ

本 能 寺 合 戰

光秀備後守の首を見てハツと落涙し  
片腕とあるものを可憐賢士を殺したりト  
けり忠重の首の夜のうちに城外に埋め  
敷跡の如意庵と申し今よごさいます  
二條妙覺寺へ御旅宿のよし右大臣家の  
能寺へ入らせられるよし告げられ  
奉まつるの此の時ありと腹臣の者  
餘人を三手に分ち一手の老が坂本街  
を引いて立ち出でたり尤も坂本城留守  
慶あり又た一手の唐櫃越より明智左  
手の切り開いたる新街道今も残れる  
明智越より丹波龜山の城

本 能 寺 合 戰

時、一、同、龜、山、を、出、發、し、た、り、夜、中、の、出、陣、と、疑、が、よ、も、の、あ、ら、ん  
を、恐、れ、是、れ、を、防、ぐ、た、め、又、辭、を、ま、う、け、大、暴、の、折、か、ら、あ、れ、バ、白、蓮  
の、武、者、押、の、諸、軍、一、統、の、難、儀、あ、り、依、つ、て、夜、中、の、御、出、馬、と、偽、の、ッ  
たり、然、れ、バ、心、知、ら、ぬ、士、卒、も、の、テ、モ、有、り、難、さ、思、し、召、し、か、あ、下  
喜、こ、び、勇、ん、で、三、里、餘、の、地、を、進、み、し、が、難、兵、も、口、々、合、點、の、行  
か、ぬ、此、の、武、者、押、し、中、國、表、へ、御、出、馬、と、承、た、ま、い、る、又、思、ひ、も、寄、ら  
ぬ、此、の、街、道、コ、レ、京、へ、の、往、來、あ、り、ト、喧、び、す、し、く、馬、し、り、け、れ、バ、左  
馬、之、助、光、俊、大、音、揚、げ、左、一、同、の、者、能、ッ、く、承、た、ま、い、れ、此、の、度、の  
御、下、知、を、知、ら、ざ、る、か、御、當、家、中、國、へ、御、出、馬、の、行、列、を、京、都、と、お、い  
て、右、大、臣、家、御、一、覽、是、れ、あ、る、べ、き、の、御、沙、汰、あ、り、依、つ、て、御、同、勢、を、一  
先、づ、京、都、へ、至、る、あ、り、進、め、や、者、も、く、ト、下、知、及、ぶ、素、よ、り  
夏、の、短、夜、あ、れ、バ、夜、明、け、の、近、し、と、押、し、立、て、く、行、く、は、と、早



本 能 寺 合 戰

や櫓掛片木原、泰野、太子堂を過ぎ、森の森へを立る折から御使番乗り切つて、最早や夜明け程近し何れも兵糧秣の用意六具をつけて武者振の見苦しからぬ容易を致されよ御用意。ト綱れ廻る、扱の御上覽程近し「ト何れも甲冑ヒンくど着け鐵を捲り上げ」上帶確かど締あはし笠標の山みをあはし何れも旗馬印一手く、備ひを立て充分用意のツたり此の時衆て左馬之助の主上の御座所近ければ鉄砲の用ひざる旨號合したるの行届きましたものでござります、儲また明智日向守其の日の軍装の緋かざしの大鎧、金の鍔形青龍の前立ウツたる五枚鍔の兜を聯上よ頂き古金襴の陣羽織金切割の采配を膝頭と突き立て床几よかゝり暫らく眼を閉ぢてゐたりしが四方の備へ整々としたるを待つて兩眼を潤と見開き

本 能 寺 合 戰

斯くの如く一首の歌を詠じました尤とも光秀の三條堀川よ本營を据え八方へ下知を傳へ大津、山科、宇治、伏見、淀、鳥羽、八瀬、小原鞍馬、東寺、四ツ塚、竹田、桂川あたりまで所々二百三百の伏勢を置き水洩らさじとの軍配あり儲また此際先手の大將左馬之助より使番をもつて本陣へ申し入れける「鉄砲鍛錬の者を先手へ御下知下さるべし最とも是れを決して打ツよあらず只だ用意よあすどころよて候らふ」下言ふの「萬一手よ餘り信長を取り逃すまじき用意よして彌よ打がたければ信長だけの銃砲を用ひる心と見えました

第 六 回

明智勢本能寺を圍む  
信長生害火中よ投す

儲も織田右大臣平信長公の本因坊をお相手よ甚を圍みたまひ夫れより御酒宴遊ばされ前回のごとく蚊帳の中よ入りたまひ

本 能 寺 合 戦

ぬ其の夜の短かきこと未だ宵あがら明け易く寅の刻(當今の午  
前四時)の時計を打ち切る頃やうく(夢枕)に就せられたる折し  
もあれ俄か又天地震動して金鼓乱調子に摺りあらし數万の人  
聲次第く(近寄る有りさま)物凄きこと壁へて言はん方もあ  
し信長ヒツリと飛び起きたまひ(夢枕)邊ある左文字の(夢)左  
の(夢)手又取りたまひ蚊帳を掴んで引破り後ろへ投げ捨て(信  
者)ども来れ(ト)呼立てたまへ(夢)近習(夢)小性(我れも)と(飛)び  
起き(刀)引ツ提げ立ち上れば數万の人聲いよ(喧)ひすし其の  
頭本能寺の(大伽藍)として本堂(祖師堂)位牌堂(五重塔)二天門(七面  
堂)方丈の(居室)對面所(大庫裡)小庫裡(大書院)小書院(堂塔棟)を列ね  
軒を並べ(建)續きたる其は(か)三十番神の(社)扱て(鬼)子母神(惣)門  
山門あり庭(ま)の(大い)ある(蓮)池(あ)つて(紅)白の花(今)を(盛)りと(咲)出  
て涼やか(あ)る(風)を生じ(暑)氣を(凌)ぐの(勝)地(あり)成る(が)中(よ)も(森

本 能 寺 合 戦

關九太刀おツ取り出で来るを信長公(信)如何(關)九(ア)武者  
押を聞きつるか(必)定(武)田の(餘)類(ある)か(但)し(三)好(松)永の(殘)黨(あ  
る)か(旗)色(キ)ツト(見)届(け)よ(斥)候(ト)有(り)け(れ)ば(畏)こ(ま)つて(斥  
候)の(役)と(し)て(森)蘭(丸)淺(黄)又(白)く(鶴)の(丸)い(だ)した(る)帷(子)又(崩)黄  
の(半)袴(股)立(高)く(括)り(あ)げ(十)文(字)の(繪)を(小)脇(又)挿(込)み(本)堂(の)正  
面(八)文(字)又(押)し(開)き(椽)側(の)欄(干)又(片)足(踏)張(り)鐘(又)繩(ッ)て(延)び  
あがり(小)手(を)か(ざ)して(見)渡(せ)ば(頭)の(天)正(十)年(六)月(二)日(朝  
霧)障(籠)と(し)て(霞)の(こ)と(く)早(や)東(雲)の(明)け(鳥)東(西)又(鳴)き(遠)ひ(東  
の)紫(の)こ(と)く(白)み(夜)ま(さ)又(明)あ(ん)ど(す)る(折)か(ら)朝(霧)の(暗)れ(間  
より)遙(か)又(見)わた(せ)ば(水)色(よ)桔(梗)の(紋)つ(いた)る(大)旗(一)流(れ)扱  
て(こ)そ(お)も(ひ)當(た)つ(たり)下(其)の(ま)飛(び)下(だ)り(奥)の(方)へ(ハ)ッ  
パ(ッ)と(掛)込(み)來(り)關(恐)れ(あ)が(ら)申(し)上(ま)す(信)如何(關)九  
敵(の)誰(れ)だ(見)届(け)た(る)か(關)恐(れ)あ(が)ら(ら)浮(覺)悟(遊)バ(せ)水(色

本 能 寺 合 戦

よ桔梗の旗、惟任日向守が變心でござる。聞より信長其のまゝ思  
はず後ろへドツカと坐したまひ。信ナニ日向守あるか餘の奴  
輩あら恐るゝと足らん彼れハ軍法と言ひ思慮と言ひ兼ての事  
を意恨も存じ罷り越したと見えたり近習のものども此の上ハ  
片時も早く切り破つて一先づ安土へ逃れよ予ハ逃れんとて逃  
れべきよあらず元より我を目差して來る敵あれハ深きよく相  
果ん三好、松永、武田の殘黨めらあらハ何万人來るとも我が武略  
をもつて一方を切り破り立ち退んこと何の仔細やあらん日向  
が反逆最早や敵ハ此の所を切り抜けんとしても四方又伏兵  
抜け目あるべからず我れ武運も是れまであり。ト仰せある然か  
りといへども傍の者ども是非も立退をト促がし奉まつれ  
ど。信イヤ、〱怒じ落ち延んどして雜兵、葉武者の手よかゝら  
ハ我れ末代の恥辱ありとメテ此の世の思ひ出よ逆賊ばらと討

本 能 寺 合 戦

ち排ひ冥途の案内先達させ予ハ深きよく自害もおよぶ心ある  
ものハ我と侶俱々冥途へ参れ。ト呼ハつたり森蘭丸大音よ。蘭  
「仰せ畏こみひらひぬヤヨ人々日頃の汚恩を報するハ此の時よ  
こそあれイヤ三途の汚先達つかまつらん。ト眞ッ先ハ跳り出す  
「言ふよ及ハぬイヤ我々も」下諸士の面々踰躍めく足を踏み直  
し鎧着る間もあらハこそ何れも帷子の上ハ袴をかけ袴の股立  
取る間も早く鎧を引提げて飛び出でたり眞よ一世の大事と仲  
間奴僕も至るまで日頃の汚恩を報せんト我れ劣らじと得物得  
物を押取つて闘の聲を揚げ待ちかけしハ天晴れ勇々しく見え  
たり然れども不意の事あれハ各自素肌も得物の纏らさ夫れゆ  
え身体至つて自在あれども覺悟の奇手ハ六具も身を堅めたる  
其の大軍も打ち向ひまする是れ信長が斧をもつて立車も敵す  
るよ等しく其の危ふきこと糸をもつて磐石を釣るがごとく女

本 能 寺 合 戰

中ハ酔ヒ臥たり寐乱れ髪の其まゝに化粧も剃て鹿の子垣ら時  
あらぬ雪の肌腫まで現にし裾端折上げ徒歩跳足よて反つ轉び  
つ逃げ出だす扱てまた西裏門より責めかゝるハ明智十郎左衛  
門同治右衛門荒木山城守等の面々大音三光秀公の御下知あり  
小野お通ハ心あるものされば手向ひするとも差し許し人を附  
けて由縁の所へ遣はすべし其他女小供ハ傷つけるナ中ハ我  
もくト女中輩運池へ飛び入つて身を隠さんとするもあり此  
の時表門より四天王但馬守の一子同苗又兵衛生年十九歳無  
の大力あれば夜又の如く駆け來り門外に建ある三界萬靈塔入  
尺ばかり有りける大石をニイヤく難おく引き抜いて兩手  
よグツと差し上げ雷聲を發し門の扉よ打ち付けたり何かハ以  
て堪るべき門折れ忽ち敵塵と碎ければソレ責めかゝれ下大  
浪の岩よ當るが如くトツとばかり乗り込んだり前の浪の

本 能 寺 合 戰

上ハ右大臣信長公瓜又唐花の御紋を織り込めたる白綾の御  
單衣又唐織錦の御袴を穿れ御背後ハ胡麻屏風のごとく矢  
束を解いて押し寛ろげ白木の一寸四分餘長の太弓を左手に突  
き立て敵を白眼んで控えたり御傍ハ  
金森義入齋 今川孫十郎 薄田與五郎 高木孫太郎  
筒井作左衛門 中根市之丞 大塚 又市 伊藤 彦六  
御小性ハ  
森 蘭丸 同 坊丸 飲川 宮松 毛利 龜松  
柏原 銅丸 小川 愛平 高橋 虎松

是等の面々得物を押つ取て拳を握り片唾を呑んで控にたり此  
の時一天未だ鮮やかよ明け離れず殿中驛驢として睨と見え  
然れども殿外ハ早や明け放れて物の何色定かよ見ければ明

本 能 寺 合 戦

智方の軍兵我れ先きよと競ひ進み飛び登らんとする高嶽の上  
より信長公大の眼を潤と見開き 信逆賊明智光秀如處ある  
ぞ天罰のはと思ひ知らすべしと坤軸も割るばかりある大音  
馬しりたまふ其の有様眼の光りぼわたり宛がら寒月の尾上を  
照すがごとく其の御威勢も恐れ人々猶豫を致した折から明智  
の軍兵思はず知らず門外までサツと逃げ退ぞいたり將軍方の  
金森、薄田、大塚、伊藤、落合、小八郎等二三十人表門まで駆け出で、  
怒りの大音、ア君恩を忘却したる人面、黙心の奴輩、天罰のは  
と思ひ知れ我れ、最期の圖らき忠義の切ッ先き是れ見よと  
太刀、鎧、切先きを揃へ切り入り突き入り素肌も玉の汗をあがし  
命かぎり根かぎり太刀の鏢を削り鏢を削り天地と共に滅却せ  
んと相戦かふ此の時やうく夜明けはされ殿中も確と見えた  
れば先手の大將明智左馬之助、光俊、壁を振り大音よ 光、ア面

本 能 寺 合 戦

面敵の小勢の素服武者一人も残らず打ッて取り信長公と見ば  
引組で早く首級をわけ恩賞も預かれやッ。と聲を喝して下知す  
るよと、畏こまつたり下真先きよの明智孫十郎、光景、素鎧を取ッ  
て飛び込め、左馬之助が郎等、船木八之丞、三尺六寸の太刀を差  
しかざし、飛び込め、引續いて我れ先よと切先き揃へて馳せ入  
ッたり跡も續いて村井又兵衛、駆け入るところを引續いて四王天  
又兵衛、重サ十三貫目の大身の鎧をもッて猛虎の荒れたるがど  
とく雷聲を發して打ち入ッたり高嶽の右大臣、信長公天下よ  
聞き知られたる弓術の名譽、大眼を裂るばかりよ見開き 信逆  
賊も従がふ不義の奴輩、一々射落し呉れん。ト例の強弓も尖り矢  
をつがひ差しつめ引きつめ散々射掛けたまへ、何かひもッ  
て堪るべき素より弓の素武將軍も三合を避くるの、伊名人、空矢  
の一ッもあらばこそ先きよ進んだ明智の軍兵、忽ち二十騎は

本 能 寺 合 戦

かりバヤ〜と射落さる是れも恐れて離れ進む者ありし所  
も明智左馬之助大音揚げ 左ヤア言ひ甲斐あき者ども  
か赤元より此方の思ひ設けし覺悟の戦かひヨモ信長とて鬼神  
よのゐるべからず討ち取れや人々掛れ〜。ト鞍笠あさつて  
前輪をたゝき頻りよ下知あし少しも責め口の緩めません是れ  
も依つて我れ先よと乗り込んで信長公を討ち奉まつり恩賞よ  
與からんと進むといへども素より寺内のことよて或ひの水事  
もあり又金の雨溜もあり供養塔もあり思ふまゝ又働らき  
ありがたく小姓方の勇士よの魚住庄七太田三八戸田多助高木  
孫太郎有馬藤左衛門伴太郎左衛門狩野又九郎村田吉吾菅野嘉  
平齋藤徳右衛門川股三彌その外伊小性伊馬廻り仲間よ至るま  
で切先を列ね戦先を揃へ爰を先途と戦かつたり主君御討死  
らお供せんト義を大山の重きよ較べ命の鴻毛の輕きよ比し

本 能 寺 合 戦

群がり來る大軍を少しも入れじと流るゝ汗の滲つせのどく  
血汐の飛んで帷子を浸し龍田の秋も異あらず喚き叫んで戦  
ひしの凄まじかりける現況あり茲よ八代正輔眞行の明智孫十  
郎と鎧を合せ飛び違ひ馳せ遠ひ火花を散らして馳せ戦かよ  
此の八代正助の奥州の住人よて馬術の頗ぶる名人でござ  
います信長公の召しよ應じて此度の御供よ加のりました  
然れば御謀代よの非ざれども義を見て爲さるの勇あしと  
一歩も引かずよ戦かひました  
伴太郎左衛門是れを見て聲を掛け 伊八代氏貴殿の御謀代  
御家臣あらず討ち死するよの及ぶまじ早や疾く落ちられよ  
ト呼のつたり八代正助耳よも入れず上段よ身を浮め下段よ飛  
び去り右を突き左りを受け一聲よイと跳り込んで孫十郎の給  
の穂先よ三尺ばかり切折たり孫十飛ヨッ残念ありト給投げ捨

本 能 寺 合 戰

て「イヤヤ組ん」下飛びかゝる八代正助心得たりと太刀投げ捨て  
ムツと組みエイヤと揉み合つたり折りしも伴太郎左衛門  
の前を通り呼りつゝ八代の敵を引き受け彼れを落さんと近  
寄るを明智方の菊地甚九郎の「入らざる義理立奇怪あり」と伴  
打つてかゝる太郎左衛門「エー邪魔しろぐさ」下言ひさま翻りど  
身をかゝりし明智孫十郎へ切つてかゝる菊地甚九郎大いゝ怒り  
「薙己れ執念い奴」ト猿轡を延べて伴の襟首ムツと掴み「イヤ  
ツと捻ぢ倒し其まゝ押へて短刀引ぬき拳も通れど一さし差す  
此の時明智孫十郎の斯る敵又時間費やすの無益あり目差す右  
大臣家を他人の功又奪はれての詮なし」ト惣身より力を籠め「イヤ  
ヤツと向ふへ投げ出だし其のまゝ奥殿さして乗ッ込んだり八  
代正助相手の逃げ去つたるを幸ひと落たる一刀拾ひ揚げ  
正同僚の警敵覺悟せよ」ト明智甚九郎へ切つてかゝる甚九郎心得

本 能 寺 合 戰

得たり「下正助」渡り合ふ双方の太刀先互ひも敵の肩口へ割  
り付け血煙り侶ども相撃とあつて死んでんけり是れを討ち死  
の始めとして差し違ひ突きちがひ或ひに討ち又討れ敵も味  
方も入り亂れ獅子奮迅虎亂入生死を一撃と争つて實と烈  
しき戦かひでございます此の時信長公の御小性森蘭丸其の他  
の人々前髪を振り亂し一世の勇も是れぎり一寸も退す相戦  
かふ頭の水無月二日の早天暑氣甚はだしく惣身より炎を出だ  
し宛がら燃るがごとし敵の新手を入れ替へ「込みいるよぞ  
今の中」精根疲れ果て思ひ「討ち死す然れども未だ猛  
勇鬼神の精神盛んあるの森蘭丸長康同力丸兄弟あり此の時明  
智方より金小寶紺糸おせしの大鏡烏帽子形の兜を頂だき二間  
柄打つたる大身の鎧を小脇に挿み突ッ立ちあがり我れこ  
そ惟任日向守が家臣もおいて人も知つたる三羽鳥の一人笑浦

本 能 寺 合 戦

新左衛門忠近、將軍家へ見参、ト給おツ捨ッて飛び来る右大臣大いゝ怒らせたまひ、右下郎推参あり、ト弦おと高く打ッて放せば、箕浦が股の附根を、筒深ムズと射たり、新左衛門思はず跡へ、陰、踏みいて尻坐ムドッ、と倒れるどころへ、今一人の武者、黒糸の鎧、頭形の兜、大身の鎧をもッて是れ亦た、三羽鳥の一人、古川九兵衛、見参、ト飛鳥のごとく、又飛び来る、信何を小癪ト又も切ッて放せば、右の肩より脊筋へかけて、横筋違ムツサと射通す此の傷、手も堪らず、古川九兵衛、仰向さまムドッ、と倒れたり、然る又た、一、其の此方より、金小寶、黒糸の大鎧、同じ毛五枚し、ころの兜、一際、目立つ大身の鎧を、携さへ、安田作兵衛、藤原國次、見参、つかまつるト立ち上る、信奇、怪あり、ト射放す、矢、作兵衛が左りの腕へ飛び來ッて、メン、ト立つ大勇無雙の是れ、赤坂、の一人、安田作兵衛、赤坂、其の矢も、抜かず、右の腕、よて、鎧を、キリ

本 能 寺 合 戦

りと、掴み、あはし、飛び、かゝらんとする、信コッ、無法者、大膽、あり、ト、手早く、二矢を、打ち、つが、ひキリ、ト、満月の、ごとく、引、放され、んとした、まふ、時ア、天命、茲に、宛まり、たまふ、か弓の、弦、を、かへして、射つ、と、切れた、り、信コッ、南無三、といふ、ところへ、紅、赤、ひの、帷子、と、錦の、帯、を、高く、から、び、丈、と、除れる、黒、髪、を、後、へ、サッ、と、打ち、越え、白、綾の、鉢、巻、後、ろ、さ、ま、と、結び、下、げ、阿、彦、前、是、れ、を、ト、十、文字、の、手、鎧、箱、を、拂、いて、イ、サ、君、へ、ト、差、し、上、げ、た、る、は、是、れ、何、者、ぞ、や、阿、濃、の、局、是、れ、あ、り、其、の、ま、と、自、身、の、長、刀、お、ッ、取、り、高、欄、の、上、より、大、地、へ、飛、び、下、り、明、智、勢、の、眞、只、中、へ、會、釋、も、あ、く、衆、び、入、ッ、て、長、刀、打、ち、振、り、し、有、様、の、吉、野、の、花、を、散、す、が、ご、と、く、明、智、方、の、松、田、郷、右、衛、門、と、傷、を、負、せ、續、いて、明、智、方、の、由、良、勘、四、郎、酒、喉、の、笛、を、刎、ね、切、ら、れ、た、り、稻、葉、主、水、の、兩、足、を、切、ら、れ、飛、鳥、電、光、石、火、の、鏝、ら、さ、死、骸、を、飛、び、越、え、跳、り、越、え、縦、横、無、盡、と、荒、れ、廻、る、所、へ、明



本 能 寺 合 戦

智方より多賀新左衛門と名乗ッて現れ出るを唐竹割り眉間  
より腰まで割り付けたり寄手の面々油断をすナト呼ハツたり此の際  
容易からざる勘らさきあり面々油断をすナト呼ハツたり此の際  
久下新左衛門顯れ出で久小窓ある女ト言ひさま阿濃の  
長刀打ち落とし襟首掴んで捻ぢ倒すを●阿然のさせじ。ト起き上  
り互ひよ組み合ひ其のうち短刀引ぬき阿濃の局三右衛門へ  
「突いてかゝるを三猪口才あすナ此の女郎ト同じく短剣取り  
おはし差し違ッてぞ相果たり扱てまた安田作兵衛の本堂の階  
段より駆け登らんとする際しも最前より蘭丸のお襟側よて七  
八人前後左右へ突き倒し唐輪の刻て散し髪血染よあツて死  
物狂ひ取り巻く奴輩八方へ突き拂ひ馳せ貫けてキツと見れば  
今右大臣家を目掛けて安田の來るを見コソ主君の傍一大事と  
章駄天のこどく十文字の鎧を上段よ振り冠り拜み突きよ突か

本 能 寺 合 戦

んとするを安田作兵衛の然の爲せずト挑み戦かふ所へ過まッ  
て作兵衛階段の高欄脇より足踏み外し身を倒しまして本堂  
回廊の雨落へ落ちたり蘭丸鎧を再たひ拜み突きよ観念せよト  
突き下す狙ひ違ハす作兵衛が股の間をしたらいか突いたり蘭  
丸尙ほも二の鎧を突かんと上へ手操る折から大膽不敵の安田  
作兵衛左手を延して其の蘭丸が鎧の撞首をムツと掴む彼方の  
是れを取られてのどウンと上へ引く力此方ハ夫れを幸はひと  
足よ力を入れエイト一剣ね体を浮かして身を躍らせ左手よ鎧  
首掴んだまゝ右手よエイト高くへ飛び突いたり蘭丸いよ急り  
後ろへ下りあがらエイト引くを作兵衛得たりと身を翻がへし  
て椽へ飛び上り呼吸を計ッて蘭丸の鎧を放せば却ッて蘭丸の  
己れが總身籠めて引たる力のため尻居よドウと倒れたアツ  
と拍子扱けたる其の機よ付け入り作兵衛其の鎧取ッて蘭丸の

本 能 寺 合 戦

胸の邊りを石突みてした。かゝる突き弱るところを腰ある太刀  
押取り蘭丸の眞ッ甲より血煙り立ッて切ッて落す憐れむべ  
し。森蘭丸二十二歳を一期として此の世の暇と云つたり此の時  
作兵衛の己れが鎧の捨てたれ。蘭丸の鎧を取り直し信長の御  
後乃蔭を伺がへ。最早本能寺への火が掛り炎は盛ん又相成た  
れ。奥殿さして駈け入りたまふ是れ名將のこどおれ。雜人輩  
の手よかゝらんより御自身又死さんと遊ばす御覺悟と相見  
えたり其の時作兵衛障子の蔭を見てあれ。正しく信長公の御  
姿シテ遣ッたりと鎧取り直し障子越え突いたれ。確か又手筈  
へあつたれども其の鎧の柄を切り折ッて炎はの中へ入らんと  
あしたまふ作兵衛追ひ掛け來ッて御袖をムツと掴め。白綾の  
御袖の安田の手よ残り信長公の尊体の炎はの中よぞ落ちたり  
けり

本 能 寺 合 戦

第 七 回

明智三羽鳥の小便  
三勇酒樓と再會す

爰も明智三羽鳥と申します。その何ゆゑかと言へば一説は  
四半の絹へ鳥を墨畫して此の三人が其の差物を付けました  
即ち夜に箕浦、古川、安田の三名あり此の鳥に申すまでもござい  
せんが夜の明るを知らせせよ。暗きより明るさへ運びをつけ  
まして告げわたる鳥でございます。故又右の三人の他人より先  
がけて働らきをするといふ心をもッて右様あるものを指物よ  
せしといふ説もございます。又或る人の言ふより金たく右様  
の指物をつけて出たのでない。世の中は事馴れざるを業人と  
いふ。又た何業もよらず事馴れたるを苦勞人と言ひます。夫れゆ  
ゑも俗語も未だなく。白ッばいと或ひは黒い人だ。黒ッばい  
人だ。と申します。此の三人の戦場にて他人より先だッて高

本 能 寺 合 戦

名手柄が有りますから戦場の苦勞人だといふので是れを三  
羽鳥と申したといふ説もあります斯くばかりある高名手柄を  
致した人々が同年六月十三日天下分け目の山崎の戦かひも出  
ませぬといふの何ゆゑであるやといふと前よりしおびた通  
り三人とも皆重傷を負つてをります夫れゆゑもこを攝州  
有馬の温泉へ浴して傷養生をいたしてをりまして空しく戦場  
の模様を聞いて腕を摩り噛みしりを致してをるうち如何  
せん山崎の戦かひ破れまして筒井陽輝坊順慶裏切を致し是れ  
もつて天命止むことを得ず或る人の言ふよ明智の首の栗田  
口へ鼻首せられたといふ事も聞きまます又の落ち延びて行方  
が知れぬといふ説もありまます是れよつて如何に斯やうか  
しき山中あれども秀吉專ら明智を吟味嚴きと承たまひり  
三人の中より未だ此の地を立ち去り難いものも有ります

本 能 寺 合 戦

せころあくして散りくゞ分れました其の後古川九兵衛の  
浮田中納言秀家卿へ召し出され二千石を賜ひり是れ亦た松  
別の家柄と言ひ既往の符めず夫れも依つて先づ安全の身の  
上よりありましたが或る一日小春日和何となく京の街を徘徊  
たすれば人の群も花が咲き標元より洩るゝ香りの蘭癖の室  
入るが如くある美女と摺れ違ひ笠を冠れる女もわれ被衣を  
着たる宮仕女もあり又た梢の霞かみも欺されて返り咲する  
花も一二輪見えまして何となく面白き有様僕一人を供ぶ連れ  
て深き笠を頂だき散歩いたします跡より甲斐の其許  
の古川でいかに乙是のしたりと振り返つて見れば笑新  
左衛門あり古珍らしき所で對面いたしたりマア料理屋  
での話しも出来んから其處らへ登つて一盞汲まん料理屋  
の二階へ登り酒肴を登のへ登何うして古川お前なるさし

本 能 寺 合 戰

やる 古ヤ拙者今浮田家へ召し抱へよあつてをる 筈夫れ  
 の宜しい……我等の淺野正かたへ召し抱へられ只だヒク  
 三度の食も事を飲かんばかり思ひ出だせば古しへの事ありし  
 が……嗚呼ア朋友と言つたら其許と己ばかり夫れ又就いても  
 伊主君の伊在世の時又月を愛で花を樂しんだが思へば昔しと  
 ありけるよト聊さか酒も陰も落ち舊友の懐かしきものありと  
 て互ひ胸襟を開いて物語りをしてゐるト階下へ一人の浪人  
 間て製造へたる上總笠を冠り衣類の刺々の襦袢も蓑草履の  
 長刀もありしを穿き大兵ある一人の丈夫男刀の落して帯しま  
 したが大地へ届くかと思われ胸の邊も最と古びたる扇をあて  
 「よしや身の斯くての果と只だ頼め我れ世の中よあらんは  
 と又たこそ参り候らぬ暇申して出るあり  
 「名残り惜しの伊事や始めの包む我が宿の然も見苦しくい

本 能 寺 合 戰

らへを暫し泊りたまへや  
 「泊る名残のまゝあらば情何國よかゆきの日の  
 「空さへ寒き此の暮れよ  
 「何處も宿をかり衣  
 「今日ばかり泊りたまへや  
 「名残りの宿よとまれども暇申して  
 「伊出でか  
 「然らばよ常世  
 「また伊入り  
 身も應じたる浪人の鉢の木論義を誦ひ参るを兩人耳を聳だ  
 て、聞けり其の音聲凛々として腹内より出で口先きの小話と  
 違ひ眞も臆随へ染みわたり節の上げ下げ何となく最妙寺時頼  
 を佐野源左衛門が止むる夫婦の情誠を見せたる鉢の木の誦ひ

本 能 寺 合 戦

兩人耳を齧して開いてゐましたが新左衛門 簀ア、宜いのう  
誦ひといふものヲ 直然ればよ宜いもんだ何流であらふか  
簀 確か又金春流だらふ 直如何も御鑑定の通り金春は違ひ  
かい何うも武士の聞くべきものだ……是れく 浪人其の跡を  
最そつと誦てくれよト白紙へ鳥目を包み二階の椽側の手漕よ  
免れ地上へパツと投げ付ければ彼の浪人顧りみもせず 浪ヤ  
ア無禮あり人よ物を與へるゝ投げるといふ法やあらんナセ手  
波しよの爲さるぞ酒狂人に見たり夫れども無學か禮記よ  
曰く狗よ物を投げ與ふる勿れと孔子も畜生よさへ戒しめたる  
よ非ずや況て万物の靈たる人間よ對し何で然やうか不法を働  
らくかト大音又恥しめました  
斯やう申し上げますト此方の袖乞ひ先方の惠んで呉れ  
る人だから投げやうと抛らふと構ひもしさい等のもので

本 能 寺 合 戦

ありますすが然らば近頃ろ舊幕の時代よ下谷山崎町よ  
乞胸長屋といふが在ります總て穢多の支那の彈左衛門非  
人の頭ハ車善七、國人坊主の惣括ハ瀧の坊笑願ソユデ乞胸  
ハ山本仁太夫と申しまして總て浪人の取締をいたします  
是れよ附屬の者ハ年分よ鳥目二百文づゝを二度よ納め年  
よ四百文(方今の四錢でござります)夫れで鑑札を得ます  
よハ金貳朱を出して是れを得ます彼の山崎町よ住む山本  
仁太夫を配下の者ハ是れを指して殿様と唱ひ勿論車、彈、あ  
るハハ郎人此の人々の事を其の配下ハ何れも殿様と唱ひ  
飯令へハ方今の淺草龜岡町古しへの新町、是れを通行の時  
よハ各々皆お土下坐でござります是れハ關係おさき者でも  
通行よよつて便利を計り此の一郎内を通り抜けんとする  
者、其の殿様よ出會へハ天下の平民といへども矢張り土下

本 能 寺 合 戦

坐をかさいれば成らぬものでございませぬ故ゆゑも乞ふ  
の名もありません其の故如何とされば投て呉れたる銭の地  
も落たるに必らず是れを拾ふことを禁じます萬一是れを  
拾ひ取れば其の腕を折つて放逐いたす政府の手を經ずし  
て死刑も執行さへば或ひは墨を入れたり又追放さき其の起  
則あつて處置さへびます斯くまでと錢を貰ふものも古  
へん權のありましたものでございませぬ増て況んや未だ戦  
場血腫さき世の中何も浪人を惣括する人もなく當今いふ  
自主自由の權と同じことでもありませぬ夫れよさへも法律あ  
つて濫りも我意を振ふことも出来ず仕儀よれば保安條  
例政府の御威光も勝るものでございませぬ是れ一國の  
掟法律の大切なる浪人が錢を惠む笑浦古川へ對して斯くばかり  
然れば是れなる浪人が錢を惠む笑浦古川へ對して斯くばかり

本 能 寺 合 戦

又馬しりました二人斯ることの夢我夢中なれば 何れだど欲  
くさくんば其錢を戻せ 浪人を小癩か腫眼 武士欲く下  
りて勝手取れ 兩ヤア奇怪あり此の素浪人ト争さふうちよ  
下ある武士笠を聊さか撥げながら上を見て莞爾と笑らひ其  
まハツカ どの件の料理店へ道入り階子を荒々しく踏みさら  
し上へ登り來つてムンと坐す兩人怒つて 兩無禮といふも  
限りあり冠れる笠をも脱がすして是れへ着坐し無禮あり素浪  
人の身として同席無禮下れ下ぢやア家内の者が 男何か始ま  
りましたせ大變 浪人が悪い敵ふもんぢやアございません  
お客様と喧嘩をする何とか言ひませうか。帳場格子の中より亭  
主が是れを制して 亭ヤア 障らぬ神よ祟りおし打捨てお  
くが宜からふ 男其様おこと仰しやッたッて器皿や何かを  
破毀されちやア理りません亭主莞爾 笑ひながら 亭ナア

本 能 寺 合 戦

又宜いよ破毀せバ破毀したやうな會計のあかへ書込で出すか  
ら心配するナ破毀せバ破毀せ勝手よし此方の二階の彼の浪  
人冠れる笠を取つて登へ伏せ 浪笑浦、古川久しふりで會つた  
あア。兩人驚ろいて彼れを見れば是れぞ安田作兵衛國次あり  
笑、ヤア是れは安田か道理こそ理屈ッばい奴と思つた且つ又た  
是れへ登るの尤もだ我れ 三人の鼎の足のごとく懸意を  
結ぶことおれバ古、ヤア 安田此方へトあつて安田を上席へ  
坐へた 安、然らバト作兵衛遠慮もかく上坐へ直つて大あぐら  
をかいたヤア是れから飲むの 食ふの 飲むと食ふと交  
代だ右の箸を持つてたりよ盃を取り肴を生噛みよして酒で  
腹中へ流し込む實よや雪よ追つた狼の食を求るがごとくあり  
安、ヤア時よ其許等の如何した 古、ヤア斯くいふ古川の浮田家へ  
抱へられ又た笑浦の淺野家へ抱へられた 安、フム、夫れで何

本 能 寺 合 戦

の位、お願を頂戴するナ 笑、兩人とも二千石づゝだ。是れを聞  
いて作兵衛大いよ嘆息して 安、アア情けねへ了簡だ……二  
千石どの何とぞだ兼て我れ 有馬よて約束した辭の何と知  
つてをる一萬石が米一粒缺けても奉公のすまいものをと約定  
も戸外よの非常な人聲ツアツツと騒いでをる何事やらんとは  
を見れば一人酒よ酔だれたる荒くれ男で太刀を抜て往來の人民  
を脅迫し既よ人をも切らんすらん容子ッレ狼藉ものよト云ふ  
まよ、笑、浦、新、左衛門階子を降りて殿の足を踏しめ 戸外へ  
出んとする折しも此方の古川九兵衛 古、ヤア而倒あり。どて  
二階の庇より身を躍して大地へ飛び降り亂暴人の襟首つかん  
で捻倒し刀を奪取り鞆固よて二ツ三ツ打しこみ 古、笑、浦、出よ  
及んぞ彼岸過ある道入そこあふ穴の蛙、鳥、蛙つき廻る此武士取

本 能 寺 合 戦

て押へて斯くの如し。箕浦新左衛門大い焦て 箕、残念あり。ト  
其のまゝ、彼れを掻い掴み、來年こい下投り出し、兩人とも二階へ  
あがる安田作兵衛、爾く笑ひながら酒を飽まで飲み、安、爾  
人、ア其許たちの心得、何といふ心得、主人より貳千石の食  
祿を賜はり、其の主君の爲、捨る一命、何の命、先方が弱  
から宜いもの、相手が強く、何とする馬鹿さの茶釜、白痴の  
輪、蓋、おし男の湯、冷し野郎、大籠、棒の頓、痴氣、肝、抜、け、間、抜、け、を、兼、ね  
たる、大、白、痴、己、を見、ろ、爾、等、が、働、ら、い、て、ゐ、る、其、の、中、に、充、分、な、着、を  
食、し、飽、ま、で、酒、を、飲、み、恣、ひ、ま、し、な、し、た、以、來、も、あ、る、こ、つ、て、彼  
様、お、逆、ッ、葉、お、こ、と、の、止、せ、言、は、れ、て、兩、人、亦、面、面、し、て、爾、如、何、も、  
貴、君、の、浮、論、尤、も、あ、り、只、だ、我、れ、く、の、往、來、の、人、民、を、勵、む、る、心、  
から致したものだ……併し作兵衛、然う聞け、最、も、千、万、  
マ、ガ、ま、ア、く、那、様、お、事、を、し、さ、い、で……其、の、爲、り、も、當、所、も、後、

本 能 寺 合 戦

所もあれ、役場もあらふ見廻りの者もあるべき、捨て、置い  
たが宜い、わいなア、節を付けたる小唄、交りの仇言を、すすや否や  
下より番頭、番、只今の是れがお釣、錢、でございませす、安、ヨシ、く  
夫れへ置いて行け、兩人、の、兩、安、田、お、前、が、勘、定、の、附、け、て、呉、れ、た  
か、安、ヤ、己、れ、が、モ、ウ、拂、ッ、て、仕、舞、ッ、た、爾、夫、れ、の、氣、の、毒、千、万、ナ  
浪、人、の、其、許、も、然、や、う、お、事、を、さ、せ、て、の、面、目、次、第、も、あ、い、穴、か、し、こ  
他、人、も、語、り、た、ま、ふ、ナ、此、の、恩、の、報、ふ、で、あ、ら、ふ、作、兵、衛、笑、ッ、て  
作、ナ、ア、も、然、う、禮、を、言、ふ、よ、い、及、べ、ね、へ、其、許、等、の、紙、巻、か、ら、金、の  
出、し、て、掛、ッ、た、の、だ、言、は、れ、て、古、川、九、兵、衛、置、い、た、る、紙、巻、を、改、め、  
古、是、れ、の、紙、一、文、お、し、ま、致、し、ま、つ、た、箕、浦、新、左、衛、門、莞、爾、と  
笑、ッ、て、箕、其、の、手、の、喰、い、か、ら、拙、者、の、床、の、間、の、置、物、の、布、袋  
の、後、ろ、へ、ナ、ヨ、イ、と、置、い、た……オ、ヤ、拙、者、の、も、無、い、ワ、作、兵、衛、ア、ッ  
ハ、ハ、ハ、一、人、を、取、ッ、て、一、人、を、取、ら、ざ、れ、バ、定、め、て、怨、む、で、あ、ら、ふ





本 能 寺 合 戦

言はぬの言ふも増花の此の身の上の聞く及ばん。馬上に聲あ  
つて立イヤ。是非とも姓名問はん。今の包む道もさく草  
原も兩手を突き。作某こそ本能寺合戦も右大臣家も槍をつけ  
たる明智の流人安田作兵衛國次あり。大將鞍轡を叩いて嗚呼願  
母しき勇士の果此のまゝ愛へ置きさ。國の寶を土中も埋むる  
がごとし。可たび仕官の望みやあらん。予も仕へて大馬の勢を厭  
はんか。安取り後れたる弓矢の道併し君のお許有り難く存じ  
まする流れ。て筑紫の果て柳川の築か。りて落鮎の引上  
られたる此の身の幸は。御當家から。御名家と言ひ。君の天下  
の良將あり。仰せよ。従がひ奉まつらん。未だ。後れたりとも戰  
場。別あるものでござる。此の時宗茂。宗然ら。祿も望みがある  
か。作勿論のこと。でござる。……一万石が米一粒。缺けても奉公  
の仕まつらん。立然ら。追て沙汰いたす。我が領地のことか

本 能 寺 谷 戦

れば緩々夫れも逗留あれ。其のまゝ柳川城へ歸させられまし  
た跡の歩殿。於て會議も相成り。ました。御當家も万石取りと  
いふ者。一人もありません。小野和泉が五千石。十時傳右衛門が  
五千石。然るを新参のお抱へ。一萬石といふこと。出来さ。い殘  
念ながら。思ひ止まらん。下仰し。や。た。是れを承たま。つたる傳  
右衛門。士イヤ。追て沙汰つかまつる。であら。ふ。御前の御  
意と承たま。は。り。ます。是れ。御供の者より。聞き。ました。若し。此の  
まゝ。お断わり。よ。され。バ。万石。と。聞いて。御前。か。透。巡。を。あ。した。ま。ふ  
ト。あら。バ。未。代。ま。で。の。御。恥。辱。迷。や。か。よ。お。抱。へ。も。相。成。ま。せ。其。の。上  
事件。あら。バ。私。計。ら。ふ。旨。あり。誰。人。か。ある。其。の。小。家。へ。参。つ。て。當。家  
も。例。さい。事。され。せ。も。万。石。も。抱。へ。て。遣。ら。ふ。が。夫。れ。も。何。か。夫。れ  
は。せ。の。功。が。ある。か。其。の。儀。を。聞。きたい。ト。斯。く。尋。ね。て。参。られ。よ  
人。心得。ました。ト。一。人。罷。り。越。した。る。が。頓。て。馳。せ。歸。つ。て。申。す。よ。の

本 能 寺 合 戰

人何處も戦かひがあつても一番鎧。一番首。一番乗りを決して  
餘人よの讀りません必らず吾儕が相勤めす是れ一万石で  
麻いものだと申しました。傳右衛門是れを聞いて大い喜び  
傳御前御抱へ遊ませ一万石の子供も花を持せるがどし何  
處ぞも戦かひあらば拙者一番の給を入れ彼れも泡を吹かして  
是れを箇條として高を減じて二千石あり三千石ありとしてお  
抱へがありませすれ尤も廉いものでございませ 公ヤ夫れ  
さればとて遂又一万石もお抱へませした時こそ來れり文  
録元年豊臣秀吉公朝鮮を責んどの思し召したちより日本の兵  
二十五万人渡海を致し王城を乗つ取り既又國王の義州へお渡  
ちよ相成る然れども平壤よおいて文録二年正月三日四日五日  
の戦かひよ小西攝津守幸長を大將として其の組の宗、松浦、大村、  
有馬、五島の諸將等、朝鮮大明兩方の兵よ包まれ遂よ平壤を落さ

本 能 寺 合 戰

れ牡丹臺を焼かれ命からく王城へ逃げ歸りました此の時明  
の大軍四十五万追々本國より鴨綠江を渡り其の勢はひ破竹の  
とどく開城府を越え漸次進撃よ及びます時よ日本勢爰よ  
追り王城より隔てたる碧蹄館よ敵既よ臨むと承たまはり小早  
川、立花、毛利、浮田、井びよ三奉行増田、石田、大谷、馬上で軍議よおよ  
ぶ此の時小早川右衛門督隆景 小事甚だ迫れり眉毛を焼くの  
危急たり聊さか猶豫をすべきよ非ずとて其の身の平面向つ  
て押し出だす此の時立花の開城府の松の茂みよ潜伏し暫らく  
摸様を伺がつてをるうち早や先手よ戦かひ始まり追つ追はれ  
つ戦かよ折しも思ひも寄らぬ大提督李如松の旗本目差して押  
しかゝる一隊の軍勢あり  
サテ此の邊の朝鮮軍記よ抵觸あれバ大略よ申し上げます  
其の軍勢を誰れかど見てわれバ襦黒よ抱若荷の旗脚よ水晶

本 能 寺 合 戦

のイヲ高球敷をかけたる馬印を押し立たるは是れを立花兵と知られたり其の勢は洪水の堤を破るがごとくドツと喚いて押し掛かる此の時日とる大言も背かず今日こそ我れ一番鎗して敵味方の目を覺しくれんと安田作兵衛今の早や名を改ためて天野源右衛門とあり是れも立花家よての秀吉公へ憚かりての事あるべし然ると思ひ掛けあき暇より同家の臣十時傳右衛門鎗を取って當手の一番鎗と名乗り奮しくらぬ敵中へ進む天野源右衛門は是れと其の間ひ凡そ十間ばかりも相後れたり國次大いよ身を焦焼ち天コッ残念ありト馬上より投げたる鎗は勇士の一念過またず明人の胸板に當り馬上よりドウと落ちてぞ死んでけり是れを後世碧蹄鎗投げ突きの一番鎗と申します然りといへども鎗を取って投げてしまへば二度目も其の鎗を使用することが出来ません是れ只だ一番鎗を十時の爲め越さ

本 能 寺 合 戦

れたるがゆゑ残念のまゝの仕事まで矢張其の功の十時傳右衛門あり是れも依って三千石を下し置かれる天野源右衛門面白からざることも思ひ遂に食祿を返上いたし立花家を浪人して京都の東山の邊りへ閑居して琴を弾じて是れを樂しみ隠居の身とあり世の中を見切つて清風殘月を友と致し天命を待つて相果んどの所存如何も惜しき武士でございます然れば諸所より度々召されるといへども是れを固辞して肯んぜず然るもト襟の脇に李のやうある腫物が腫れ出し甚はだ痛み堪へがたく其のうちも皆腫したと見え又た痒さごと一通りあらず一二度醫師も治療を受くれども又たく癒えての出来出来て癒え一ヶ年四五度五六度ぐらゐづゝ出来ました仕舞の柱へ琴糸を結び己れと腫物もからんで是れを引切り手づから焼酎をもつて是れを洗ひ種々も治療を加へれども度々のことされ

本 能 寺 合 戦

百四十六  
バ遂にわせつて六月二日腹切つて相果ました愛ふ一ツ不思議  
といふの安田作兵衛の家督よさへおれ死ぬの六月二日  
限るといふ物の不思議でございす扱て其の後長男黒田甲斐  
守長政へ召し出され五百石を頂だき筑前福岡にて大組の中一  
人あり代々安田作兵衛と名乗り次男の立花家へ召し出され三  
男は徳川家の四天王榊原家へ召し出され依つて安田の家二家  
に別れ斯くのごとくでございす  
又た本能寺の織田家の武士放火いたし打ち死致する人々  
は

- |       |        |       |       |
|-------|--------|-------|-------|
| 金森義入齋 | 岩佐甚助   | 森 蘭 丸 | 小川 愛平 |
| 飯川宮松  | 柏原鍋松   | 毛利龜松  | 小倉松壽丸 |
| 高橋虎松  | 薄田與五郎  | 伊藤彦作  | 高木孫三郎 |
| 大塚又市  | 筒井作左衛門 | 中根市之進 | 中尾源太郎 |

本 能 寺 合 戦

- |       |         |       |       |
|-------|---------|-------|-------|
| 伊藤甚兵衛 | 落合小八郎   | 青木勘太郎 | 平尾平助  |
| 魚住庄助  | 今川孫次郎   | 狩野又九郎 | 小田彌太郎 |
| 種田龜之丞 | 祖谷孫九    | 大塚彌三郎 | 同朋針阿彌 |
| 矢代正助  | 伴 太郎左衛門 | 同 正 林 | 村田吉五郎 |
| 針川彌市  |         |       |       |

女房がたの阿濃の局を始めとして男女總計八十餘人倒れたり  
尤ども或ひの自害またの炎はと共焼失せ名のみを殘したり  
時又光秀の本能寺の方を降さもせず見てをりしと忽ち其の  
方角をわたりて黒烟天を覆ひ其の音幽か又聞ゆれば早速左馬  
之助光俊を招き 光我等は是れより二條妙覺寺を責むべし其  
方の信長公のお首級を尋ねよ是れ又依つて左馬之助士卒と命  
を傳へて所々方々を詮議すれども更相見えず斯りけるどこ  
ろへ安田作兵衛信長公の御片袖を持参いたし 安右大臣家を

本 能 寺 谷 戰

討ち取り奉まつらんとする折しも彼の蘭丸は隔てられ思はず  
不覺の手を負ひ候らふ併しあがら當の敵蘭丸の討ち取り剩す  
さへ信長公を其の鎗をもつて障子としより突きしが確かよ手  
答へあり下郎へ何をあすどの御聲の確かよ信長公と覺に障  
子破り御尊体を抑へんといたしたとこる其のまゝ御袖をち  
ぎりたまひ本堂より續いたる常行堂へ火のかゝり此の中へ飛  
び入りたまひて御首級を得ることかあひ難く然りといへども  
御首級の代り此の御片袖こそ我等討ち取りましたる證據で  
ざる尤も軍目附もございへらへ此者もも問合せ願ひ奉まつ  
る。光秀大い悦こび光今又始めぬ事あがら作兵衛の働らさ  
辭絶へたり我れ日頃の鬱憤を散じ此の上もあき大悦あり併し  
一旦御恩を受けたる右大臣家殊更ら官位の朝廷より賜るも  
のあれは二位の右大臣こそ恐れ多し方今天下の二十八天は別

本 能 寺 合 戰

れ各々天下を望むの兆候ある中尾張半國より興りたまひ僅  
か御領分二十七ヶ國其の勇猛の韓土の項羽も比し其の謀略  
の深きこと我が國の源延尉義経も勇鬚たり斯る名将も此の片  
袖とありたまひ紀念こそ今の仇おれ是れおくお忘るゝ暇もあ  
るべきよと古人の辭慕ふも絶えたり南無阿彌陀佛。彌陀佛と其  
の袖取ッて押し頂だき懸篤よ是れを取り扱かひ其の後ろ土中  
よ埋めたど押しします是れを誤まつて明智光秀が御首級の代用  
たる御片袖を足よかけたあどゝ寫本よ書きしの大いある誤ま  
りでございますす良しや心よの大い怒りをれるとも然やうあ  
事での多きの臣下が是れよ服しません實よ家來の大切あもの  
でございます昔し吳魏蜀三國の戦かひの時よ新帝丈山の趙雲  
玄徳の公達阿都君を抱き敵を破ッて玄徳へ此の聖兒を渡した  
時玄徳其の兒を取ッて宙よ引提げ玄汝の不孝者あり己れ一

本 能 寺 合 戦

人の爲に我が天晴れある五個將軍の一人趙雲氏を殺さんとせしん思へば不孝ありとて其の兒を絹に包んだるまゝ地を投げたりと是れに玄徳の働らきあり是れが爲め臣下一同此の君へ盡さんことを惹起したるは是れ玄徳の即智あり。

第九回

信忠生害二條城落る  
信忠公達日野に逃る

サテ右大臣家の取あくる一朝の露と消えたまひましたるが此の折しも本能寺の方又當つて火の手炎々燃えあがり空の一逼の練絹を布いたるとく扱の一大事と妙覺寺に在したる羽林信忠卿此の由を聞き召して信長公と一手あつて戦かひを爲したまひんと打ち出し下京へと急ぎたまふところ又所司代村井長門守入道春長軒父子三人馳せ向ひ村に恐れあがり申し上す本能寺の早や信殿も焼け落ち既落居と見定め申し

本 能 寺 合 戦

らふあり斯くては是れより二條の新御所へ楯籠らせたまふかた宜しくいらん。ト申し上げる此の意見又基づき二條へ直ち又取り入りたまふ。信只今此處の戦場の街とあらんぞ親王同じく若宮をも禁中へ行啓おし奉まつるべし。ト春長軒又仰せ付けられ彌々此處を最期の地と思し召しければ哀れよこそ覺えたれ然りといへども信家臣の中より寄手未だ幾ひ來らざるこそ幸ひといらへ此の間も早やく江州安土へ引き取らせたまひ重ねて旗を揚られいらん。信勢即坐し數万騎をおよび逆徒の退治後手の中より是れ亡親尊君への孝養何とぞか是れ又如んや。ト謀め奉まつる人も多くあります信忠卿頭を振つて曰ましく信斯のどとく謀反を企だつる者が宇治勢田その外詰りく又争で其の手配りをせざらんや假令此の所は落ちらるるどもヤツカ安土まで逃れ得らるべき慰むひよ落武者とあり

本 能 寺 合 戦

屍を路徑又腰さんよりの撃つ是れよて腹切り骸骨を畑とさる  
んよの如すト仰せある是れを承たまはりアナ勇ましき只今の  
仰せ流石の右大臣家の彦崎君ア、彦名君あるかあア、彦頭狂  
あるかあト大群を放つてやす者がありまする人々誰やらんと  
見てあれは是れぞ毛利新左衛門尉、福富平左衛門尉、菅谷九右衛  
門尉の三勇士あり何れも尙ほ群を揃へ 三如何も其の決  
心然るべし。トヤし上げる依つて評議既此の儀も相定まりま  
した合ふたる人々よ

野々村 三十郎 赤野七郎右衛門尉 國 平 八 齋 藤 新 吾  
坂井越中守 櫻木傳七郎 下方彌三郎(其弟)武田善太郎  
逆川甚五郎 服部小藤太 同六兵衛尉 水野九藏  
山口半四郎 堀傳三郎 河野善四郎 寺田善右衛門尉  
等あり尙ほ爰よ小澤六郎三郎猪子兵助等の助家も宿を取つて

本 能 寺 合 戦

ぞりましたが此の山を聞もあへず打ち物取つて駆け出すを宿  
屋の亭主袖も縫つて 亭マア、お止まんあさいまし中、  
もちまして是れより二條の新所へ入ッしやることの出來ま  
せん一ト先づ此の所をお落ちあさいまし。ト止めるのを兩人頭  
を左右よ打ち振り 西君臣の儀の然のあきものよてあるあ  
ト其のまゝ素肌も太刀を引提げ馳せ入ッたる志ざしの置さへ  
も感せぬ者のござりません折しも暫らくあつて午の刻ばかり  
又寄手一萬餘人水色も桔梗の紋ついたる旗押し立てヒク、  
と取り巻く此方の楯籠られたる御勢僅かよ三百人ばかり然り  
といへども義を金石より堅く守り命を塵芥よりも尙ほ軽く一  
人當千の勇士せもあれば我れ先きよと争を切つて出で此  
處を先途と相戦かふ迫込れての追ひ戻し四方を拂ひ八面も當  
り成ひの打たれ成ひの五人十人づゝ獲せ伏せ突き伏せて地上



本 能 寺 合 戦

忽ち血をもつて川とあすばかり死人積で岡のごとし然れども  
も寄手の目も餘る大勢あれハ斯打れるを事どもせず新手を入  
替へく、立たり中將殿以下ハ名を得たる面々死を決ての戦  
あれば少も弱る氣色なく一息吐てハ切て出で防ぎ戦ふ有様の  
宛から項王の勢ハを借樊噲の勇も斯やと計見はました茲も尾  
州の住人梶原左衛門尉が一子も松千代丸とて今年十三歳もあ  
りけるが此折しも病のため暫く臥てをりました己れが宿所  
もおいて草根木皮をもつて僅かハ一命を繋ぎとめをりました  
然るも御所中の有様を聞いて未だ幼少ありといへども追がハ  
弓矢の家も生れたる子でありますから家來を枕邊へ招き、松  
「如何もして我れを御所へ入れよ、餓たらくことこそ能ハねど  
も只だ臥しあがら敵の刃もかゝつて主君の御供やさん早やく  
其の儀を計らひ呉れよ。」苦しき息のうちより申します又右

本 能 寺 合 戦

衛門といふ家來是れを聞いて、又「夫れハお宜しくございませ  
ん假令へ御城中へお入れ申上るども此のハ身体よてハ其の詮  
もございませせん右大臣御父子こそ今逆臣のためハ侵させられ  
たまふども他ハ御連枝がたも在せば日あらずして逆徒御追討  
の備是れあるハ必定先づ夫れまでハ御療養あらせられ片時も  
早く御平癒もあリ其の際もこそ御忠節を盡されてハ如何ぞ  
さいます尤ども此度のところハ某御所へ馳せ入り此由を申  
し上げ貴君様の御名代も恐れあがら信忠卿の御供いたしひら  
んのト言ひ捨て、馬引き寄せヒラリと打ち乗り双鎧を合せて  
二條城へ馳せ付いたり寄手も打ち紛れ御所中へ割て入り信忠  
卿ハ何れも在すやと見渡せば廣間もあつて専ら防戦の御下  
知最中あり又右衛門ヤレ嬉しやと進んで廣縁も馳まづき、又  
恐れあがら吾儕ハ梶原松千代の從僕又右衛門といへる者もハ

本 能 寺 合 戦

らふ主人松千代こと大病にて足腰自由ならず然りといへども  
君恩の重きを頂たく上の假令へ腰抜でも御所うち死あんず  
らん事を私へやします其志しの剛ありといへども身体自由  
あらねの却て御前の御足手まどひと存じ堅く是を止めまして  
ござりませする就ての陪臣の身何ども恐入り奉まつる儀は  
へども吾侍主人の命も代つて御最斯の御供つかまつりたくア  
ツレ御許し下し置れませうあらば有り難き仕合も存じ奉まつ  
ります。信忠卿聞し召されハツと御落涙あされ 信いしく  
も松千代の一言また爾が申し條是れ兩ツあがら冥土への宜き  
土産父上よ遇ひおれ運上よて物語らん嗚や御満足と思し召し  
つらん只だ其の心底よて充分あり爾の其の大切ある主人を保  
護して會稽の恥辱を雪ぐん此の後よこそあるべけれ早や疾く  
疾く此處を立ち退けよ又右衛門是れを承たまひり 又然やう

本 能 寺 合 戦

ござりませすれバ吾侍主人も代つて一命を捨てまする儀は相違  
ひませぬか然りとて此のまゝ立ち歸らば松千代言ひ甲斐なく  
存ずるでござらふアツレ是非とも冥土の御供つかまつりたふ  
ござる 信鳴呼松千代よ又た爾ととき家來あり天晴れく然  
らば爾は是れを取らする間思ふまゝの働させよトあつて御手  
づから白柄の長刀を賜ふ又右衛門兩の手を延べて三度押し置  
だき 又有り難き御賜物屍の此の戦場も懸すども名代  
傳ふる一世の面目イア此の御業物の續くかぎり切つてく切  
り捲り花々しく討ち死よつかまつらん。ト言ひ捨て身を跳らし  
て庭上よ出でたる有り様宛がら獅子の岩上を飛んで灘の水を  
過るがごとく其の長刀おつ取り延べ右轉左轉圓満浮船浦波森  
の月或の水車八方拂ひ當るを幸ひ切つて廻れば突然敵數  
十人を薙ぎ伏せ或ひの突き伏せ暫らく防ぎけれ也奇手猛勢あ

本 能 寺 合 戦

れハ事どもせず込み入りまする間だ逐々九重の圍みのうちよ  
相果てましたるの天晴れの者此の忠節を感し陪臣たりとい  
へども阿彌陀寺の過去帳も三四人の間も書き載せられまし  
た然るも尚ほ残りたる面々爰を最期と防ぎ戦かふわひだ然し  
もの明智勢暫し責めあぐんで見えました此の時明智方又小賢  
しき奴あつて弓鐵砲の遠者を撰り近衛殿の館へ飛びあがり新  
御所を見下し差し詰め引き詰め散々射放ししまするゆえ櫓籠  
つたる士卒如何も勇ありといへども今の防ぐべきやうも亦く  
勢はひ盡きて御殿も火を掛け或ひの自害をする者もあり又ハ  
敵の中へ走り入り貫ぬかれて死するもあり信忠卿此の有様を  
テツと御覽あらせられ鎌田五左衛門尉忠光をお召しがあつて  
信今ハ早や是れまでと覺ゆるあひだ自害をせんと思ふあり  
就てハ爾介錯して屍骸をアノ炎の中へ投げ入れ我が体を隠

本 能 寺 合 戦

すべし。ト曰まふより早く雪の如く清らかある肌を押し脱せた  
まひ小刀を取りおはし左りの脇へツツと押し立て右へと引き  
廻し又た胸元より臍下まで堅まどツツと下へ突き引き切りたま  
ふ是れをさして十文字腹とや言はんか 信鎌田ト曰まふ  
聲も苦しげみこを見にました御年二十八歳二聲のうち鎌田  
五左衛門御首を打ち落とし御遺言も任せ炎の中へ入れ奉まつ  
る斯くて鎌田の一人ありども敵の首を取信忠卿の供養も備へ  
んと門外遙か又跳り出でけるも敵の早や引いて一人もあし斯  
るところへ鎌田が宿所の主人父子もろども駆けつけて是れを  
見宿ヤ貴君こそ愛度御人あり先づ 我が宿所へ参りたま  
へト左右の手を取つて宿所へ誘ひまする五左衛門大いゝあ  
せつて鎌田ヤ敵をらされ再び炎は入つて相果あ  
んト身を悶ゆるを兩人堅く押へて 爾ア夫ハ思し召し違ひ此

本 能 寺 合 戦

の敵の引くといふもの未だ天命貴君と歸せざるの所あり素より天より賜はる此のお命私と捨つべきあらず平とお止まりあさるやうと父子して種々意見とおよびました是非あく五左衛門も此の日の思ひ止り其の翌日阿彌陀寺へ至り腹切らんと覺悟いたしたる又く宿屋の主人容子を氣取つて太刀刀小刀まで奪ひ取り種々意見及びましたッコデ止を得ず此の家又養あはれ明智より殿しく搜索されましたが宿屋の主人聊さか是れある鎌田又昔し恩を蒙りしことあれば斯くまでよして一命を繋ぎ留めしを敵の捕虜とあるの歎かはしき事ありとて床下へ潜まひ又た五左衛門も負傷してをれば篤と療治を加へざれば世の中へ出でる事もあらず旁々其の意に従がって借からぬ一命を全たふいたし其の後ち中國より羽柴秀吉引返し來つて明智を同月十三日山崎の戦かひよ打ち滅ぼ

本 能 寺 合 戦

し人々の賞罰を正する折しも鎌田五左衛門我れこそ羽林の御首級を介錯せしものありとて今更証文の出し後れ出る譯も行かず又た出でれば其の時ナセ追腹をも切らぬと人の笑ひの種を醸するかれは是れよつて彼方此方を叩吟ひ尾州清洲の町へ來り町外れの安宿泊り變に習ひしまゝの金剛流の話を誦し或る一日其の聲々として法も適ひ聊さかも流みあく殊更ら能のうちに六ヶしき卒塔婆小町の話を誦し通るを人々指さし聲の宜けれども不忠の開山祿盗人の根元とや言はんも罵しらざるものございません是れも依つて子供等死にそくあいの鎌田五左衛門介錯すれども腹切らず何日まで一命が惜いのか大腰ぬけの不忠もの夫れで浮世の人々の助けを受けんと思ふから天道さまへお詫しろ天罰受けたる人非人ど啞し立てられ刺つさへ馬の草鞋やら草鞋やら取つての投げ、投げ

本 能 寺 合 戦

ての抛り石を打つ者もあれば食ひさしたる柿の真を取つて敵  
き付けられ遣へて踏眼めきく逃げ出だすを折しも忍び  
よて通りかゝりたる福島左金吾正則あり今此の体を見て  
福アリヤ何じやお側又候したる井原竹之助 井彼の者は天正  
十年六月二日右大臣家明智亂又亡びたまひ同日同刻二條河原  
よて遊れさせたまひし信忠卿の御介錯をいたしたる鎌田五左  
衛門とやす者でござる己が主人を介錯し餘る刀をもつて己れ  
が死ぬの常されど其處を逃れし不忠者ありとて小童どもよ至  
るまで彼の通り憎みまして是れを討つのでござる。正則是れを  
聞いて 正ア、否や、小童どもを制せ張良の辭も恥ある  
武士を使へよといふ詞あり其の身の斯くまで言はるゝども  
然やうお臆病者もあらざることを此の正則も知る所あり其の  
時の如何したか隠れたるものと見ゆる尤ども人又聞けば何や

本 能 寺 合 戦

らん餘儀あり事よて止まりしと言へり併し他所でも斯やうあ  
目よ合す奴があるか 武何れへ参りましても彼れを罵しり石  
瓦を磔よ致さんものございません。正則是れを聞き召し 正  
然るを我が領地へ参りしに諸所よ凌ぎがたくや思つて是れへ  
來りつらん惘然さ奴あり百石をもつて抱へよト仰せがあり直  
ちよお抱へよ相成りました御家來方諒むるといへども正則戰  
て是れを用ひたまはず横紙破りど名を取つたる猛烈ある正則  
家來どもが罵言する度とよ祿を増して五百石よまで取立て  
ました五右衛門涙を流し有りがたく心得をりましたるが時こ  
そ來れり秀吉高麗陣の折から以上七年戦かひがありました一  
度中和談があつて其の和談が破れ二度目が蔚山の籠城慶長二  
年十二月二十一日より明る慶長三年の正月三日まを朝鮮の蔚  
山の城よ糧道断切られ米一粒の扱て置て野菜もあければ進退

本 能 寺 合 戦

窮り己れくの乗馬を殺し是を食ひ或の己れが味方ある屍骸  
の肉を食ひ大將加藤清正相籠城の後野幸長彼の名代の蔚山籠  
城是あり是を聞や正則三里隔てたる水源城又櫓籠ありしが  
正則かある清正糧米又盡て甚はだ難越の趣き明の大軍二十五  
万人野又満山又満ち川又沿海を堅め宛然蟻の道ひ出る所もあ  
り殊又の大軍又圍れ城内の者ども定て難儀あらん依て兵糧を  
送り道にしたり思ふが容易き業で此の大役を任課すこと思  
ひも奇らす誰かある是れを仕課せんといふ者あきやト座中を  
きつと見渡したまへ並ぬる人々只だ黙然として誰れ一人強  
敵の圍みを破り此の使ひ又立たんといふ者もかく其の座開け  
て見えたり折しもあれ例の鎌田五右衛門進み出で 鏖私御前  
の御恩をもつて我が本國ある日本の恥辱を異朝へ雪ぐ心得あ

本 龍 寺 合 戦

り此の御使手前が相勤めるでござらふ。正則聞いて 正嘉しく  
も申したり我が鑑定を違へざるの天晴れの勇士あり何分頼む。  
トあつて横木瓜一文字の旗一流れ銀の辰り芭蕉の馬印又鏖  
兜を賜ひ其の勢八百人を連れ力士の兵糧一俵づゝを負ひ  
せ以上十俵の兵糧を持つて参りません是れ如何とされハ精で  
も車でも運送をいたすこと出来ません是れ依て八百人の兵  
士と手足のごとく使ひ敵を破つて其の間を濬り又打ち破  
つて其の間を横切り新しくして城内へ入らん心得でござい  
ます是れ又つて五左衛門主人又一禮終り斯りける折柄よこ  
そ武士の武士たる手練を見せんト鎧おッ取り追々來つて李  
の兵を破り再び呉維忠の兵を破り大手まで來て見れば如何  
よせん悉く討れて六十人とのみ相成りました五左衛門の鎧も  
折れ兜も打ち落され大袖ちぎつて投げ捨て草摺りの切れ兵糧

本 能 寺 合 戦

負ふたる人足りた力の者を撰み一人も付き一俵と定めしが只  
た三人も成りました然らば米の三俵あり城内の一万餘の兵が  
ありますとこころへ大手を向つて大音揚げ鎌福鳥正則よりの  
使者鎌田五左衛門兵衛是れまで持参したり御受取たまひれや  
ト呼ひりますれば稲や城内搖ぎ渡つて見にました然りといへ  
ども只た三俵柴又帝釋天の御洗米を頂たくやう一粒づゝも  
押戴かあければあらん有様物の哀れも是れも越したのござり  
ません此の時清正鎌田の勇を賞し城中へ引き入れんとするよ  
五左衛門申すの鎌吾儕の日本の恥辱を此の朝鮮も雪ぐされ  
バ六十人の者どものお隠まい下さるやう願ひますアツレ吾儕  
の敵中へ躍り入つて花々しく討ち死なを致し二心あきを現  
しす此の段御見届け下し置かれ後日首尾よう御歸朝の折か  
らよの御朋友がたよ御物語り下され鎌田の人々がましく働ら

本 能 寺 合 戦

て討死したりと願ひますト言ひ捨て胸も及も能のござくよ  
成りし太刀を振り馬も愈々疲れ進み得がたきを充分に障り  
立て淵巻たつたる敵中へ躍り入り美事の最期を遂げましたる  
の人の見掛けも奇らざるものと此を言ふべきでございます是  
れを亦た見ましたる正則も顔ぶる名將でございます諸お話し  
戻つて二條城まおいて討死おしたる人々を尋ねるよ

- |          |       |         |       |       |   |      |
|----------|-------|---------|-------|-------|---|------|
| 津田又十郎    | 同     | 源三郎     | 同     | 勘七    | 同 | 九郎次郎 |
| 同        | 小藤太   | 菅谷九右衛門尉 | 子息角藏  | 菅谷勝次郎 |   |      |
| 猪子兵助     | 村井新長軒 | 子息清次    | 同     | 次右衛門尉 |   |      |
| 毛利新左衛門尉  | 子息岩丸  | 齋藤新五郎   | 坂井越中守 |       |   |      |
| 赤坐七郎右衛門尉 | 舍弟助六郎 | 櫻木清七    | 國平八郎  |       |   |      |
| 服部小藤次    | 長井新太郎 | 野々村三十郎  | 鎌川兵庫頭 |       |   |      |
| 下石彦右衛門尉  | 下方彌三郎 | 舍弟喜太郎   | 瑠傳三郎  |       |   |      |

本 能 寺 合 戰

種村 彦四郎	春日 源八郎	寺田 善右衛門尉	福富 平左衛門尉
桑原 吉藏	舍弟 九藏	坂川 甚五郎	小澤 六郎三郎
石田 孫右衛門尉	宮田 彦四郎	平野 新左衛門尉	同 勘右衛門尉
飯尾 茂助	村井 新左衛門尉	服部 六兵衛尉	高橋 藤九
佐々 清藏	山口 小辨	同 半四郎	村瀬 虎九
小川 源四郎	神戸 次郎作	大脇 喜八	犬飼 孫藏
河野 善四郎	石黒 彦次郎	越智 小十郎	淺井 清藏
水野 宗助	同 九藏	井上 又藏	賀藤 辰九
竹中 彦八郎	河野 興助		

等あり茲に松野平助といふ者の西美濃の住人にて伊賀守の家來でございませす文武又達し潔白の武士の由聞にありました依て信長是れを召し抱へ千貫の領地を下し置れました即ち此度も信長公に従がって上京いたしましたが武運長久を祈らんと八幡へ参籠して此の折から居合せませぬ日頃御厚恩を蒙る身が此度の御大事も外れること本意なき仕合せ是れ神明も見離され神も詣するも加護し玉ならぬかと怨み思ひ此の上の惟任を頼み何處までも彼れに従がひ油断を伺がひ刺し違ひて亡君の恩を死後報じ奉まつらんものをと胸臆も納め齋藤内藏助も近づき日向守の所へ毎日出仕及ぶといへども敢て近寄ること能はず剩さへ敵是れを察し殺すべき沙汰灰かみ聞えければ否や〜知られては却って不覺を取らん此の上の信長公への御爲め追腹切って果るより外ない。美とどよ十文字腹を掻き切って此の由を書置又殘し自から咽喉を貫ぬいて相果ました是れを明智大さ賞して其の屍骸を懸篇と祀りました又土方次郎兵衛といふ者がありましたが白川の邊よをって此の騒動を聞き、コソ主君の御一大事と双鎧を

本 能 寺 合 戰

祈らんと八幡へ参籠して此の折から居合せませぬ日頃御厚恩を蒙る身が此度の御大事も外れること本意なき仕合せ是れ神明も見離され神も詣するも加護し玉ならぬかと怨み思ひ此の上の惟任を頼み何處までも彼れに従がひ油断を伺がひ刺し違ひて亡君の恩を死後報じ奉まつらんものをと胸臆も納め齋藤内藏助も近づき日向守の所へ毎日出仕及ぶといへども敢て近寄ること能はず剩さへ敵是れを察し殺すべき沙汰灰かみ聞えければ否や〜知られては却って不覺を取らん此の上の信長公への御爲め追腹切って果るより外ない。美とどよ十文字腹を掻き切って此の由を書置又殘し自から咽喉を貫ぬいて相果ました是れを明智大さ賞して其の屍骸を懸篇と祀りました又土方次郎兵衛といふ者がありましたが白川の邊よをって此の騒動を聞き、コソ主君の御一大事と双鎧を



本 能 寺 合 戰

わふッて馳せ付け、れども時刻移り二條の合戦も外れ今  
詮方あしとて自害を遂げましたるは是れ眞の武士と言ふべき  
でございます、斯くて惟任日向守光秀の信長公御父子を討ち奉  
まつり直ち江州へと急ぎけるほど、當日申之刻も勢多も若  
陣し山岡美作守同對馬守兄弟かたへ使者を立て、光秀へ同心あ  
らば即ち人質を出さるべしと事もあげ申し送りました山  
岡兄弟素より義の深き者かれ、信長公の御恩を報じ奉つらん  
よ、今般打ち死なせであるべきか、下議定一決して即ち其の  
使者を切つて捨て勢多の橋を焼き落し山中へ引き籠りスツヤ  
來れど待ち構へたり惟任光秀案と相違し手を失ふは坂本城よ  
ろ引かへしました、扱て此の日の未の刻ばかり、惟任謀反の由安  
土と聞に何とやらん、幸さわたりますれど一大事の儀あれ、恐  
れ懐み何とも言出さんやう致せども落武者ヒッ、と逃來

本 能 寺 合 戰

り人民大い驚いて何であらふや、ト喧すしく噂さいたし大い  
又動搖の色相見え、ました斯る所ろ、蒲生右兵衛太夫が家來早  
馬又乗つて信長公御父子こそ打れさせたまひたり、然ども御城よ  
於て、堅固あるべき間下々騒申すナ、ト下知して通し聲、扱こ  
そト町中ドツと聲を揚げ、是れ如何ある御事や、父母の恩よ  
り深き主君を扱も惟任めが打ち奉まつることよ、ト老若ども  
泣き悲む聲、街衢又充て哀れといふも、愚あり同じく二日の夜、  
入て山崎源右衛門が己の家、又火を掛け居、山崎へ引退く蒲生  
右兵衛太夫大い歎息し、蒲生、イヤ、スやうある上、御臺所  
公達其の外女房たち、皆々日野の谷へ御立退き、然るべく、ト申し  
上げ子息忠三郎氏、細かたへ乗物、五十鞍置馬百疋、傳馬二百疋を  
用意して、急ぎ腰越まで差し越すべき旨申し遣、し、明くれ、三  
日の卯の刻、又逃がれ、ました此の際、御臺所、の、臺、此の城を開

本 能 寺 合 戰

き參らせ上り天守の寶物、金銀等を取つて其の後ち城中より火  
を掛け退きたまへ。ト女房等より仰せられまするのを右兵衛太  
夫申されけるに、右信長公年來御心を附られたる天守を假令  
へ此の姿に置き難いといひ申せ此の蒲生が所存として争で燒き  
亡ぼさんと思ひも寄らず惟任の人非人あれバ或ひに燒き擲  
ふことどもあらん萬一燒かすして己が幸はいふすといへども天  
命といふ事あれバ何ぞ世を保ち候らふべき次第に財寶金銀等の  
こと取り申すに於ては怨又耽つて其御方様の御名を汚し奉ま  
つらん聊さかも手を付けべからずとて安土山をバ木村次郎右  
衛門尉は渡し各々相具し奉まつて我が居城日野へとぞ立ち  
退きました寶潔白ある義士と世舉つて譽ざるにございませ  
ん既此の時此の日本の津々浦々に至るまで天地を返すの  
有様でございませす階て茲に三法師丸と申し上る城之介信忠卿

本 能 寺 合 戰

の御公達此の御方様の安土城ありしが事起るや否や前田徳  
善院立以法印長谷川丹後守入道宗仁其の他頗ぶる者十二三名  
を以て物の是非を言はず蒲生へも語らずして只だ一封の書面  
を殘し我々此の公達を保護せし奉まつりひらふ上の御安心を  
るべくと申して御臺所より先き日野城へ御着相成りまし  
て御安座おらせられました是れ後ちよこそ秀吉公此の君を以  
て御世に立てんとす柴田瀧川佐久間是れを否んで信孝公をも  
つて御世に立てんとす争ひは是れ眼ヶ嶽の戦かひの根本  
又相成りました爰また關八州の管領瀧川左近將監一益の上  
野國鹿嶋の城にありて上下に能く因み其の勢はひを盛んまし  
ました此の一益といふ人の常と信長公の仰せより我が家より  
て一益あるもの瀧川ありと日まふ爰において一益といふ  
名を號ました斯るところへ天正十年六月七日飛脚到來して信

本 能 寺 合 戰

長公こそ去ぬる二日惟任がため弑せられたまふとの密狀を得たり一盆大い驚ろき紅涙双眼み充ち手み持ちし扇を取り落し稍や暫らく悶悶してをりしが稍あつて甥の瀧川義太夫を呼び扱も大切の事あり云々斯やうくどす義太夫只だ辭さくして呆然たり此の時一盆の言ふよ結句此の事の明らか致したはうが宜からふと思ふ如何又隠しても隠し謀するものあらず察る知られてより語るの却つて宜しくさきものありとて當願橋ある人の己が家來他人の嫌ひかく一同を城内へ呼び實の云々斯やうありと信長公の御覽變惟任日向の反逆を確かす明し我れ此の城もあるべきされども斯ることを承たまはれれば此のまゝ爲しがたい就ての後々を各々み存するト申しまするト是れを聞いて却つて一同同心いたし斯ることに密が上も密も密すべきを公然と物語るといふの實も天晴れの

本 能 寺 合 戰

良將より我々信長へ對し忠を盡す瀧川殿への義の一ツありと一同無二の味方とありました案するより産が易く殊の外スラと行きました依て暇乞ひの酒宴をいたし身送りの面々大勢も送られて出る途中又おいて相摸國小田原の城主ある北條左京大夫氏政これを遮ぎり戦かふがゆゑ上京の間も合ひません又柴田勝家の上杉との戦かひも暇あくる止を得ずして是れ亦た上り來る事だも相能はず併し瀧川の戦かひの中も諸方へ手を廻し上州箕輪の城主内藤大和守新田の城主由良信濃守松山の城主上田安獨齋忍の城主成田下總守館林の城主長尾新五小幡の城主小幡上總守倉我野の城主倉我野淡路守深谷の城主深谷左兵衛尉是れ等残らず瀧川の親密の味方もあり却つて國を守り或は信州で木曾左馬頭義昌眞田伊豆守是等も残らず瀧川の下知も應ずべき旨を答へました。

本 能 寺 合 戰

緒また茲も前回より上り上りしたる徳川家康公は此度駿河國  
拜領の傍禮として上洛をせられ信長公より道路橋梁のこと宜しく沙  
梅雪を召し連れさせられ信長公より山口太郎兵衛是れを奉行とし  
汰しゆせとて高野藤藏長坂助一山口太郎兵衛是れを奉行とし  
て至つて町噺の取り扱かひでございませぬ然るも江州安土城外  
惣見寺に於て天正十年五月十九日幸若八郎九郎又舞を舞ひせ  
丹波の梅若太夫又能を仰せ付けられ終日の遊興を盡し家康公  
を慰さめ次召し連れたる面々が旅中の苦勞を忘れさせし  
ふやうよとて機敷を營み緩々と見物致されました此の時穴  
山梅雪の能の達人おれは幸若が舞を見て興入り己れも一さ  
し舞ひて徳川公へ興を添ました此の穴山梅雪の武田の舊臣

第 十 回

變を聞いて家康公を逃る  
袂を分けて梅雪道も登る

本 能 寺 合 戰

よてありしが武田亡びて始終徳川公へ随從してをります夫れ  
より家康公参内のため上京いたし洛中残るところ赤く心静か  
よ一見を遂げたまひ長谷河竹を案内者よ添はられ織田七兵衛  
尉信澄丹羽五郎左衛門尉長秀大坂において振舞を致し種々の  
傍觀應を蒙り名よしあふ天王寺等を傍見物あり住吉明神へ  
傍参詣堀の大港を傍見物其の頃日本一の大港の此の泉州堀で  
ございます依つて傍旅宿を設け東西南北を傍見物の折から京都  
より注進のあるに去ぬる二十九日信長公上洛をあしたまひ  
西の洞院本能寺へ傍旅宿又相成りしらふとの趣ふきあり家康  
公の家然らば傍機嫌伺ひとして本多を名代遣はすべしとあ  
つて平八郎忠勝へ命ぜられました平八郎長こまつて即日堀を  
出立し四五人の郎等を連れて既又牧方まで上つて参ります  
ト向ふの方より何者とも知れず塗笠を冠れる者馬上よて平一

本 能 寺 合 戦

敵も駆け来る其の馬の乗りやう中へ烈しく忠勝も馬乗り違へる折から彼の者笠を引きむしり馬より飛び下り大地へ手を穿いて後ろへ笠を投げ捨てたり忠勝不審晴れず何人あるやと目を注ぐれば其の者亂髪にして第一言語も一向相分らず何やらん急がまゝ顔色變たる其の容子の尋常あらざれば忠勝馬を止めて「何ものあるや」尋ねました彼の者漸々彼茶屋四郎次郎でございませす 忠何ぞあつて斯やうな狼狽るか未だ彼の者答へも出来ざるうち忠勝馬上又延び上り京都の方をキツと見れば黒煙り天を覆ひ尋常あらざりける有様あれば彌々驚ろいたる時又彼の者やうく息を吐き 茶恐れながら將軍家御旅宿本能寺へ惟任日向守反逆つかまつり數万の大軍をもつて取り詰め右大臣家御生害本能寺の一陣の煙りと相成り彼の煙りこそ即ち其の徴証でございませす最早や二條も落居と相見

本 能 寺 合 戦

に京都一面の大變若しや大軍徳川公を慕ひ奉まつらんも計りがたく此段御注進つかまつります物も動ぜぬ本多忠勝も是を聞いて大い驚ろき捨鞭あげて泉州堺へ引返し家康公へ斯くと申し上げます折節此方の堺の妙國寺へ入らせられ名代の蘇鉄を御見物あらせられお茶あそ召し上つて漸く御旅館へ歸らせられたる所かれは且つ驚ろきたまひ且つ呆れて暫し御辭もあし然るところへ茶屋四郎次郎も漸やく馬を飛して來り此趣ふきを申し上げる家康公の只だ諾づきたまふのみ兩眼を閉ぢて御腕を組み御頭を垂れて御落涙の御容子御前又並ぶる酒井大久保、榊原一同も顔を見合せ口を結んで辭あし此の際また後藤總殿之助、後藤庄三郎、何れも徳川家の御用を相勤める者ども右大臣家の兇變を告げ奉まつる爰及んで酒井左衛門進み出で 酒「恐れながら君の御思慮の如何と渡らせられる

本 能 寺 合 戰

か伺がひ奉まつる。家康公、御頭を上させられ、家其方、如何心得る。酒、恐れながら早々御用意あつて、京都へ御引返しおらせられ。逆臣、光秀を亡ぼし、右大臣家の吊らひ合戦然るべしと存じ奉まつる。ト言ひながら座中を見廻し、酒併し各々方の御所存、如何かある思し召しか詳びらか承たまりたい。榊原、大久保、辭をそろへ、兩、酒井氏の申さるゝ所、某等も同意でござる併し、御前の思し召し、如何か渡らせらるゝや。此の時また、御注進、惟任、日向守、假又將軍職を賜り、専ら御當家様を失ひ奉まつらん。の所存、又候らふ然れば、諸方へ觸れ廻し、徳川を討ち取つたる者、又の拾萬石、貴賤を論ぜず、與ふべしとの赴ふさま、て是れがため、在々一面、忽ち御敵と相成り程、かく大軍、此の所へ取り詰り、候らふトの注進、あり是れを聞き召し、案、今、是非、あし、爾等、勇氣、又逸まる、あ是れより、京都へ引返したりとて、僅か五十人

本 能 寺 合 戰

雜兵、合せて百五十人の小勢をもつて、争で光秀の大軍と一戦、及ばるべき殊、又日向の軍法、あか、一寸も抜け目、あるまじ、然れば、愁と動いて、路頭、又屍を曝さんより、率、此の所、又おいて、一同、潔きよく、生害するより、外、あるまい併し、忠勝、爾が所存、何うちや。此の時、忠勝、忠、恐れながら、御前の思し召し、ハト相違、仕まつるか、ト存じ奉まつる。第一、酒井、大久保、榊原、何ゆゑ、然や、う、あ、無分別、あることを申されるか、慮、外、あ、が、某の心得、ハ悉く相違、つかまつる、一同、辭を揃へ、二、ツ、其許の所存、如何でござるか、早う、大軍、是れへ取り詰り、詰り、詰り、詰り、如何か致される。忠勝、辭を改ため、忠、先づ一通り、御聞き、あ、され、是より、京都へ取つて、歸さ、バ、俵の鼠、夏の出、飛んで、火、入る、壁、隙の通り、五十や、百人、軍法、手、練の、光秀、殊、更ら、大軍、戦か、ひ、思ひ、も、よ、らす、然れば、とて、一同、生害、致さん、あ、と、ハ、御短慮、至、極、死、ハ、一旦、あ、して、易し、神君、此、時

本 能 寺 合 戰

又家シテ忠勝の如何も忠然バ公の是より御人數を召具し片  
時も早く此所を開られ御本國三州へ御立退然べく三州へ入ら  
れ亦ハ二万や三万の御軍勢あり大軍を調へし上ハ再たび御上  
浴あつて逆臣を亡ぼしたまへんこと何の恐るゝ事やあらん神  
君お笑ひさされ如何も忠勝爾も似合はぬ甲斐あきことを  
申すものか亦是れより三州へ本街道を儘かあ人數で落んこと  
思ひも寄らず光秀の軍法聊さか猶豫あらんや伏兵のため又盛  
殺さあらん忠仰せ御尤もよ候らへども本街道の能ふま  
じ是非抜け道間道を傳ひたまふより外ハあしと存じ奉まつる  
家如何もや忠勝何事を申すぞ家康始め爾等一同初めての上  
浴あり是れより三州への抜道を誰れ知る者あし忠勝笑つて  
忠恐れながら是れより伊賀越へ掛らせられ伊勢へ入り尾州師  
崎の鼻を廻り御船よて三州作の島まで涉開きあらハ岡崎へハ

本 能 寺 合 戰

程近し家イヤ忠勝其の伊賀越より伊勢へ出る間道の誰れあ  
つて知る者あし惣じひも知らぬ山道又踏み迷ひ名も無き野武  
士の手よかゝり道路よおいて首を汚し末代よ汚名を残さんよ  
り此の所よて潔きよく死さん忠イヤく恐れながら御心狭  
きことを曰まふものか漢土天竺ハ卒知らず我が日の本の内  
からハ方角の分らぬことやあらん日の出る方を東と定め日の  
入る方を西と思ひ鯨ぬる磯又ハ漁夫あり猪臥す野邊又ハ獵人  
あり御案内ハ忠勝御請合申し上げます早々御心を決させた  
まへ御用意ト威丈高まありて申し上ます神君是れを聞  
し召し家然らば忠勝道中案内をつかまつるや忠屹度傍請  
合つかまつる家其方が請合ふあらば一同忠勝よ任せよや然  
らば早う案内せよ忠恐れながら大勢を召し連れさせられま  
するハ却つて禍わひの基でござらふかど存じ奉まつる傍身近

本 能 寺 合 戰

き者五十人ばかり陪臣の者共是れは従がよ及ばんから  
思ひく姿を變して伊領國へ歸るやう沙汰あつて然るべ  
くを存じ奉まつる家然らば爾がやす任すべしとあつて其  
の趣きを達せられる各々名残り惜げ涙を流す實は武士の戰  
場泣くといふもの斯る際でござりませう儲て姿を變へ參  
州へ歸る面々用意をいたし己が自在ある勝手次第立ち退き  
ましたるの實は秋風の木々の梢木葉の散るごとく各々立  
ち退きました爰は甲州より降参いたしたる穴山伊豆入道梅雪  
駿州小島の城主一万石此者隨行いたしてをりましたが穴  
早考がへ見れば伊前も手前がお供をして伊賀越へ落す  
の却つて禍わいの基でござりませう伊賀代も此の中よ  
遠ざけられる伊方もござりませう伊賀代も此の中よ  
ります私一人とあれば仮令は光秀の兵も出遇ふとも我々ごと

本 能 寺 合 戰

きものを打つべき謂れもござりません又た其の時よ何どか  
工風を回らし辨舌をもつて其所を立ち退きます伊前一刻も  
早くお落ちあらせられて然るべきでございます餘ある間道  
を大勢よての却つて伊前も相成りませぬ是れより伊前  
を頂戴いたし別の道より参りませう根が大恩を受けた武田を  
後よして徳川家へ降参いたしますと云ふの道よ背けたもの  
でありませすから……元來武田の滅亡といふもの長坂長閑齋  
跡部大炊介是れも勇將たる穴山入道此の時家康公家是りや  
梅雪苦樂を共にするの主従の間だ我等も同道したら如何であ  
らん梅雪やすすの梅イニ夫れは却つてお邪魔もありません  
伊無益のこととござるから分れを致しませうソコ徳のま  
よの扱穴山の心中我を見捨て己れ一人助るの丁簡と見え  
り然とても頼がたき人心ト聊さか伊憤はりのお模様も見まし



本 能 寺 合 戰

たが寛仁大度の君されば何をも仰られず 家強て別れたくん  
ば其の意も任せよ 梅有難き仕合もござるト取ものも取敢ず  
仕度を致し己が郎等七人ばかり召連れ堺の妙國寺を逃出し如  
何ももして一命を助りたし今ごろの徳川殿の一揆のためは  
生害あらんすらんヤレ嬉しやト三里ばかり来りし折しもあれ  
俄か又関の聲震動いたし在々村々一面竹法螺吹き立て半鐘を  
摺りあらし竹鎗を持ち其りやこそ落人徳川も遠ひあし討ち取  
れくと押しかゝる宛がら出来秋の跡もて田毎の水を落すが  
ごとし穴山驚ろいて 穴イヤイヤ 各々人違ひあるぞ決して徳  
川よりあらず徳川殿の伊賀越を引取り参ッたり我れ甲州の  
穴山梅雪である斯く大聲も呼りますれと素より集まり勢の  
農民あれ耳も更も聞き入れず無二無三も打つてかゝる穴  
山是非なく冠れる笠を取つて 穴是れ見よ我れ此の通り坊

本 能 寺 合 戰

主だくと言ひあがら頭部を振り廻す農民等吐やきエ、面  
だ打つて仕舞へ斯ういふ時よの徳川殿坊主もあつて逃るも知  
れねへッレ打ち殺せ夫れ打ち殺せト八方より追取り巻き竹鎗  
をもつて穴山も附従がふものを突き殺す梅雪止むを得ずいた  
して太刀の鞘を拂ひ 梅イヤデ此の上の肥桶くさき芥くためら  
皆殺しよして呉れん 農ヤア、ナヨコオオ其の一言農民の油を  
絞り突ぐるひの其の揚句の斯うあるものと覺悟をしるト三方  
より突いてかゝる哀れむべし梅雪突然も突き倒されて途も土  
民のためは首を取られました  
當今の世もても餘り狡猾すぎますト却つて義を失ひ  
斯やうな最期をするものであります然るくとも必らず失  
敗するものであります  
皆て農民の此の首を打ち取り京都所司代三宅式部かたへ馳せ

本 能 寺 合 戦

参じ徳川殿を討ち取りましたといふことを申し立て兼て十  
石下し置く、伊觸もあれは速やか又頂戴いたしたといふ三  
宅も大きき驚いて 三「夫れの手柄あり其の首是れへト取ッて  
熟々ど見 三「是れの大さき違ひあり甲州の穴山梅雪の首あり  
我等も兩三度會つたこともある徳川と穴山と川はどの  
違ひだ 農「然やうあらば穴山の穴の縁もあれは賣めて穴埋  
伊褒美を頂戴したく願ひます 三「イヤ、斯やう首で  
賞を遣ひす譯まらねへ骨折損の草臥さうけ斯やう首の  
汚らぬしい欲くバ持つて立ち歸れ。農民一同詰らぬ目。あッ  
て 農「、飛んだ穴で損をした穴忌々しい目又選つた穴かし  
こ人は語るさ  
新ん歌も有つたッけが今又當つて思ひあたる坊主九儲けで  
穴を出て穴に入るまで穴騒ぎ穴恐ろしや然の世の中

本 能 寺 合 戦

のあくして九損だト思ひたらしく、農民の取つて返しました  
此方ハ徳川源公主從五十人堺の妙國寺にて聊さか食事をば  
此處を御立退き又相成り忠勝の例の蜻蛉切と銘けたる大身の  
鎧を小脇に挿込み異ッ先立ち堺より在へ這入りました然る  
又道二筋あつて何方へ行くが是あるや非あるや頼と辨まへが  
だうござりますすッ見れば向ふは小さい藪家があつて五十ばか  
りの男が鎧砦を敲いてをりました此の者を忽ち取らへ 忠  
此りや其方我れ、を伊賀越の道へ案内せよ褒美の與するか  
ら。彼の者驚ろき 彼「夫れアハ私よの行きましねへ 忠「何で  
然やうやすか 彼「何ッだッて今日ハ又た京都軍が始まつた  
と聞きました村中の者の残らず逃げ去り子供まで一人もをり  
ましねへ徳川を打ち取れば大した褒美の出るといふ事です  
屋どのから觸があつて残らずお役も當り私が伴までも出まし

本 能 寺 合 戦

た私等も徳川を捉へやうと思つたが腰が痛んで歩行くことが  
出来ず賣て此節から草鞋でも造れば錢もあると思ひ此の通り  
賊を敵いてゐます足腰が違者から人又負けぬへ日頃の氣性は  
非行くんだが據所なく家もあらず忠勝聞いて扱て是非あし然  
らば是れより伊賀越へかゝる道の何れが宜からふ我等の明智  
の臣あり矢張り徳川を討たんがため討手のものだ 彼ハイ然  
やうでございませすか 苦勞様で…… 恐れながら是れより左  
の道へ取つて入ッしやれば尊勝寺村尊圓寺村と申す或ヶ村を  
お通り遊ばし夫れより道の幾筋もございませす申し上げて  
くつて中へ分りませせん先づ二ヶ村をお通りおされ又た所の  
者もお聞あすつて入ッしやるが宜しい。ト大地へ手をついて頭  
を垂れました依つて忠勝此の所を過り二ヶ村を越へ松原の道へ  
出る道の四筋あつて一向分りませせん只だ小笹生ひ茂り雑木の

本 能 寺 合 戦

所々も生へ聞きたくも人もあし如何せんト躊躇うちや向ふ  
の方より六十ぐらいの男薪を背負ひ來る忠勝見るより大音揚  
げ 忠此りや只今此の邊を徳川が通つたであらふ 老イへ私  
の一向存じませせん 忠我々の推任將軍の命よつて徳川を追  
ひ討つものあり遠州濱松への何の道を取つて行くが宜しから  
ふか定めて伊賀越より伊勢へ出るが願だらふト思ふが何うだ  
案内をして呉れる 老ヤ夫れハ 伊勢様でございませすヨ  
マクレ親父足も遅ふございませす先づ 此方へ入ッしやいま  
しト先へ立ッて山路を越し二里ばかり來て此の所までハ二三  
度参りました私も昨年當所へ参りましたもので此邊の一向存  
じませせんアノ水音のゴフと聞えますのが木津川何れ川を  
お越があつて又たお尋ねが宜しうござりませすの手前何うか  
是れよてお暇を願ひたうござりませす。忠勝一聲待てー 老へ

本 能 寺 谷 戰

エ。老人驚ろいたる容子、其のうち追々家康公始め奉まつり是れへ續いて参りました。忠、サ今の暇を遣ひす行け……。老人、老有り難ふござりまする。ト一禮して行かんとする脊後より忠勝大身の鎧を捻つてアツヤ老人を一突、又突かんといたする。其の鎧一向前へ出でず忠勝不思議と後を見れば家康公鎧の石突きをキツと捉へ、家ヤレ待て忠勝何をが致す。忠、恐れながら韓信月夜又樵夫を切る例もあり此者を生し置けば万一跡より追手が参り某等を尋ねるべ又た物語りを仕まつらん然すれバ此の街道御立退きと忽ち相分り申さん大功の細理を顧り見すイヤ免われ、と再び鎧を捻つて突かんとす源公是れを押し止めたまひ、家、逃まる者忠勝、生死命あり如何んぞ此の者も寄るべきや我が運あくバ此の者を討ちしめて本國へ引取れまじく天運未だ盡さざれば假令へ此者を生したりとて何

本 能 寺 谷 戰

の仔細やあらん夫れい免も角も幼年より此の家康の不仁あること聊さかも好まんぞ助けて歸せ下郎もせよ罪なきものを殺すといふ法やあらん罪ある者い是を助けず且つまた天運の恵みをもつて家康助かることもあらん左衛門、用意の金を與へよ。と有り難き仰せ此方い知らぬが佛心の老人耳も疎ければ此の事をも聞取れず殊々薪を背負ひ後の素振りい少しも知らずトホく行くのを、左、ヤヨ老人待て、其の重荷を負ふて二里餘の道を案内すること氣の毒あり、老、イエ何ういたして漸々取り集めた此の鹿菜い道端へ置けば他人も取られませ起るから寐るまでが勸と思ひ脊中い荷の絶えたこといございません左、嗚呼ア氣の毒事あり是れい其方へ褒美い遣ひす。金を貰ひました事あるより老人涙を流し跡振り返り大地へ跪まづき涙と共い拜んでをります。臣下の人々此の涉仁徳を見て共い涙